

常楽寺柿木田1号墳

－主体部の内容確認調査－

2023

出雲市教育委員会

常楽寺柿木田1号墳

－主体部の内容確認調査－

2023

出雲市教育委員会

序

本書は、出雲市が2021年度に常楽寺柿木田1号墳の主体部を対象に実施した内容確認調査の成果をまとめたものです。

本書で報告する常楽寺柿木田1号墳は、出雲平野西南部の神西湖南岸地域に位置します。2019年度および2020年度の一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う発掘調査では、古墳の墳丘規模や構造を把握し、また後円部上に3つの主体部の墓坑を確認しました。古墳時代前期末から中期初頭に築造されたと考えられる常楽寺柿木田1号墳は、湖陵町内において最も古い時期の前方後円墳である可能性があり、出雲平野の西南部における古墳時代前期の様相を解明する重要な手掛かりになる発見となりました。

今回の調査は、後円部上に設けられた主体部の構造や構築状況を把握する目的で実施し、主体部の埋葬施設である木棺内の床面に礫を敷いた状況を確認しました。棺内への礫敷は、これまで日本海沿岸の島根半島東部や近畿地方北部、九州地方北部などで集中して見つかっています。常楽寺柿木田1号墳の調査成果は、神西湖南岸地域が当時日本海とつながっていた入江の神西湖を舞台とした水上交通によって、日本海沿岸の他地域との交流や交易が盛んであった様子を具体的に物語っています。

本書がこの地域の歴史を解明するための基礎資料として寄与するものとなることを願います。

また、出雲市としては、この貴重な文化財を後世に伝えるために調査・保護・活用に尽力してまいります。

最後になりましたが、発掘調査および本書の作成にあたり、多大なるご理解とご協力をいただきました地元住民の皆様、調査指導者や助言者、および関係機関をはじめ、各方面の方々に心からお礼申しあげます。

2023年3月

出雲市教育委員会
教育長 杉谷 学

例　言

1. 本書は、出雲市が2021（令和3）年度に実施した常楽寺柿木田1号墳（島根県出雲市湖陵町常楽寺940-5ほか）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する事業年度は下記のとおりである。
2021（令和3）年度 発掘調査・整理作業　2022（令和4）年度 整理作業・報告書作成
3. 発掘調査および整理作業・報告書作成は以下の体制で実施した。

〈2021年度〉 事務局	片寄友子（出雲市市民文化部 次長兼文化財課課長）
	大槻智徳（ 同 文化財課 主査）
	須賀照隆（ 同 係長）
調査員	幡中光輔（ 同 主任）
調査補助員	加藤章三、吉村香織（ 同 会計年度任用職員）
発掘作業員	伊藤貴敏、江角和樹、昌子守男、田邊宏行、寄廣和人、渡部和恵
〈2022年度〉 事務局	片寄友子（出雲市市民文化部 次長兼文化財課課長）
	吾郷尚志（ 同 文化財課 課長補佐）
	須賀照隆（ 同 係長）
調査員	幡中光輔（ 同 主任）
調査補助員	加藤章三（ 同 会計年度任用職員）
整理作業員	妹尾順子、中島和恵、前島浩子

4. 発掘調査や整理作業にあたって、次の方々および機関からご指導、ご協力をいただいた。記して感謝申しあげます（敬称略、所属は当時）。
国土交通省中国地方整備局松江国道事務所、島根県教育庁文化財課、島根県教育庁古代文化センター、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター、湖陵コミュニティセンター
赤澤秀則（松江市立鹿島歴史民俗資料館館長）、稲田陽介（島根県教育庁文化財課企画員）、今福拓哉（島根県教育庁文化財課主任主事）、岩本 崇（島根大学法文学部准教授）、内田律雄（島根考古学会会員）、角田徳幸（島根県教育庁古代文化センター長、出雲市文化財保護審議会委員）、中村唯史（島根県立三瓶自然館学芸員、出雲市文化財保護審議会委員）、西尾克己（出雲市文化財保護審議会委員）、花谷 浩（出雲弥生の森博物館館長）、曳野律夫（島根考古学会会員）、松本岩雄（元島根県立八雲立つ風土記の丘所長）、渡辺貞幸（島根大学名誉教授、出雲弥生の森博物館名誉館長）

5. 本書の作成にあたり、下記の方々から玉稿を賜った（敬称略）。
中村唯史（島根県立三瓶自然館）、渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）
瀬戸浩二（島根大学エスチュアリー研究センター）
6. 本書は、職員の協力を得て幡中が編集した。各章の執筆は、文末および下記に示す。
第1～3・5・6章（幡中）、第4章第1節（渡辺・瀬戸）、第4章第2節（中村）

7. 本調査で実施した写真測量および空中写真的撮影は、株式会社テクノシステムに委託した。
8. 本調査における3次元レーザー測量は、株式会社TDMテックに委託して実施した。
9. 本調査の自然科学分析に係るPCN分析（全リン分析およびCN分析）は、日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究C（21KK00989）の成果の一部を援用している。
10. 本書に掲載した遺構・遺物の実測図は、調査員および調査補助員が作成した。
11. 本書に掲載した遺構・遺物の写真は、職員の協力を得て幡中が撮影した。
12. 本書で用いた測地系は世界測地系第Ⅲ系であり、方位は座標北、レベルは海拔高を示す。
13. 本書で用いた遺構およびトレンチの略号は以下のとおりである。

ST-墓坑 SK-土坑 SD-溝 SS-甕敷 tr-トレンチ

14. 本書における土師器の型式および器種認定は、下記の論考・報告書を参照した。

赤澤秀則 1992「小結」『南講武草田遺跡』講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 鹿島町教育委員会 73～81頁

池淵俊一 2008「古墳時代中期前半の遺構・遺物に関する諸問題」『九景川遺跡』一般県道出雲インター

線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1 島根県教育委員会 294～313頁

松山智弘 1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討－」『島根考古学会誌』第8集

島根考古学会 1～29頁

松山智弘 2000「小谷式再検討－出雲平野における新資料から－」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学

会 99～130頁

松山智弘 2002「神原神社古墳埋納坑出土の土器について」『神原神社古墳』加茂町教育委員会 198～

209頁

松山智弘 2018「古墳出土土器をめぐって 山陰」『前期古墳編年を再考する』六一書房 161～174頁

渡邊 誠 2009「古墳時代開始期前後における土器編年研究～山陰地域を素材として～」『島根考古学会誌』

第26集 島根考古学会 25～60頁

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過と展示・活用	6
第2章 遺跡の位置と環境	11
第1節 地理的環境	11
第2節 歴史的環境	14
第3章 発掘調査の成果	25
第1節 既往調査の成果	25
第2節 発掘調査の成果	31
第3節 出土遺物	49
第4節 小結	51
第4章 自然科学分析	63
第1節 常楽寺柿木田1号墳の第1・2主体部におけるPCN分析	63
第2節 常楽寺柿木田1号墳の第2主体部に伴う棺内疊敷の石材	71
第5章 総 括	75
第1節 常楽寺柿木田1号墳の主体部土層の定量分析	75
第2節 出雲平野周辺における古墳時代前半期の埋葬施設と棺内疊敷	83
第6章 結 語	103

図 版

報告書抄録

挿図目次

第1図 一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に 係る遺跡位置図	2	第30図 第3主体部東側2tr土層堆積状況（南から）	37
第2図 常楽寺柿木田古墳群の位置と範囲	3	第31図 第2主体部西側1・3tr土層堆積状況 (左：北西から 右：南西から)	37
第3図 常楽寺柿木田古墳群の試掘確認調査位置 および発掘調査対象範囲	4	第32図 第1・2主体部東西土層図	38
第4図 発掘調査状況	7	第33図 第1・3主体部および溝SD001 東西土層図	39
第5図 主体部の分析試料採取状況 (左：第1主体部 右：第2主体部)	7	第34図 第1主体部の石枕（西側2tr、西から）	39
第6図 現地調査指導状況	9	第35図 第1主体部北側の溝SD001・縦敷SS001 (南から)	39
第7図 湖陵コミュニティセンター文化祭出展状況	9	第36図 第2主体部柏内縦敷全体図	40
第8図 出雲弥生の森博物館スポット展示状況	9	第37図 第2主体部柏内縦敷全景（南西から）	41
第9図 常楽寺川流域周辺の現地踏査状況	10	第38図 第2主体部西側2tr木棺側板裏込め状況 (南から)	41
第10図 水洗篩別状況	10	第39図 第3主体部東側2tr木棺小口板裏込め状況 (南東から)	43
第11図 島根半島と出雲平野の古地形変遷 (中村 2014年加筆)	12	第40図 第3主体部排水溝全景（北東から）	43
第12図 常楽寺柿木田古墳群と出雲平野周辺の 主要遺跡	15	第41図 遺物実測図	50
第13図 湖陵町周辺における古墳時代前半期の 主要遺跡・古墳の分布	21	第42図 第1～3主体部全体図（上）と 東西土層堆積状況（下）	54
第14図 常楽寺柿木田古墳群周辺の主要遺跡・ 古墳の範囲（上）と周辺の遠景（下）	24	第43図 常楽寺柿木田1号墳の構築過程	56
第15図 常楽寺柿木田1号墳想定復元図 (左：1998・1999年度調査 右：2010・2017年度調査)	26	第44図 組合式木棺（断面形態）の分類模式図 (若手 2022年参考に作成)	58
第16図 常楽寺柿木田古墳群の試掘確認調査 位置と発掘調査対象範囲	27	第45図 常楽寺柿木田1号墳における 第1～3主体部の組合式木棺（断面形態） の分類模式図	58
第17図 常楽寺柿木田1号墳の墳丘規模と 墳丘全體図・出土遺物（2019年度調査）	29	第46図 山地古墳の墳丘全体図	59
第18図 葛坑ST001～ST003平面図（左）・ オルソ画像（中）・赤色立体地図（右） (2019年度調査)	29	第47図 山地古墳の主体部全体図	60
第19図 縦敷SS001検出状況 (2019年度調査、南西から)	29	第48図 神西湖南岸地域の古墳時代前半期の 主な古墳の分布	61
第20図 手掘ね土器出土状況 (2019年度調査、南西から)	29	第49図 第1・2主体部の試料採取対象範囲	63
第21図 常楽寺柿木田1号墳の主体部位置と 遺構全體図	32	第50図 第1主体部南北土層図 (試料採取地点)	64
第22図 常楽寺柿木田1号墳の主体部全體図と トレンチ・土層図位置	33	第51図 第1主体部西側2tr平面図 (試料採取地点)	64
第23図 第1主体部南北土層図	36	第52図 第2主体部西側1tr平面図 (試料採取地点)	64
第24図 第2主体部南北土層図	36	第53図 第2主体部西側3tr平面図 (試料採取地点)	64
第25図 第3主体部南北土層図	36	第54図 山地古墳第1埋葬主体平面図 (試料採取地点)	64
第26図 第1・3主体部東西土層図	36	第55図 第1主体部南北土層のPCN分析結果	66
第27図 第2・3主体部東西土層図	36	第56図 第1主体部西側2tr（左）・第2主体部 西側1tr（中央）・第2主体部西側3tr（右） のPCN分析結果	67
第28図 第1～3主体部東西土層図	37	第57図 山地古墳第1埋葬主体のPCN分析結果	68
第29図 第1主体部西側2tr土層堆積状況（北東から）	37		

第 58 図	第 1・2 主体部の粒度分析結果 (50% 粒径)	68
第 59 図	常楽寺柿木田 1 号墳の第 2 主体部の 棺内隕敷 (左: 南西から 右: 西から)	71
第 60 図	常楽寺川流域周辺の地質図と現地踏査位置 (A ~ C 地点)	72
第 61 図	古墳付近の常楽寺川河床の円礫 (撮影用に集積)	73
第 62 図	常楽寺川上流域の安山岩溶岩 (露頭から採取)	73
第 63 図	常楽寺川と西の谷川の合流部 (左: 南から / 下流側 [奥] が円礫 右: 西から / 上流側 [右] が角礫 ~ 亜角礫)	73
第 64 図	A 地点の崖鍾堆植物に含まれる円礫 (左: 写真的礫は直径 10cm 未満) と B 地点の河床礫 (右)	74
第 65 図	B 地点から約 50 m 下流の砂岩層に 挟まれる礫岩層の円礫 (左側の円礫が約 15cm 程度)	74
第 66 図	C 地点の段丘堆植物の礫層 (層中の礫は風化が進んでいる)	74
第 67 図	分析対象地区 (上) と土層堆積状況および 土層の種類 (下)	76
第 68 図	地山礫に含まれる光沢礫 (左) と その他の礫 (右)	76
第 69 図	水洗篩別状況 (左) と肉眼観察による 内容物の分類 (右)	77
第 70 図	墳丘盛土の分析対象範囲 (2019 年度調査)	80
第 71 図	常楽寺柿木田 1 号墳の墳丘全体図 (左) と 主体部全体図 (右)	83
第 72 図	出雲平野周辺の古墳時代前半期における 古墳分布と変遷	84
第 73 図	浅柄 II 古墳の墳丘と主体部	85
第 74 図	山地古墳の墳丘と主体部	86
第 75 図	間谷東古墳の墳丘と主体部・出土遺物	87
第 76 図	神待山 I 号墳の墳丘と主体部	88
第 77 図	土井・砂 I 号墳の墳丘と主体部	91
第 78 図	神原神社古墳の墳丘と主体部	91
第 79 図	松本 I 号墳の墳丘と主体部	92
第 80 図	斐伊中山 I 号墳の墳丘と主体部	93
第 81 図	西日本における棺内隕敷の分布状況	97
第 82 図	出雲地方における棺内隕敷の展開	98

挿表目次

第 1 表	一般国道 9 号 (出雲湖陵道路) 改築工事に伴う 発掘調査の成果および報告書一覧	3
第 2 表	歴史的環境の参考文献一覧	21 ~ 23
第 3 表	既往調査成果のまとめ	30
第 4 表	土層観察表	44 ~ 48
第 5 表	遺物観察表	50
第 6 表	常楽寺柿木田 1 号墳主体部調査成果一覧	51
第 7 表	常楽寺柿木田 1 号墳の構築と葬送儀礼	55
第 8 表	分析結果一覧	66
第 9 表	分析対象の主体部土層の重量と内容物の 含有比率	78
第 10 表	墳丘盛土・埋土の重量と内容物の 含有比率 (2019 年度調査)	80
第 11 表	出雲平野周辺における古墳時代前半期の 主要な古墳の埋葬施設一覧	96

図版目次

- | | |
|-------------------|----------------------------------|
| 図版 1 古墳遠景 (1) | 図版 11 第 2 主体部 (1) |
| 図版 2 古墳遠景 (2) | 図版 12 第 2 主体部 (2) |
| 図版 3 古墳遠景 (3) | 図版 13 第 2 主体部 (3) |
| 図版 4 古墳遠景 (4) | 図版 14 第 2 主体部 (4) |
| 図版 5 古墳全景 | 図版 15 第 3 主体部 (1) |
| 図版 6 主体部全体図 | 図版 16 第 3 主体部 (2) |
| 図版 7 第 1 主体部 (1) | 図版 17 第 3 主体部 (3) |
| 図版 8 第 1 主体部 (2) | 図版 18 調査前・埋め戻し状況・丘陵地山断面・
出土遺物 |
| 図版 9 第 1 主体部 (3) | |
| 図版 10 第 1 主体部 (4) | |

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本書は、常楽寺柿木田1号墳における主体部の内容確認のために実施した発掘調査の報告書である。常楽寺柿木田1号墳は、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所（以下、国土交通省）が実施する一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴い、墳丘構造や外表施設の有無などを確認する目的で2019（令和元）年度に発掘調査が行われた。調査では古墳の後円部上に主体部の墓坑を3基確認している。その後、古墳の主体部の保護や今後の整備・活用に向けて周辺地域での古墳の歴史的位置づけを明確にするため、2021（令和3）年度に出雲市文化財課が主体部の内容確認調査を実施した。

なお、一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う発掘調査は、国土交通省から委託を受けて2014（平成26）年度から島根県教育委員会と出雲市文化財課が実施している（第1図・第1表）。

1 常楽寺柿木田古墳群の発見

常楽寺柿木田古墳群は島根県出雲市湖陵町常楽寺に所在し、南から神西湖に注ぐ常楽寺川と奥ノ谷川が合流する地点の東岸の丘陵上に立地する（第2図）。丘陵の南側が事業予定地内にあたり、2010（平成22）年度から2020（令和2）年度にかけて島根県教育委員会と出雲市文化財課が試掘確認調査および発掘調査を行っているが（第3図）、古墳群の存在はそれ以前から確認されていた。

常楽寺柿木田古墳群は標高約37mの丘陵頂部に築かれる1号墳と、その北側に位置するとされる2号墳の2基の古墳からなり、1998（平成10）年度および1999（平成11）年度に当時の湖陵町教育委員会が行った分布調査のなかで見つかった。常楽寺柿木田1号墳に関しては、1999年度に測量調査が実施され、後世の墓地造営などによって丘陵南側が削平されて前方部の状況が不明瞭ではあるものの、全長30mを測る湖陵町内で唯一の前方後円墳であった可能性が指摘されている（野坂編2000）。また2号墳は、分布調査によって一辺約11mの方墳であったと推測されている。

2 道路事業の計画と既往の調査

2005年度に国土交通省によって都市計画の決定がなされるまでに、事業予定地内における重要遺跡や埋蔵文化財の有無の確認が進められた。そのなかで、計画ルート上に中世の山城で尼子十旗の一つに数えられる神西城跡が重なることが判明し、国土交通省と島根県教育委員会との協議のなかで、トンネル工法に変更して神西城跡を保存することになった。

2009（平成21）年度には出雲市文化財課の協力のもと、島根県教育委員会によって分布調査が行われ、試掘確認調査や発掘調査の必要な場所が認められた。この分布調査において、常楽寺柿木田1号墳の一部が事業予定地に隣接する可能性が判明し、2010年度に国土交通省と島根県教育委員会および出雲市文化財課で取り扱いに係る協議が行われた。また同時に島根県教育委員会が古墳の規模や



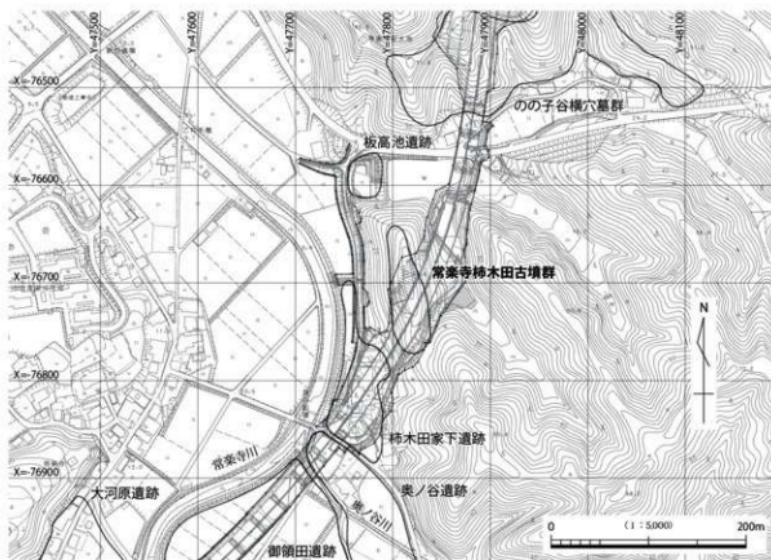
第1図 一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に係る遺跡位置図

墳形、時期などの把握のために、5箇所のトレンチによる試掘確認調査（2010年度島根県試掘確認調査）を実施した。この試掘確認調査の成果によって、常楽寺柿木田1号墳は西側くびれ部の存在など前方後円墳と判断される要素を持ち、また出土した土師器甕から築造時期が古墳時代前期墳となる可能性が考えられ、湖陵町内では最大かつ最古級の古墳である蓋然性が高まった。この成果をもとに国土交通省と古墳の保存に係る協議が実施され、暫定2車線道路では古墳の全体を回避するよう設計が変更されている。

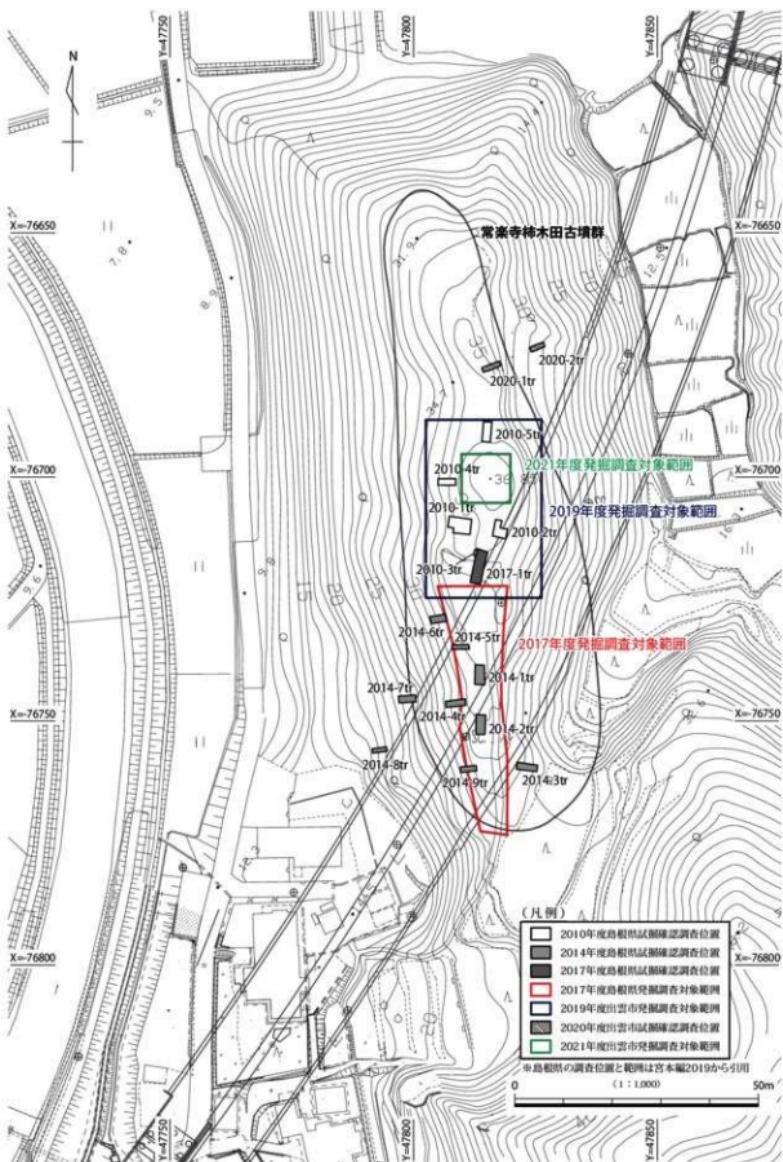
常楽寺柿木田1号墳から南に延びる丘陵上を含めた範囲までが常楽寺柿木田古墳群の周知の埋蔵文化財古蔵地となっており、その範囲については事業予定地と重なるため、2014年度に島根県教育委員会が9箇所のトレンチを設定して試掘確認調査（2014年度島根県試掘確認調査）を行った。その結果、弥生時代の遺物や同時代の可能性のある遺構が確認されたため、2017（平成29）年度に丘陵南側の範囲の全面的な発掘調査を島根県教育委員会が実施した。調査のなかで弥生時代後半の竪穴建物跡

第1表 一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う発掘調査の成果および報告書一覧

遺跡名	主な遺跡	主な遺物	備考	報告書		
				書名	出版・シリヤ次回	発行機関
御所野遺跡	古墳時代後期後葉の擬石垣建物跡・塹1周	赤生土器、土器底、瓦器底、土器足、鉄製品	古墳時代後期後葉の集落跡 (造り付け壙の出土)	「御所野遺跡」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1	鳥取県教育委員会
玉乃吉遺跡(尾・尾・尾区)	古墳時代後期後葉の壁の建物跡・塹1周	赤生土器、土器底、瓦器底、土器足、鉄製品	古墳時代後期の集落跡	「玉乃吉遺跡(尾・尾・尾区)」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2	鳥取県教育委員会
丸見川遺跡(VIC)	古墳時代後期後葉の壁の加工作跡・塹/古代以前の穴井建物跡・古墳の建物跡	赤生土器、土器底、瓦器底、土器足、鉄製品	古墳時代後期の集落跡 古墳の建物跡	「玉泉寺遺跡跡(VI-VIC)」 「丸見川遺跡(VIC)」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3	鳥取県教育委員会
中土立遺跡	古墳時代後期・古墳時代後期の工路/「中土立」の土器、柱立(縦柱)?、柱立(横柱)、鐵製品	赤生土器、土器底、瓦器底、土器足、鉄製品、鐵鋤	古墳時代後期から古墳時代後葉の小笠原型環状・中土立の土器と鐵製品	「中土立遺跡2区・中土立遺跡」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4	鳥取県教育委員会
御手道跡(1~4区)	漢・呂后の陵廟跡の北側・高木山城・古代の土器・中世の擬石垣建物跡・櫛河・上林 御手道古跡	漢文瓦器、赤生土器、土器底、 陶器底、石器、土器足、鉄製品、瓦器	漢・呂后の陵廟跡の集落跡 中世の集落跡(自然?)と 神奈西周辺の古墳群	「御手道跡・御手道跡 近辺(1~4区)」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5	鳥取県教育委員会
御手道跡(5区)	古墳時代中期前段の塙/古代・中世の演 習場	漢文瓦器、赤生土器、土器底、 陶器底、石器、土器足、瓦器	「御手道跡・御手道跡 近辺(5区)」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6	鳥取県教育委員会	
紀本古道跡	古代末・中世の擬石垣建物跡・櫛河・上林 御手道古跡	土器底、陶器底、石器、石器足、 土器足、鉄製品、瓦器	中世の集落跡(自然?)と 神奈西周辺の古墳群	「紀本古道跡・御手道跡 近辺(6区)」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7	鳥取県教育委員会
の子谷横穴墓群	古墳時代後期後葉の横穴墓	土器底、瓦器底、石器、鉄製品	紀元後6世紀前後 (出でて20世紀が存在)	「の子谷横穴墓群 近辺(7区)」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8	鳥取県教育委員会
常楽寺柿木田古墳群 (後醍醐天皇御陵)	古墳時代後期後葉の壁の建物跡	赤生土器、土器底、瓦器底、 石器底、鉄製品	古墳時代後期後葉の高貴な 集落跡	「常楽寺柿木田古墳群 -後醍醐天皇御陵の調査-」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書9	鳥取県教育委員会
常楽寺柿木田古墳群 (後醍醐天皇御陵)	古墳時代前期～末期の前方後円墳 (常楽寺柿木田古墳)・近辺の周辺	土器底、瓦器底、陶器底、石器底、 土器足、鉄製品、瓦器	古墳の傾斜・擬石垣土体部分 の傾斜と瓦器	「常楽寺柿木田古墳群 -後醍醐天皇御陵の調査-」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書10	鳥取県教育委員会
御田遺跡(110)	古墳時代・古代の擬石垣建物跡・塙	土器底、瓦器底、陶器底、 土器足、石器底、鉄製品、瓦器	古墳時代・古代の集落跡	「御田遺跡・御手道跡 近辺(110区)」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書11	鳥取県教育委員会
御田遺跡(210)	古墳時代中期末～後醍醐天皇御石室・集 石遺跡・南北古墳時代中期の机	漢文瓦器、赤生土器、土器底、 陶器底、石器底、土器足、鉄製品、 木器	古墳時代中期～後醍醐天皇 の墓地	「御田遺跡2区・中土立遺跡」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12	鳥取県教育委員会
御田遺跡(310)	漢・呂后の陵廟の中の配石丘・土坂・村六 御手道跡	漢文瓦器、土器底、石器底、 陶器底、石器足、土器足、瓦器底、 陶器足、土器足、瓦器	漢・呂后の陵廟の中の集落跡 と墓地(民衆の居住)	「ISO子谷横穴墓群 近辺(310区)」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書13	鳥取県教育委員会
御田遺跡(410)	漢・呂后の陵廟の中の壁・配石丘・配石丘 土坂・集石遺跡・村六	漢文瓦器、土器底、石器底、 陶器底、石器足、土器足、瓦器底、 陶器足、土器足、瓦器	漢・呂后の陵廟の中の集落跡 と墓地(民衆の居住)	「御田遺跡4区」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書14	鳥取市教育委員会



第2図 常楽寺柿木田古墳群の位置と範囲



第3図 常楽寺柿木田古墳群の試掘確認調査位置および発掘調査対象範囲

2棟と時期が不明な溝状遺構が2条確認されており、丘陵上に弥生時代の小規模な高地性集落が展開していたことが明らかになった（宮本編2019）。また、その調査のなかで常楽寺柿木田1号墳の前方部先端の確認を目的とした1箇所のトレンチによる試掘確認調査（2017年度島根県試掘確認調査）が行われたが、墳丘端部を示す情報は得られていない。

当面は暫定2車線道路で整備する計画であったが、将来的な完成4車線道路供用を見据えての事業計画の具体化に伴い、暫定2車線道路の整備時に合わせて完成4車線道路供用に伴う法面工事を実施するなどの工法の具体化や工期の変更などが計画された。これまでの調査成果を反映して島根県教育委員会が作成した常楽寺柿木田1号墳の想定範囲を国土交通省が現地に表示している。

完成4車線道路の整備に伴う法面工事が古墳に影響する範囲について、2018（平成30）年度に国土交通省と島根県教育委員会および出雲市文化財課が現地確認を行い、常楽寺柿木田1号墳の想定範囲の前方部南側と東半分および後円部東側の一部が整備計画範囲に含まれることが明確になり、古墳の発掘調査を実施する必要性が確認された。島根県教育委員会と出雲市文化財課との協議を踏まえ、出雲市文化財課が島根県教育委員会の全面的な協力を得て2019年度に発掘調査を実施した。

2019年度の発掘調査は、常楽寺柿木田1号墳の墳丘規模や構築過程などの墳丘構造を正確に把握するとともに、墳丘の外表施設の有無、および主体部の残存状況やその規模・範囲・深さなどを明確にすることを目的に実施した。調査の結果、常楽寺柿木田1号墳は全長が最大で約35mの前方後円墳であり、後円部上に3基の主体部の墓坑が残存することを確認した。外表施設の埴輪や葺石などは確認されていないが、後円部北側の盛土上に展開する礫敷が見つかっている。

常楽寺柿木田1号墳の北側の丘陵東側斜面には国土交通省が管理道を設置する計画があり、一部が常楽寺柿木田古墳群の包蔵地に該当するため、古墳や関連遺構などの有無を確認する必要が生じた。2020年度にトレンチを設けて試掘確認調査を行ったが、古墳や関連遺構などは確認できなかった。なお2020年度には、2019・2020年度の調査成果を整理して報告書を作成した（舩中編2021）。

3 今回の調査と法的手続き

2019年度の発掘調査で確認した常楽寺柿木田1号墳の主体部は、墓坑の部分的な確認調査によつて良好な状態で残存している可能性が高いことが判明した。主体部周辺は完成4車線道路の整備に伴う法面工事で影響を受けないため、古墳の主体部保護や今後の整備・活用を見据えて周辺地域での古墳の歴史的位置づけを明確にする目的で主体部の内容確認調査を実施する方針を固めた。そこで、土地を所有する国土交通省の許可を受け、島根県教育委員会の協力を得ながら出雲市文化財課が主体部の内容確認に伴う発掘調査を実施した。

常楽寺柿木田1号墳に係る文化財保護法上の手続きは、2021年5月11日付け文財第101号にて主体部の発掘調査に係る承諾依頼を国土交通省に行い、5月18日付で承諾を得た。その後、2021年5月19日付け文財第119号にて出雲市教育委員会から島根県教育委員会教育長宛てに文化財保護法第99条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知が提出された。調査終了後は、2021年10月21日付け文財第573号にて島根県教育委員会に完了報告を提出した。

第2節 調査の経過と展示・活用

1 2021年度の調査と展示・活用

(1) 発掘調査の方針

2021（令和3）年の主体部の内容確認に伴う発掘調査は、主体部を中心に複数のトレンチを設けて実施し、主体部内部の構造や構築状況を把握することを目的とした。なおトレンチの位置は、調査指導者の指導・助言を得て設定し、調査が進むなかで必要に応じて追加トレンチを設けて確認を行った。また発掘調査は、調査開始から埋め戻し作業までを全て人力掘削によって実施している（第4図）。

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は2021年6月2日から2021年10月20日まで実施した。6月2日は周辺の草刈りを行い、同時に2019（令和元）年度の発掘調査に伴う墳丘の後円部上における埋め戻し土の掘削に着手した。6月8日には埋め戻し土の除去が完了し、2019年度の調査で見つかった3基の墓坑ST001～ST003とそれに伴う関連施設をそれぞれ第1～3主体部として把握した。そして主体部の内容を確認するために各主体部においてトレンチを設定した。

6月9日からは設定したトレンチ内の調査を開始した。トレンチでは墳丘の盛土や墓坑内の埋土などから遺物が出土する可能性があったため、各墓坑の掘形を確認しながら埋土などの堆積状況や墓坑内部の精査を行い、慎重に掘削を進めた。

7月2日に第2主体部の南側の床面付近で扁平な碟が並ぶ状況が見つかり、棺内に碟敷が設けられていることを確認した。第2主体部に棺内碟敷が確認されたことで、その規模や範囲を把握するためには追加でトレンチを設定して調査を進めた。8月11日には、第2主体部の碟敷北側で石杖を確認し、被葬者の頭位の場所が推定可能になった。第1・3主体部も同様に棺内に碟敷が設けられていた可能性が考えられ、丁寧に掘り下げを進めていったが、碟敷は確認できなかった。

9月9日には第1主体部の北側において狹小な溝（溝SD001）を確認した。墓坑ST001北側の盛土上に碟敷SS001が展開する状況は2019年度の発掘調査で確認したが、今回の発掘調査で見つかった溝は盛土下に設けられて墓坑に直接連結していた。9月上旬以降は各主体部におけるトレンチ内の精査や記録作業を進めたが、副葬品などの遺物は確認できなかった。

9月28日に主体部周辺の写真測量および完掘状況の空中写真撮影を実施した。また9月29日と10月14日に3次元レーザー測量および3次元ハンディスキャナーによって主体部周辺の詳細な3次元データを取得した。

10月5日には主体部内部のPCN分析（全リン分析およびCN分析）に伴う試料採取を行い（第5図）、試料採取後の10月6日から各主体部のトレンチの埋め戻し作業を開始した。なお、PCN分析の成果は第4章第1節にて詳しく報告されている。10月15日からは後円部全体の埋め戻し作業に取り掛かり、10月18日に埋め戻しが完了した。また、後円部の埋め戻しと同時に現場の片付けや資材の撤去などを進め、10月20日に発掘調査の現場作業が終了した。



第4図 発掘調査状況



第5図 主体部の分析試料採取状況（左：第1主体部 右：第2主体部）

(3) 調査指導の概要

調査を進めるなかで、多くの方々から調査方針や主体部内部の土層堆積状況および遺構の評価、そして主体部の保護や今後の整備・活用の方向性などについて指導や助言を受けた（第6図）。

7月16日に岩本崇氏（島根大学法文学部准教授）および稲田陽介氏（島根県教育庁文化財課企画員）から、主体部の木棺痕跡の確認状況や調査方針についての調査指導を受け、奥才古墳群（松江市鹿島町）における「奥才型木棺」（赤澤2002）との共通点や相違点についてご教示を得た。7月26日には、木棺痕跡からみた各主体部の評価と時期的な位置づけについて、松本岩雄氏（元島根県立八雲立つ風土記の丘所長）、内田律雄氏・曳野律夫氏（島根考古学会会員）からご教示をいただいた。7月30日の調

査指導のなかでは、西尾克己氏（出雲市文化財保護審議会委員）と角田徳幸氏（島根県教育庁古代文化センター長・出雲市文化財保護審議会委員）から地域史のなかにおける古墳の歴史的評価に加えて、今後の主体部保護や整備・活用方針について調査指導をいただき、赤澤秀則氏（松江市立鹿島歴史民俗資料館館長）からは奥才型木棺との具体的な比較検討の助言を受けた。

9月6日に渡辺貞幸氏（島根大学名誉教授・出雲弥生の森博物館名誉館長）から主体部の木棺痕跡について、土層堆積状況からの詳細な検討の必要性を指摘いただいたほか、第2主体部の棺内礫敷や第1主体部北側の盛土上の礫敷など主体部に伴う礫に込められた意味や役割は他の事例との比較検討が必要になる点などをご教示いただいた。また9月7日には、岩本崇氏から第2主体部で棺内の礫敷とともに確認された石枕について、島根県内や中四国地方全体の事例のなかで評価する点や、木棺の小口板や側板、そして仕切り板の痕跡を可能な限り土層堆積状況から明らかにすることが望ましいとの助言をいただいた。9月13日に中村唯史氏（島根県立三瓶自然館学芸員・出雲市文化財保護審議会委員）から第2主体部の棺内礫敷の石材を中心に、主体部周辺で使用されている礫などの石材の調査指導をいただき、また近隣の出雲市神西沖町の山地古墳における石枕の石材についてもご教示を得た。

（4）古墳の取り扱い協議

2019年度の調査終了後には、国土交通省と島根県教育委員会および出雲市文化財課で工事内容と古墳への影響などについて協議を行い、そのなかで墳丘の東側については完成4車線供用に伴う法面工事などで削平が必要な部分以外の墳丘の保存範囲に影響が生じないように工法を検討して設計することを確認していた。その後、2021年度の調査を進めると同時に工法が検討され、国土交通省と島根県教育委員会および出雲市文化財課の協議のなかで、後円部の主体部を中心とする墳丘の保存範囲に可能な限り影響が少ない工法が示された。

（5）調査成果の展示・活用

これまでの常楽寺柿木田1号墳の調査成果を地元住民へ情報発信するため、湖陵コミュニティセンターの文化祭に「常楽寺柿木田1号墳 調査成果 速報」として2021年11月20日から23日にかけて出展し（第7図）、最終日には展示解説を実施した。

また、出雲弥生の森博物館において、スポット展「徹底解明！常楽寺柿木田1号墳—神西湖南岸の古墳文化をさぐるー」を開催した（第8図）。開催期間は2022（令和4）年2月2日から5月30日までであり、2月23日および3月6日にはギャラリートークを実施して展示の解説などを行った。

2 2022年度の調査と展示・活用

（1）常楽寺川流域周辺の現地踏査

2021年度の石材の調査指導のなかで、主体部などに使用されている石材が常楽寺川の流域に由来する可能性が指摘されたため、2022年度に中村唯史氏の調査指導を受けて、常楽寺川流域周辺の現地踏査を行った（第9図）。現地踏査は6月8日に実施し、常楽寺柿木田1号墳周辺から常楽寺川上流域にかけて、河川や周辺露頭などの複数箇所で石材の確認を行っている。なお、その成果と検討内容については、第4章第2節で報告されている。



第6図 現地調査指導状況



（2）整理作業

主体部の調査では、主体部内に堆積していた埋土などを各トレンチごとに層位的に採取した。採取した埋土などは、遺物の有無を確認することに加え、それらの特徴を明確に把握するため、前回の墳丘の調査で実施した墳丘盛土の定量分析（輔中 2021）と同様の手法を用いて水洗篩別を実施した（第10図）。詳細は第5章第1節で報告するが、2mmメッシュの篩を用いて内容物を確認している。なお、水洗篩別は出雲弥生の森博物館で実施した。

また2021年度の調査で作成した図面整理や出土した遺物の整理および記録作業を進め、写真撮影などを行った。

(3) 古墳の取り扱い協議

発掘調査の整理作業を進めるなかで、国土交通省と出雲市文化財課で、今後の古墳の取り扱いについて協議を実施し、古墳の整備内容や活用方法、および出雲湖陵道路の完成後における古墳範囲周辺の所管や管理方法について意見交換や情報共有を行い、検討を重ねた。

(4) 調査成果の展示・活用

湖陵コミュニティセンター自主企画事業の一環として2022年6月26日に開催された常楽寺柿木田1号墳および近接する京田遺跡の調査成果の講演会で、「湖陵町周辺で栄えた縄文文化と古墳文化－京田遺跡と常楽寺柿木田1号墳の調査成果を中心に－」と題した講演を実施した。また同時に、2021年度に出雲弥生の森博物館で実施したスポット展の巡回展示を湖陵コミュニティセンターにて6月26日から7月10日まで開催した。

その他、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが6月27日に開催した2022年度第1回埋蔵文化財専門研修において、常楽寺柿木田1号墳の調査成果を中心に講演を行った。

参考文献

- 赤澤秀則 2002「小結」『奥才古墳群第8支群 県道御津東生馬線改良工事に伴う調査』鹿島町教育委員会 53～60頁
- 野坂俊之編 2000『湖陵町遺跡地図』湖陵町教育委員会
- 幡中光輔 2021「常楽寺柿木田1号墳の墳丘盛土の定量分析」常楽寺柿木田古墳群－常楽寺柿木田1号墳の調査－』一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・出雲市の文化財報告 46 出雲市教育委員会 83～88頁
- 幡中光輔編 2021『常楽寺柿木田古墳群－常楽寺柿木田1号墳の調査－』一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・出雲市の文化財報告 46 出雲市教育委員会
- 宮本正保編 2019『常楽寺柿木田古墳群－弥生時代集落の調査－』一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5 島根県教育委員会



第9図 常楽寺川流域周辺の現地踏査状況



第10図 水洗篩別状況

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

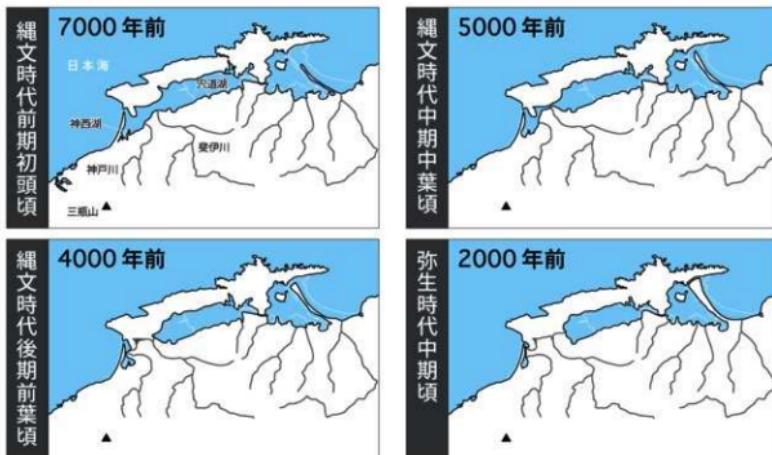
常楽寺柿木田1号墳は島根県出雲市湖陵町常楽寺に所在し、南から神西湖に注ぐ常楽寺川と奥ノ谷川が合流する地点の東岸の丘陵上に位置する。神西湖は出雲平野の西部にある潟湖で、奈良時代の733年に奏上された『出雲国風土記』に「神門水海」として記された広大な水域が、河川による堆積作用や気候変動に伴う環境変化、差海川の開削などの人工的な改変の影響を受けて多様な変遷をたどり、現在の神西湖の原形となった。ここでは、常楽寺柿木田1号墳を含む常楽寺柿木田古墳群が所在する湖陵町周辺の地理的環境について、出雲平野や神西湖の変遷を踏まえて整理する。

中国地方の山陰側は、新生代の古第三紀頃（6,000万年～4,000万年前頃）、日本海が形成される以前は大陸の一部であった。この頃、花崗岩マグマの発生によって生成・噴出した花崗岩や流紋岩・デイサイトが地盤となっている。その後、新第三紀中新世の初期（2,500万年前頃）から始まる大陸からの分離と日本海形成のなかで、激しい火山活動が発生し、それに起因する堆積岩類や火山岩類がその上を覆うようになった。湖陵町周辺もその影響を大きく受けており、南部の山地や丘陵地はこの時代に形成された安山岩や火山碎屑岩、疊岩などの波多累層や大森累層で構成され、北部の低地部は砂岩や泥岩系の布志名累層からなる（三浦2000）。

第四紀の更新世（約250万年～1万年前）には氷期と間氷期を繰り返し、湖陵町の海岸沿いなどには海水面の上昇に伴う礫層や、風成作用による砂丘堆積物がみられる。最終氷期（ヴュルム氷期）の最寒冷期（2万年～1万6千年前頃）になると、100m以上に及ぶ海面低下によって大幅な海退現象が生じ、島根半島と隠岐諸島が陸続きになったと考えられている（中村2009・2014）。

完新世（約1万年前以降）になると最終氷期の終焉とともに気候が急速に温暖化し、それに伴って海進が進んだ。海進は7,000年から6,000年前頃の縄文時代に極大に達する。いわゆる「縄文海進」である。島根半島でも出雲平野から現在の宍道湖周辺にかけて内湾（古宍道湖）が形成され、現在の神西湖と周辺の低地部はその一部であった。海面が最高潮に達した後は次第に低下し、斐伊川や神戸川など河川の河口部で三角州の形成が進んで徐々に沖積平野が広がる。これは島根半島が日本海の波浪と沿岸流を遮ったことにより、三角州の発達が促されたという地形的特質が大きい（中村2009）。

このような出雲平野の発達に最も大きく影響したのは三瓶山の火山活動であった。三瓶山は縄文時代に3回噴火しており、縄文時代草創期から早期における1回目の噴火（約1万2千年から1万年前頃）は大きな影響を与えたなかったが、それ以後に起きた2回の火山活動によって三瓶山の麓にある神戸川に多量の火碎物が流れ込み、洪水となって下流に膨大な量の土砂をもたらした。その土砂が扇状地を急激に発達させて三角州が肥大し、現在の出雲平野の原形を生み出したと考えられる（中村2006a・2006b）。その2回の噴火時期は年代測定の結果から、縄文時代の前期後葉頃（約5,500年前）と後期前葉頃（約4,000年前）に比定できる（小林・角田2006）。この三瓶山の火山活動により出雲平野は急



第11図 島根半島と出雲平野の古地形変遷（中村 2014 に加筆）

速に発達した（第11図）。これ以降は斐伊川・神戸川における三角州の発達などの影響で内湾環境であった水域に出雲平野の形成が進み、東側は現在の宍道湖、西側には神西湖の原形となる水域が形成されていく（林 1991）。また、両水域は火山活動による洪水堆積物に関連して海との連絡口が閉鎖され、この時期（約4,000年前）以降に淡水環境に移行したことが分かっている（山田ほか 2004, 山田・高安 2006a・2006b・2007, 中村・野坂 2006, 濑戸ほか 2012, 濑戸・岡崎 2013）。

それ以降も三角州が発達して出雲平野が拡大するなかで、人々の活動は盛んになっていった。湖陵町周辺でも縄文時代晚期から弥生時代以降の遺跡が多く確認されるようになる。この頃（約2,000年前）には神西湖の原形となる水域は海とつながり、汽水環境が続く（山田ほか 2004, 山田・高安 2006a・2006b・2007, 濑戸・岡崎 2013）。奈良時代の『出雲国風土記』には「神門水海」として登場し、生息する魚類などの記述から汽水環境であった当時の様子が読み取れる。

神戸川の堆積作用に伴う潮流口の閉鎖で神西湖は約1,000年前に再び淡水環境となる。中世から近世には出雲地方の山間部でたら製鉄が盛んになり、砂鉄採取のための鉄穴流しが各地で行われた。鉄穴流しへは多量の土砂が伴い、それが斐伊川や神戸川に流れ込んで下流まで運ばれ、出雲平野の地形発達に影響を与えた（林 1989）。また同時に河川の氾濫や周辺の冠水状態を引き起こしたが、神西湖では差海川が1686（貞享3）年に人工的に開削され（野津 1930, 池橋 2000），その結果として海とつながることで汽水環境に戻り（瀬戸・岡崎 2013, 川上 2019），神戸川の埋積作用によって水域が縮小して約300年前までにはほぼ現在の神西湖の形となった（大西ほか 1990, 石原ほか 2000）。

参考文献

池橋達雄 2000 「差海川の開削」『湖陵町誌』湖陵町 466～493頁

石原廣和・亀井健史・中村唯史 2000 「CNS元素分析による出雲平野神西湖周辺の完新世堆積物の堆積環境評価

- 「その地盤工学への応用」『応用地質』第41巻第1号 日本応用地質学会 12~23頁
- 大西郁夫・徳岡隆夫・高安克己・石原清・梶田秀児・日下智博・熊井克己 1990 「出雲平野西部の自然史」『山陰地域研究』第6号 島根大学山陰地域研究総合センター 21~34頁
- 川上稔 2019 「神西湖の形成」『神西湖誌』神西自治協会 9~17頁
- 小林謙一・角田徳幸 2006 「三瓶火山の噴出物と縄文時代のAMS炭素14年代測定」『島根考古学会誌』第23集 島根考古学会 43~55頁
- 瀬戸浩二・岡崎裕子・酒井哲弥・高田裕行・山田和芳・渡辺正巳 2012 「出雲平野南西部の形成過程－神戸川河口域の古環境変遷史－」『出雲国風土記の研究IV 神門水海南辺の研究（資料編）』島根県古代文化センター 調査研究報告書46 島根県古代文化センター 45~59頁
- 瀬戸浩二・岡崎裕子 2013 「神門水海の古地理の復元に向けて」『出雲国風土記の研究IV 神門水海南辺の研究（論考編）』島根県古代文化センター調査研究報告書47 島根県古代文化センター 3~14頁
- 中村唯史 2006a 「神戸川デルタの地形発達」『島根県立三瓶自然館研究報告』第4号 島根県立三瓶自然館 25~29頁
- 中村唯史 2006b 「山陰中部地域における完新世の海面変化と古地理変遷」『第四紀研究』第45巻第5号 日本国第四紀学会 407~420頁
- 中村唯史 2009 「塩治の自然環境」『出雲塩治誌』出雲塩治誌刊行委員会 3~39頁
- 中村唯史 2014 「縄文時代の島根県の古地形と三瓶火山の活動の影響」『山陰地方の縄文社会』古代文化センター 研究論集第13集 島根県古代文化センター 87~92頁
- 中村唯史・野坂俊之 2006 「神西湖西岸低地の完新世環境変遷」『島根県立三瓶自然館研究報告』第4号 島根県立三瓶自然館 17~23頁
- 野津左馬之助 1930 「神西湖の排水」『島根県史』第9巻 島根県 299~300頁
- 林正久 1989 「斐伊川流域における鉄穴流しと出雲平野の形成」『古代出雲文化の展開に関する総合的研究－斐伊川下流域を中心として－』島根大学山陰地域研究総合センター 17~44頁
- 林正久 1991 「出雲平野の地形発達」『地理学評論 Ser.A』Vol.64 日本地理学会 26~46頁
- 三浦清 2000 「湖陵町の地学的自然」『湖陵町誌』湖陵町 1~58頁
- 山田和芳・高田裕行・高安克己 2004 「島根県神西湖堆積物の層序と完新世環境変遷史」『LAGUNA（汽水域研究）』No.11 島根大学汽水域研究センター 135~145頁
- 山田和芳・高安克己 2006a 「『神門水海』の湖岸線復元－地形・地質コアによる検討－」『出雲国風土記の研究III 神門水海北辺の研究（資料編）』島根県古代文化センター調査研究報告書34 島根県古代文化センター 41~52頁
- 山田和芳・高安克己 2006b 「出雲平野一宍道湖地域における完新世の古環境変動－ボーリングコア解析による検討－」『第四紀研究』第45巻第5号 日本国第四紀学会 391~405頁
- 山田和芳・高安克己 2007 「地質コア解析に基づいた出雲平野の形成史」『出雲国風土記の研究III 神門水海北辺の研究（論考編）』島根県古代文化センター調査研究報告書38 島根県古代文化センター 1~13頁

第2節 歴史的環境

ここでは、常楽寺柿木田古墳群が所在する湖陵町周辺を含む出雲平野の西部域（斐伊川以西）の歴史的環境について遺跡分布や範囲（第12～14図）をもとに概観し、常楽寺柿木田1号墳の通史的位置づけについて、前節で確認した地理的環境の変遷を踏まえて検討したい。なお、本文中の番号は第12図の遺跡番号に対応する。

旧石器・縄文時代

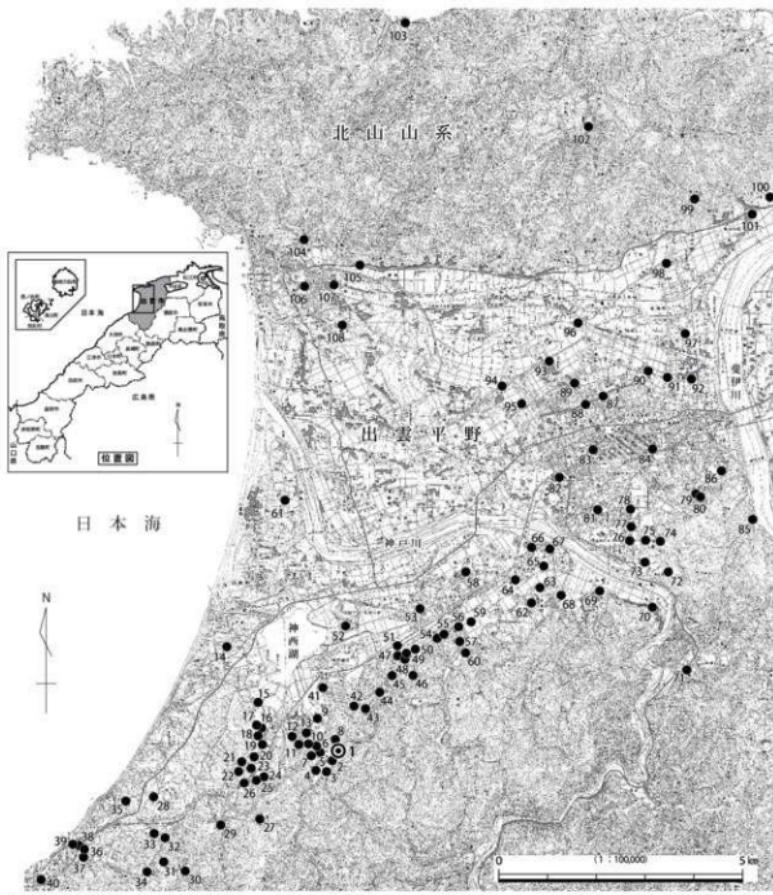
旧石器時代の遺跡は湖陵町内では確認されていないが、隣接する多伎町内の日本海沿岸付近にある砂原遺跡（多伎町、39）で石器の発見が報告されている（松藤編2013）。近接する砂原I遺跡（多伎町、36）では、約5万年前の三瓶火山から噴出した三瓶雲南テフラと三瓶池田テフラの可能性がある火山灰層、そして約3万年前から2万8千年前の南九州の姶良カルデラに由来する姶良Tn火山灰層が確認された（今岡・勝部編2010）。

出雲平野の縄文時代遺跡のなかで現在確認できる最も古い土器が出土したのは、島根半島の北山東南麓に位置する山持遺跡（西林木町、98）であり、早期の押型文土器が出土している（原田編2009）。早期末頃から前期にかけては「縄文海進」で広がった広大な内湾（古宍道湖）の近くで人々の生活が確認でき、湖陵町内の板津焼山遺跡（14）のほか、菱根遺跡（大社町、105）や上長浜貝塚（西園町、61）などが知られている（同志社大学出雲考古文化調査団1959、川上・湯村編1996、石原編2013）。

中期の遺跡は総じて少なく、前半期は山持遺跡などわずかな遺跡しか知られていない。しかし、中期後半から後期初頭になると遺跡が多く確認されるようになり、三田谷I・III遺跡（上塩治町、73）や築山遺跡（上塩治町、77）で土器がまとまって出土した（今岡・梶田編1999、伊藤編2000、米田・三原編2005）。なお、後期以降は精神文化に関連した遺物が目立つようになり、三田谷I遺跡では後期初頭から前葉頃の板状土偶が確認されている（今岡・梶田編1999）。この時期には湖陵町内で奥ノ谷遺跡（2）、その周辺では龍II遺跡（東神西町、44）で比較的多くの縄文土器が出土している（野坂編1995a、勝部編2017）。

後期前葉以降の遺跡では、明確な集落跡を示す遺構が確認できるようになる。湖陵町内では御領田遺跡（3）で後期前葉の竪穴住居跡が確認され（角田・野坂編1994）、この地に集落が存在したことを具体的に示している。この頃（約4,000年前）の三瓶山の噴火によって、神戸川の下流に大量の土砂が運ばれて出雲平野が発達した。常楽寺川を挟んで御領田遺跡の対岸に位置する京田遺跡（4）では、後期中葉から後葉にかけての竪穴建物跡や配石墓のほか、土坑墓と考えられる土坑群などが確認されており、当時の集落の様相が明らかになった（守岡正編2017a、幡中編2019、深田・園山編2020）。また、東日本に由来すると考えられる異形土器が見つかっており、さらに北海道産の可能性を示す水銀朱が付着するなど、遠隔地との交流の実態を知るうえで重要な資料となる（幡中編2019）。その他近隣する上深田遺跡（26）でも同時期の土器が出土しており（西尾・野坂2000）、複数の集落が営まれていたことを示唆する。

晩期になると、三田谷I・III遺跡、山持遺跡など以前から継続的に確認できる遺跡に加え、新たな



1 常楽寺柿木田古墳群	19 姉谷惠比須遺跡	37 後谷横穴墓群	55 間谷東遺跡	73 三田谷I・II遺跡	91 中野美保遺跡
2 奥ノ谷道路	20 只谷I・II遺跡	38 砂原小山横穴墓群	56 浅柄北古墳	74 上塙治根穴墓群	92 中野清水遺跡
3 卵領田道路	21 只谷III遺跡	39 砂原遺跡	57 浅柄I・II遺跡	75 池田古墳	93 矢野遺跡
4 京田道路	22 回向・新花前遺跡	40 砂原古墳	58 神井多多聞院遺跡	76 上塙治地藏山古墳	94 井原道路
5 常楽寺遺跡	23 神谷城跡	41 田中谷貝塚	59 浅柄古墳	77 藤山遺跡	95 白桂荒神遺跡
6 宮反I・II遺跡	24 姉谷柿木田遺跡	42 板本谷遺跡	60 保知石遺跡	78 上塙治篠山古墳	96 高浜I遺跡
7 安子神社横穴墓群	25 高畠遺跡	43 神西城跡	61 上長浜貝塚	79 菅沢古墓	97 秩父古墓
8 のの子谷横穴墓群	26 上深田遺跡	44 寒川II遺跡	62 地藏堂横穴墓群	80 長者原廃寺	98 山持道路
9 三部竹崎遺跡	27 要素山城跡	45 中上II遺跡	63 妙蓮寺山古墳	81 神門寺境内麻寺	99 鹿ヶ峯城跡
10 雪部I・II遺跡	28 雪州久色長沢遺跡	46 北光寺古墳	64 宝塚古墳	82 天神遺跡	100 大寺I号墳
11 雪部古墳群	29 姉谷鶴山跡	47 九里川遺跡	65 田端遺跡	83 海上遺跡	101 青木道路
12 食道古墳群	30 奇松鉢穴	48 五原寺裏遺跡	66 下古生遺跡	84 今市大寺古墳	102 鶴洞寺
13 竹崎遺跡	31 久村鶴山跡採掘場	49 鶴崎谷遺跡	67 古志本郷遺跡	85 横須山古墳	103 猪目洞庭遺跡
14 桜津熊山遺跡	32 久村鶴山跡採掘場	50 沢井瑞2号墳	68 放レし古墳	86 西谷横穴墓群	104 出雲大社境内遺跡
15 西安原遺跡	33 矢谷遺跡	51 丁之内古墳	69 井上横穴墓群	87 姫原西遺跡	105 姫根遺跡
16 三部八幡下遺跡	34 菊藏寺	52 山地古墳	70 小坂古墳	88 蔵小路西遺跡	106 鹿藏山遺跡
17 八幡宮横穴墓群	35 正南横穴墓群	53 神原横穴墓群	71 朝山谷墓	89 小山遺跡	107 原山遺跡
18 保知石古墳	36 砂原I・II遺跡	54 間谷妻古墳	72 光明寺3号墓	90 中野西遺跡	108 中分貝塚

第12図 常楽寺柿木田古墳群と出雲平野周辺の主要遺跡

場所にも遺跡が認められる。三田谷I遺跡では北陸地方の影響がみられる「三田谷文様」を持つ土器が出土しており(鳥谷編2000),当時の幅広い地域間交流の姿を物語る。湖陵町内では三部竹崎遺跡(9)や三部八幡下遺跡(16),周辺地域では九景川遺跡(東神西町,47),御崎谷遺跡(東神西町,49)や保知石遺跡(芦渡町,60),浅柄遺跡(知井宮町・芦渡町,59)などで晩期の土器や石器が確認されている(角田・野坂編1994,野坂編1995b,園山編2000,川原編2005,池淵編2008,今岡編2009)。

弥生時代

弥生時代には水稻農耕を生活基盤とする社会へと徐々に移行するが,前期には稻の圧痕が確認できる土器が見つかった矢谷遺跡(多伎町,33)や,稻の圧痕が残る土器と配石墓が確認された原山遺跡(大社町,107)など(村上ほか編1986,松尾編2004),新たな遺跡が見つかる一方で,縄文時代の晩期頃から存続する遺跡が目立つ。湖陵町内では三部竹崎遺跡や三部八幡下遺跡,縄文時代後晩期の粗製土器と弥生時代前期の土器が確認された姉谷恵比寿遺跡(19)などが知られ(杉原ほか編1987,野坂編1995b),出雲平野中央部では矢野遺跡(矢野町,93),姫原西遺跡(姫原町,87),蔵小路西遺跡(渡橋町・小山町,88)などで縄文時代晩期後半から連続的に集落が存続したと考えられる(足立編1999,間野編1999,坂本編2010)。狩猟採集を生業とした縄文時代から水稻農耕を基盤とする弥生時代へと比較的スムーズに移行した様子がうかがえる。

中期になると湖陵町内で確認できる遺跡数が減少し,姉谷柿木田遺跡(24)などで土器が見つかっている程度である(西尾・野坂2000)。一方で,神戸川の沿岸部では古くに貝塚の存在が確認された知井宮多聞院遺跡(知井宮町,58)のほか(勝部・西尾編1980),古志本郷遺跡(古志町,67)や下古志遺跡(下古志町,66),田畠遺跡(下古志町,65),天神遺跡(天神町,82)などの環濠を持つ集落が中期中葉頃に出現し(岸編1997,松山編1998,三原編2000,米田・三原編2001),後期以降も存続する集落が多い。また,出雲平野中央部でも海上遺跡(塙治町,83)や中野清水遺跡(中野町,92),小山遺跡(小山町,89),白枝荒神遺跡(白枝町,95)などでこの時期の遺物がまとまって出土し(米田・三原編1997,藤永編2002,園山編2002,角田編2006),集落が存在していたことを示唆する。中期中葉頃には出雲平野中央部の中野美保遺跡(中野町,91)で方形貼石墓が築かれ(仁木編2004),中期後葉に青木遺跡(東林木町,101)で萌芽的な四隅突出型墳丘墓が認められるなど(今岡ほか編2006),墳墓の形成が徐々に目立つようになる。

後期には各地で人々の活動が活発になり,確認される遺跡数が急増する。湖陵町内では神西南湖平野部から谷の丘陵裾部付近において京田遺跡のほか,只谷I・II遺跡(20),西安原遺跡(15),三部八幡下遺跡,雲部I・II遺跡(10),庭反I・II遺跡(6),竹崎遺跡(13)などが確認でき,高畦遺跡(25)では竪穴住居跡が見つかっている(野坂編1995b,西尾・野坂1995・2000,勝部編2017)。湖陵町周辺においても竪穴住居跡や竪穴建物跡が確認された上長浜貝塚や玉泉寺裏遺跡(東神西町,48),貝塚が形成された田中谷貝塚(西神西町,41)が認められる(西尾・野坂1995・2000,川上・湯村編1996,人見編2017)。出雲平野中央部でもこの時期から盛行する集落が多く,井原遺跡(白枝町,94)で環濠の可能性のある溝が確認できる(岸編2002)。また白枝荒神遺跡では,包含層から銅鏡の破片やガラス製の小玉などが出土しており(須賀編2018),集落の性格を考えるうえで興味深い。こ

これら後期の集落は古墳時代以降まで存続する場合が多い。墳墓に関しては、湖陵町周辺では玉泉寺裏遺跡で終末期から古墳時代初頭の木棺墓が確認される程度である（景山・曾田編 2008）。出雲平野中央部では中野美保遺跡、青木遺跡で四隅突出型埴丘墓が造営されるほか、丘陵部にある西谷墳墓群（大津町、86）では西谷3号墓に代表される国内でも有数の巨大な四隅突出型埴丘墓が連続的に造営され（坂本編 2006、渡邊・坂本編 2015）、王墓が連綿と繼承される様子をうかがい知ることができる。

古墳時代

古墳時代になると各地で古墳が造営されるようになる。前期の古墳は、前期末から中期初頭頃に造られたと考えられる常楽寺柿木田1号墳を含む常楽寺柿木田古墳群（1）が湖陵町内で確認されている（野坂編 2000、宮本編 2019、幡中編 2021）。湖陵町周辺では2基の組合式木棺と1基の箱式石棺を備えて筒形銅器や銅鏡などが副葬された前期末頃の円墳とされる山地古墳（神西沖町、52）が著名であり（川上編 1986）、それに先行する古墳も確認されている。例えば、粘土櫛と櫛櫛を備える埋葬施設が確認された浅柄II古墳（浅柄II遺跡）（知井宮町、57）や埋葬施設に土器棺2基を持つ浅柄北古墳（知井宮町、56）が挙げられ（川原編 2005、今岡編 2009）、これらは前期中葉から後葉頃に造られたと考えられる。さらに前期末から中期初頭には、奥才型木棺と呼ばれる棺内に織敷を設けた組合式木棺を持つ間谷東古墳（知井宮町、54）が出現する（景山・曾田編 2008）。この埋葬施設は九州地方北部から近畿地方北部の複数地域で展開しており、日本海沿岸にまたがる当時の地域間交流の一端を示している。このように、出雲平野のなかで湖陵町内とその周辺は前期に古墳の造営が盛んであった地域であることが分かる。また、出雲平野中央部とその周辺では西谷古墳群内における前期後葉の長方墳と考えられる西谷7号墳、前期後葉の前方後圓墳である大寺1号墳（東林木町、100）、詳細時期が不明な方墳の権現山古墳（大津町、85）などが知られる（萩編 2003、仁木編 2005、坂本編 2006）。

前期の集落は弥生時代中期以降から継続することが多いものの、古志本郷遺跡や下古志遺跡では集落を廻る溝に大量の土器が廃棄されるなど（米田・三原編 2001、守岡編 2003）、大規模な集落が衰退する様子がうかがえる。また、湖陵町周辺において御崎谷遺跡や玉泉寺裏遺跡、間谷東遺跡（知井宮町、55）などで前期の遺物が一定量出土するほか（景山・曾田編 2008、今岡編 2009）、中上II遺跡（東神西町、45）では、弥生時代終末頃から前期初頭頃の土器の廃棄を伴う水辺の祭祀が確認され（深田・岡山編 2020）、その時期の集落が存在したことを示唆する。

中期中葉から後葉には前方後圓墳の北光寺古墳（東神西町、46）が築かれ（仁木編 2007）、この時期の出雲地方において最大級の規模を誇る。その他、湖陵町内では、舟形石棺が出土した雲部古墳群（11）の雲部3号墳が知られ（西尾・野坂 2000、野坂編 2000）、その周辺では浜井場2号墳（東神西町、50）や丁之内古墳（東神西町、51）が存在するなど（川上 1981、岸編 2005）。この時期において、出雲平野西部は古墳が集中する地域となっている。一方、出雲平野中央部では弥生時代後期の西谷古墳群から連綿と続く西谷古墳群や池田古墳（上塩治町、75）が知られるにとどまる（川上ほか編 1993、米田編 2001、坂本編 2006）。

中期の集落に関連する遺跡としては、湖陵町内では前期後葉から中期の土器がまとまって出土した只谷III遺跡（21）、周辺地域においては前期後半から中期前葉の住居跡が見つかった浅柄遺跡、土器

を伴う水辺の祭祀が行われた九景川遺跡などが確認されている（西尾・野坂 1995, 園山編 2000, 池淵編 2008）。出雲平野中央部でも弥生時代から断続的に継続する中野西遺跡（中野町, 90）や中野美保遺跡でまとまった遺物が出土したほか（坂本編 2002, 仁木編 2004），中野清水遺跡や三田谷 I 遺跡においては複数の竪穴住居跡などが見つかり，集落での活動が盛んであった様子が見て取れる（今岡・梶田編 1999, 久保田・渡邊編 2005）。なお，三田谷 I 遺跡では九景川遺跡と同様に水辺の祭祀に関連する遺構が確認されている。

後期の古墳は湖陵町内で倉道古墳群（12），その周辺では砂原古墳（多伎町, 40）などが知られるにとどまるが（西尾・野坂 2000, 松尾編 2004），出雲平野中央部では大規模な首長墳が相次いで築かれる。神戸川右岸に出雲地方最大規模の前方後円墳である今市大念寺古墳（今市町, 84）をはじめ，切石造りの整美な横穴式石室を持つ上塩治築山古墳（上塩治町, 78）や上塩治地藏山古墳（上塩治町, 76）が出現する（勝部・西尾編 1980, 川上編 1988, 松本編 1999, 三原・高橋編 2004, 坂本編 2018）。神戸川左岸には首長墳に次ぐ規模の妙蓮寺山古墳（下古志町, 63）や放レ山古墳（古志町, 68），宝塚古墳（下古志町, 64）などが造営される（山本編 1964, 勝部・西尾編 1980）。こうした首長墳を中心とした古墳群の造営が終息に向かう終末期には，出雲平野で大規模な横穴墓群の構築が顕著になる。首長墳が展開した神戸川右岸において，現在 235 基が確認される上塩治横穴墓群（上塩治町, 74）は全国でも屈指の規模を持つ横穴墓群であり，22 支群からは金糸や金製の環などの豊富な副葬品が出土した（守岡正編 1998）。神戸川左岸には神門横穴墓群（神門町・知井宮町, 53）が構築され，今までにおよそ 12 支群 138 基が確認されている（米田編 1995, 石原編 2021）。横穴墓群は出雲平野全域に波及し，神戸川左岸以西では井上横穴墓群（古志町, 69），地蔵堂横穴墓群（下古志町, 62），湖陵町内では八幡宮横穴墓群（17），安子神社横穴墓群（7），の子谷横穴墓群（8）などが築かれる（松山編 1994, 野坂編 2000, 守岡正編 2017a）。多伎町内でも正南横穴墓群（35）や後谷横穴墓群（37），砂原小山横穴墓群（38）などが知られる（松尾編 2004）。

後期の集落は，中期から継続する中野美保遺跡や中野清水遺跡，三田谷 I 遺跡など出雲平野中央部で引き続き確認できる。湖陵町内では，竪穴建物跡が確認された板津焼山遺跡，庭反 I・II 遺跡や只谷 I～III 遺跡，三部竹崎遺跡などで集落が存続しており（西尾・野坂 1995, 石原編 2013），湖陵町周辺でも浅柄 III 遺跡（知井宮町, 57）で掘立柱建物跡が確認されている（守岡正編 2017b）。

奈良・平安時代

奈良時代は律令国家の成立に伴って各地に国・郡制が整備される。733 年に奏上された『出雲國風土記』によると，出雲国には 9 つの郡と 61 の郷があり，現在の出雲市域はそのうち櫛縫郡，出雲郡，神門郡，飯石郡の 4 つの郡に属していた。出雲平野は出雲郡の一部と神門郡で構成され，出雲郡の官衙関連施設には礎石建物跡や神社施設と思われる縦柱建物跡，墨書き土器や神像，絵馬などが発見された青木遺跡や，三彩多口瓶や墨書き土器が出土した鹿藏山遺跡（大社町, 106）が確認されている（石原編 2005, 今岡ほか編 2006）。神門郡の郡家は古志郷にあり，古志本郷遺跡で見つかった L 字の長舎建物跡や正方位の区画溝を持つ規則的な建物跡群がその関連施設であったと推定されている（松尾編 2003）。神門郡におけるその他の官衙関連施設の痕跡は，天神遺跡や三田谷 I 遺跡などで見つかって

おり、天神遺跡では倉庫とみられる大型の総柱建物跡のほか墨書き土器や綠釉陶器が確認され（横山ほか編 1977）、三田谷 I 遺跡では墨書き土器や木簡が出土した（熱田編 2000）。

この時期には各地で火葬墓が見つかっており、神戸川沿岸部では石櫃が確認された小坂古墳（馬木町、70）や光明寺 3 号墓（上塙治町、72）、石製蔵骨器が出土した菅沢古墓（上塙治町、79）や朝山古墓（朝山町、71）などが知られている（勝部・西尾編 1980、高橋・片倉編 2000）。出雲郡宇賀郷に属する猪目洞窟遺跡（大社町、103）は『出雲國風土記』に記された「黄泉の穴」として知られ、弥生・古墳時代の人骨が出土し、なかには貝輪を装着した人骨も確認される一方で、土器や石器なども出土しており、ある時期には生活の場として利用されていたことが分かっている（松本・松尾 2002）。

古代寺院跡については、長者原廃寺跡（上塙治町、80）や新造院と推定される神門寺境内廃寺跡（塙治町、81）が古くから知られる（勝部・西尾編 1980）。湖陵町を含めた神西湖周辺は神門郡の古志郷と多伎郷に挟まれた滑狭郷にあたり、湖陵町内では掘立柱建物跡などが確認された京田遺跡、庭反 II 遺跡や常楽寺遺跡（5）、周辺地域において多数の建物跡や掘立柱建物跡が確認された九景川遺跡や浅柄遺跡は集落跡であると考えられる（杉原ほか編 1987、圓山編 2000、池澤編 2008、勝部編 2017）。奈良時代に開かれた天台宗の古刹である華藏寺（多伎町、34）には、平安時代中後期の作とされる毘沙門天立像が安置されている（松尾編 2004、『久村の歴史』編集委員会編 2011）。

また、神西湖は「神門水海」として『出雲國風土記』に登場し、「出雲大川」と呼ばれた当時の斐伊川と神戸川が注ぎ込み、現在の神西湖よりも水域が広く汽水環境であったことが記されている。この神門水海の周辺には古代から中世にかけて貝塚が形成されており、湖陵町内の常楽寺遺跡や御領田遺跡のほか、上長浜貝塚や中分貝塚（大社町、108）などが知られる（石井編 1981、杉原ほか編 1987、角田・野坂編 1994、川上・湯村編 1996）。特に、上長浜貝塚は古代の貝塚としては全国でも最大級の面積であり、奈良・平安時代以降にかけて神門水海の資源を積極的に利用していたことを示している。

中世

鎌倉時代に出雲国の守護となった佐々木氏は、塙治郷を拠点として塙治氏を称し、領国支配を行った。出雲平野中央部の築山遺跡で確認された礎石建物跡や区画溝、貿易陶磁器などはこの時期の塙治氏に関連するとみられる（原編 2009）。蔵小路西遺跡では掘立柱建物跡が確認されて大量の貿易陶磁器が出土しており、有力な国衙在官人である朝山氏の居館跡と考えられている（間野編 1999）。貿易陶磁器については、荻杵古墓（荻杵町、97）で青磁の優品が出土している（勝部・西尾編 1980）。その他、大型建物跡や最古級の将棋盤が確認された高浜 I 遺跡（高岡町、96）も居館跡の可能性があると考えられる（今岡編 2011）。

出雲大社境内遺跡（大社町、104）で発見された、3 本の柱を結束して 1 本の巨大な柱とした社殿跡は 13 世紀後半頃のものに比定され、当時の出雲大社（杵築大社）の本殿はかなり大きな掘立柱の構造であったことが分かる（景山ほか編 2004、穴道編 2018）。また当時の出雲大社と双壁をなしたのが島根半島の北山山系に立地する鰐淵寺（別所町、102）であり、境内において複数時期に大規模な造成工事が行われたことが分かっている（石原ほか編 2015、原・石原編 2022）。

湖陵町内で中世以降の集落跡と考えられるのは、建物跡や青磁などが見つかった庭反 II 遺跡や常楽

寺遺跡のほか（杉原ほか編 1986・1987），掘立柱建物跡や柵列跡が確認された三部八幡下遺跡や岡屋・新花前遺跡（湖陵町，22）が挙げられる（野坂編 1995b，西尾・野坂 2000）。また，湖陵町周辺でも麓Ⅱ遺跡や坂本谷遺跡（西神西町，42）で建物跡が確認されており（勝部編 2017），この時期に多くの集落が存在していた様子がうかがえる。

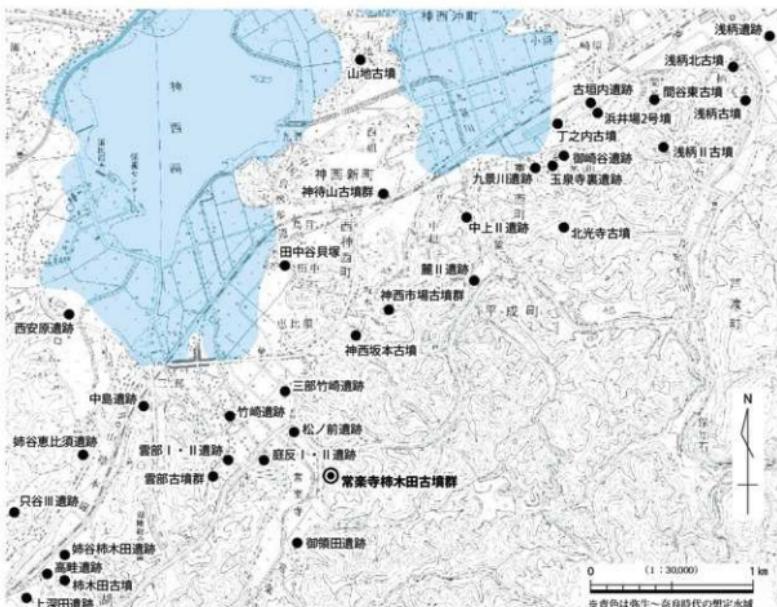
室町時代から戦国時代には出雲平野周辺で多くの山城が築かれる。毛利氏が尼子氏復興戦の際に攻略の拠点とした島根半島の北山山系に立地する鳶ヶ巣城跡（西林木町，99）や，鎌倉時代から続く神西氏代々の居城で出雲十旗に數えられる神西城跡（東神西町，43）が知られ（勝部・西尾編 1980，山根 1993・2013），湖陵町内にも姉谷城跡（23）や要害山城跡（27）などいくつかの山城が存在する（山根 1993）。また，神西城跡に近接する麓Ⅱ遺跡や坂本谷遺跡，中上Ⅱ遺跡では防衛施設と推定できる柵列が確認された（勝部編 2017，深田・圓山編 2020）。

近世・近代

近世の集落について，湖陵町では保知石谷遺跡（18）や三部八幡下遺跡で墓や建物跡などが見つかっているが（野坂編 1995b），集落全体の様相は不明瞭である。多伎町で確認された近世後世の雲州久邑長沢焼窯跡（28）は，山陰地方で最も早い時期の磁器生産の窯跡として知られ，精巧な優品から日常雑器まで幅広く生産されていた（松尾編 2004，『久村の歴史』編集委員会編 2011）。

中世から近世にかけて，出雲地方の山間部ではたら製鉄が盛んに行われ，砂鉄採取のための鉄穴流しによる大量の土砂が斐伊川や神戸川によって下流に運ばれた。また近世の前半期に差海川が開削されて水域が縮小し，神西湖はほぼ現在の形となっている。出雲西部においてもたら製鉄が盛行し，近世初期には，仁多郡奥出雲町上阿井の櫻井家から分家した田儀櫻井家がたら製鉄業を営み，多伎町奥田儀を拠点として出雲国屈指の鉄山師（たら製鉄の経営者）にまで成長する。詳細な位置は不明であるが，多伎町の赤松鉄穴（30）で鉄穴流しを行っていたことが文献史料に記されており（『久村の歴史』編集委員会編 2011），田儀櫻井家の製鉄経営を支えた基幹的なたら場であった多伎町の越堂鉱への砂鉄供給地となっていた。

この地域は近代でも重要な砂鉄の供給地であり，昭和初期に国内で鉱物資源の需要が高まり，1940（昭和 15）年から探鉱場や選鉱場など近代的な設備を整えた久村鉱山（多伎町，31・32）が操業されていた（仁木・福田編 2019）。また，近接する湖陵町の姉谷鉱山（29）でも砂鉄採掘が行われ，これまでに複数の坑道が確認されているが，近代的な久村鉱山とは対照的に人力作業で採掘していた小規模な鉱山としての実態を示している（東山ほか 2018）。久村鉱山は最盛期に多くの精鉱を生産したが，1949（昭和 24）年には過度経済力集中排除法により閉山を余儀なくされた（『久村の歴史』編集委員会編 2011）。



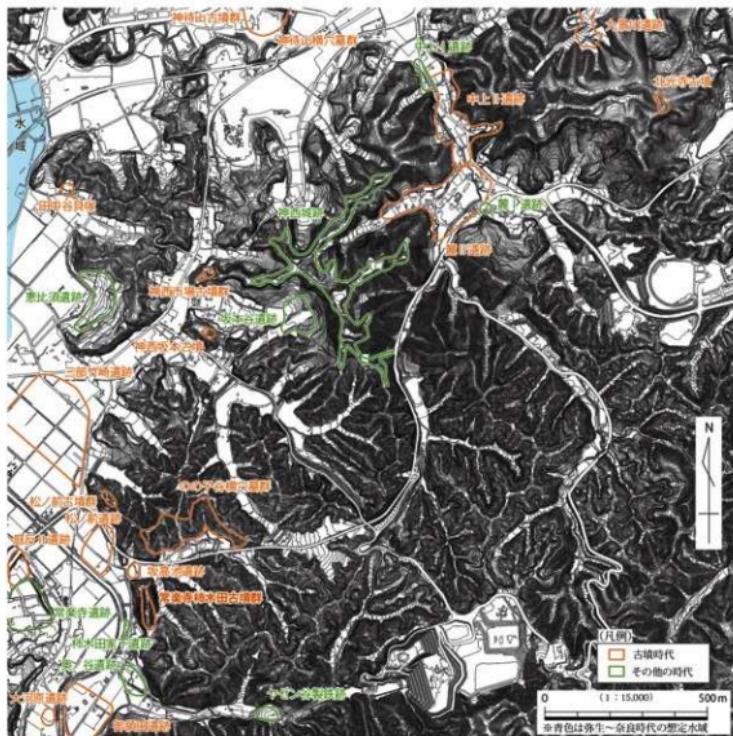
第13図 湖陵町周辺における古墳時代前半期の主要遺跡・古墳の分布

第2表 歴史的環境の参考文献一覧

編著	発行年	文献名・論文名	シリーズ名・脚注文献・脚注頁	発行機関
足立克己編	1999	御領西道路	一般国道1号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1	鳥取県教育委員会
熱田貴保編	2000	三田井1・II遺跡 (Vol. 2)	東伊丹駅水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2	鳥取県教育委員会
池端俊一編	2008	九郎川遺跡	一般国道山口インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1	鳥取県教育委員会
石井 憲編	1981	鳥取県埋蔵文化財調査報告書類	—	鳥取県教育委員会
石原 勉編	2005	鹿島山遺跡	大社町立大社小学校改築事業に伴う発掘調査報告書	大社町教育委員会
石原 勉編	2013	鈴木続山遺跡	出雲市鶴崎町津上地区歴史整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、出雲市の文化財報告書24	出雲市教育委員会
石原 勉編	2021	神門横六塚群 第10支群	下關町開港安寧工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、出雲市の文化財報告書45	出雲市教育委員会
石原 勉・穴道年弘・野坂哲之・二原一時編	2015	出雲縣吉印埋蔵文化財調査報告書	出雲市文化財報告書28	出雲市教育委員会
伊藤 哲編	2000	三田井Ⅲ遺跡	東伊丹駅水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X	鳥取県教育委員会
今岡一二編	2009	鈴木谷遺跡 門谷東遺跡 浅柄北古墳 門谷Ⅳ遺跡	一般国道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	鳥取県教育委員会
今岡一二編	2011	高浜1遺跡	一般県道矢知今小峰地方道路交付金事業 (大塚工区) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2	鳥取県教育委員会
今岡一二・鶴山信造編	1999	三田井1遺跡 (Vol. 1)	東伊丹駅水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V	鳥取県教育委員会
今岡一二・平石 光・鶴尾光品編	2006	吉木遺跡Ⅱ (生年～平安時代編)	国道431号道路改築事業 (東林木バイパス) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	鳥取県教育委員会
今岡一二・鶴澤智明編	2010	砂原車塚古墳群・砂原1遺跡	一般国道多賀インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	鳥取県教育委員会
角田能史編	2006	中野清水遺跡 (3)・白木本郷遺跡	一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書	鳥取県教育委員会

編者	発行年	文獻名・論文名	シリーズ名・叢書文献・冊数	発行機関
角田徳幸・野坂俊之編	1994	南丹地区祭賀開拓事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 御前山道路・二郎谷道跡	—	湖南町教育委員会
鶴山貞二・石原 肇・ 松尾亮品編	2004	出雲大社境内道路	—	大社町教育委員会
鶴山貞二・吉田延彦編	2008	玉草寺表遺跡 池井畠 4号墳 畠谷東古墳	一般国道出雲インターフェンス事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6	出雲市教育委員会
鶴部 駿・西尾克己編	1980	出雲・土塙治地域を中心とする埋蔵文化財発掘調査報告書	—	島根県教育委員会
鶴部智明編	2017	難波道跡 岩本道跡 京田道跡 (1区)	一般国道 9号 (出雲側跡) 改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1	島根県教育委員会
川上 桂	1983	丁ノ内付村の発掘調査	出雲市古墳墓改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 13 ~ 18頁	出雲市教育委員会
川上 桂編	1986	山地古墳発掘調査報告書	—	出雲市教育委員会
川上 桂編	1988	史跡今市大念寺古墳保存改修事業報告書	—	出雲市教育委員会
川上 桂・松山智弘・ 藤村 功・米田英江子編	1993	西脇15・16号墓発掘調査報告書	—	出雲市教育委員会
川上 桂・岡村 功編	1996	上長浜貝塚	—	出雲市教育委員会
原原和人編	2005	磐ノ前道跡・磐原1道跡・ク手山道跡・磐原2道跡・磐原3道跡 磐ノ後道跡・保知石道跡・浅瀬石道跡・柳ノ内1道跡	山陰自動車道鳥取盆地線(宍道~出雲間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2	島根県教育委員会
岸 道二編	1997	天神道跡第7次発掘調査報告書	—	出雲市教育委員会
岸 道二編	2002	丹原道跡発掘調査報告書	—	出雲市教育委員会
岸 道二編	2005	浜井堀古墳群発掘調査報告書	—	出雲市教育委員会
久保田一郎・ 渡邊英美子編	2005	中野清水道跡 (2)	一般国道 9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 6	島根県教育委員会
「久村の歴史」 編集委員会編	2011	久村の歴史	—	久村地区連合自治会
坂本貴治編	2002	中野西道跡	出雲北部第二土地上地区整理事業に伴う発掘調査報告書	出雲市教育委員会
坂本貴治編	2006	西脇須磨原一平成14~16年度発掘調査報告書 1~	—	出雲市教育委員会
坂本貴治編	2010	矢野道跡	新内藤川改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・出雲市の文化財報告10	出雲市教育委員会
坂本貴治編	2018	上塙治塙山古墳の西跡討	出雲市生の森博物館研究紀要第6集	出雲市生の森博物館
吉道一弘編	2018	出雲大社境内道跡(旧木頭跡)出土品保存修理報告書	—	出雲大社
岡田信司編	2018	白枝荒神道跡	商業用施設新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・出雲市の文化財報告38	出雲市教育委員会
岡田信一・藤原友子・ 柳井勇武編	1986	船足II道跡・船足50年度緊急発掘調査報告書	—	湖陵町教育委員会
岡田信一・藤原友子・ 柳井勇武編	1987	船足II道跡・船足60年度調査報告書	—	湖陵町教育委員会
鷲山 善編	2000	浅瀬道跡	西日本製油土居K曲整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
鷲山 善編	2002	小山道跡第3地点発掘調査報告書(第4次発掘調査)	—	出雲市教育委員会
高崎哲也・片倉愛美編	2000	光明寺3号墓・4号墓	斐伊川後水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 2	出雲市教育委員会
同志社大学出雲古文化 調査団	1959	出雲古文化調査報告	同志社大学人文科学研究所紀要第2号 1 ~ 106頁	同志社大学人文科学研究所
鳥谷芳雄編	2000	三曲谷1道跡 Vol. 3	斐伊川後水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書	島根県教育委員会
仁木 啓編	2004	中野美保遺跡	一般国道 9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 4	島根県教育委員会
仁木 啓編	2005	大寺1号墓発掘調査報告書	島根県古代文化センター調査研究報告書29	島根県古代文化センター
仁木 啓編	2007	北光寺古墳発掘調査報告書	島根県古代文化センター調査研究報告書36	島根県古代文化センター
仁木 啓・福田市子編	2019	久村郡山跡・甚那跡の調査~(三)株式会社日立製作所安来工場久村駅跡	一般国道 9号(湖陵東道跡)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	島根県教育委員会
西尾克己・野坂俊之	1993	神内瀬切辻の集落道跡	湖陵町誌研究 4 12 ~ 36頁	湖陵町教育委員会
西尾克己・野坂俊之	2000	相原古代の湖陵町	湖陵町誌 147 ~ 240頁	湖陵町
野坂俊之編	1995a	一般国道改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 吉吉一里・谷谷道跡	—	湖陵町教育委員会
野坂俊之編	1995b	神内瀬切辻の集落道跡事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 (第5工区)貝谷1・2道跡・三浦八幡下道跡・中島下道跡	—	湖陵町教育委員会

編著	発行年	文獻名・論文名	シリーズ名・開設文獻・開設頁	発行機関
野坂虎之編	2000	御陵町道路地図	—	御陵町教育委員会
萩 稲人編	2003	長姫道路Vol.2 楠山古墳	佐伊川底水建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書文庫	鳥根県教育委員会
鶴中光輔編	2019	京山道路 4区	一般国道9号(出雲御陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、出雲市文化財報告書	出雲市教育委員会
鶴中光輔編	2021	常楽寺柿木田古墳群-京塗寺柿木田1号墳の調査-	一般国道9号(出雲御陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、出雲市文化財報告書	出雲市教育委員会
原 俊二編	2009	猪山道路Ⅱ	昭和今治古志道改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、出雲市文化財報告書	出雲市教育委員会
原 俊二・石原 伸編	2022	史跡御所町内発掘調査報告書 I	出雲市の文化財報告書49	出雲市教育委員会
原田敏郎編	2009	山道道路Ⅲ (6区)	国道431号延長改築事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7	鳥根県教育委員会
東山吉治・角田健幸・松尾弘之・神社昂雄	2018	出雲市御陵町神谷郡山跡測量調査報告	古代文化研究会26号 77~90頁	鳥根県古代文化センター
大見麻生編	2017	玉泉寺遺跡(VII・VIII) 九星山遺跡(VI)	一般国道9号(出雲御陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2	鳥根県教育委員会
深田 浩・鈴木 雅編	2020	京田遺跡 2区 中上Ⅱ遺跡	一般国道9号(出雲御陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6	鳥根県教育委員会
藤本照弘編	2002	海上道路	出雲市立病院移転予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
松尾弘志編	2003	古志本郷遺跡Ⅴ 出雲國神門郡家瀬道遺跡の調査	佐伊川底水建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XVI	鳥根県教育委員会
松尾弘志編	2004	多伎郷の考古学	—	多伎町ライオンズクラブ
松浦和人編	2013	砂原田石畠遺跡の研究-鳥根県多伎町砂原所在砂原道跡発掘調査報告書-	—	砂原道跡学術発掘調査会
松本弓雄編	1999	土塙治篠山古墳の研究	鳥根県古代文化センター調査研究報告書4	鳥根県古代文化センター
松本弓雄・松尾弘志	2002	猪目洞窟遺物包含層について	大社町歴史史料編(民俗・考古資料) 493~555頁	大社町
松山智弘編	1994	地城空堀六島郡発掘調査報告書	下古庄地区-一般農道整備事業埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
松山智弘編	1998	古志本郷遺跡第6次発掘調査報告書	小道延長新開道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
間野大承編	1999	小綿小路遺跡	一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 2	鳥根県教育委員会
三原一将編	2000	山道道路	市道矢掛古志道改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
三原一将・高橋智也編	2004	土塙治篠山古墳	—	出雲市教育委員会
宮本正保編	2019	常楽寺柿木田古墳群-一翁時代集落の調査-	一般国道9号(出雲御陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5	鳥根県教育委員会
村上 勇・加村健徳・植村克也編	1986	出雲・原山道跡発掘調査概要-鳥取県屢川郡人丸町-	—	大社町教育委員会
守則正司編	1998	上原里遺跡 萩原古墳 大井谷古墳 上原の横穴墓群第7・12・22・23・33・35・36・37支群	佐伊川底水建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書	鳥根県教育委員会
守則正司編	2017a	のの子谷穴古墓群 京田遺跡31号	一般国道9号(出雲御陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3	鳥根県教育委員会
守則正司編	2017b	浅耕垂遺跡	一般国道9号(出雲御陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4	鳥根県教育委員会
守則利榮編	2003	古志本郷遺跡-IIIの調査-	佐伊川底水建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書	鳥根県教育委員会
山根正明	1993	御陵町と御塚の中世城館について (一)	御陵町道研究会 12~25頁	御陵町教育委員会
山根正明	2013	神西御跡	出雲の山城 179~185頁	ハーベスト出版
山本 浩編	1964	砂原古山古墳調査報告	—	鳥根県教育委員会
横山純夫・卜部吉博・松本弓雄編	1977	天神遺跡	国立鳥取医科大学教職員宿舎建設にかかる緊急発掘調査報告	出雲市教育委員会
米田美江子編	1995	小泊山縄文墓群	—	出雲市教育委員会
米田美江子編	2001	進田古墳	一般IV・V墓葬用地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
米田美江子・三原一将編	1997	白糸葉寺遺跡	市道松木下小山道改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
米田美江子・三原一将編	2001	下古志道跡	一般国道多伎古道出雲改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
米田美江子・三原一将編	2005	猪山遺跡 I	昭和治川三刀屋塚改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
渡辺直幸・坂本貴の編	2015	西谷3号墓発掘調査報告書	鳥根大学考古学研究会調査報告第14冊 出雲市立の森総合研究所記念第5集	鳥根大学考古学研究室 出雲市立の森博物館



①常楽寺柿木田古墳群上空から
神西湖と北山山系を望む（南から）



②常楽寺柿木田古墳群上空から
中国山地を望む（北東から）

第14図 常楽寺柿木田古墳群周辺の主要遺跡・古墳の範囲（上）と周辺の遠景（下）

第3章 発掘調査の成果

第1節 既往調査の成果

常楽寺柿木田1号墳は、1998（平成10）年度から1999（平成11）年度に当時の湖陵町教育委員会が実施した分布調査で発見された。今回の主体部の発掘調査が行われるまでに島根県教育委員会および出雲市文化財課が試掘確認調査や発掘調査を実施している（第1章第1節）。ここでは、これまでの調査成果について、既刊の報告書（野坂編2000、宮本編2019、轄中編2021）などをもとに概要をまとめておきたい（第3表）。

1 湖陵町教育委員会による分布調査・測量調査の成果（第15図左）

湖陵町内の埋蔵文化財の分布やその性格などを把握することを目的に、1998年度および1999年度に当時の湖陵町教育委員会が実施した分布調査において、湖陵町内の丘陵ではそれまで知られていなかった古墳が数多く見つかった。常楽寺柿木田古墳群もその一つである。

古墳群が所在する丘陵上には植物が繁茂していたが、丘陵の最高位に盛土状の高まりが明確に確認され、そこから北側に向かった急傾斜直前の尾根上にも高まりが認められた。これらは古墳の可能性があり、前者を常楽寺柿木田1号墳、後者を常楽寺柿木田2号墳として位置づけ、後者は一辺が11m程度の方墳であると認識された⁽¹⁾。

1号墳の墳頂部の標高は約37mを測り、北側と西側への眺望が利く好立地となっている。盛土状の高まりの南側は墓地造成などでかなり削平を受けていると考えられたが、前方後円墳の可能性があつたため、1999年度に測量調査が行われた。測量調査の結果、前方部に相当する部分が大きく削平されており、明確な判断を行うことができなかつたものの、前方後円墳の場合には復元全長が30mを測り、また前方後円墳でない場合には長径が約19m、短径が約15mの楕円形墳になると予想され、いずれにしても湖陵町内で最大級の古墳となる可能性が把握された（第15図左）。

2 島根県教育委員会による試掘確認調査・発掘調査の成果（第15図右・第16図）

一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事は、2005（平成17）年度に国土交通省による出雲仁摩線として都市計画の決定によって具体的に事業化され、2008（平成20）年度から本格的に進められてきた。そのなかで事業予定地が常楽寺柿木田1号墳の一部に近接する可能性が判明し、島根県教育委員会によって試掘確認調査や発掘調査が実施された（第15図右・第16図）。

（1）2010年度試掘確認調査

古墳の規模や墳形、時期などの把握のために、島根県教育委員会は2010（平成22）年に5箇所のトレチを設定して試掘確認調査を行った。墳丘の測量調査が改めて実施された後に墳丘端部と考えられる位置にトレチが設定され、試掘確認調査が実施された。調査では4・5トレチで墳丘端部

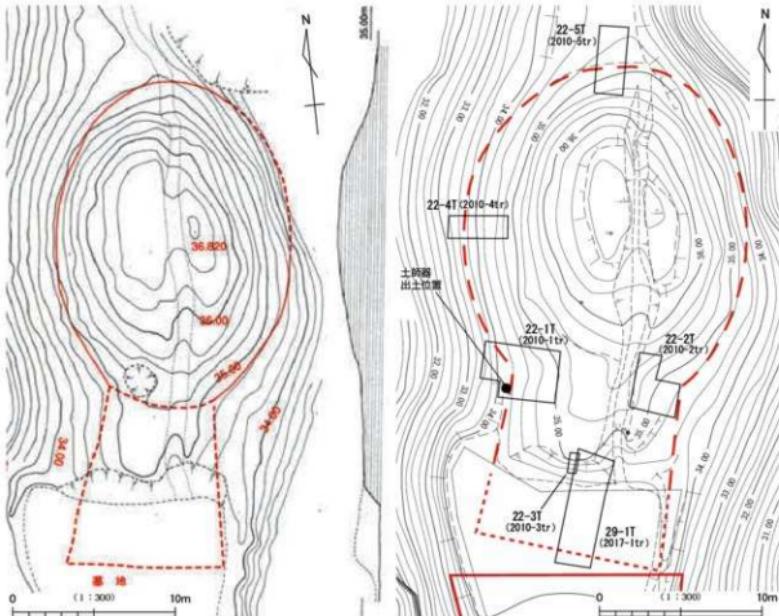
を示すとみられる傾斜変換点が認められたほか、1トレンチで地山がくびれ部上に湾曲している状況が観察され、前方後円墳の要素が確認されている。また1トレンチでは、くびれ部に相当する位置で土師器の甕が出土しており⁽²⁾（第17図）、古墳の築造時期を考えるうえで重要となる。

（2）2014年度試掘確認調査

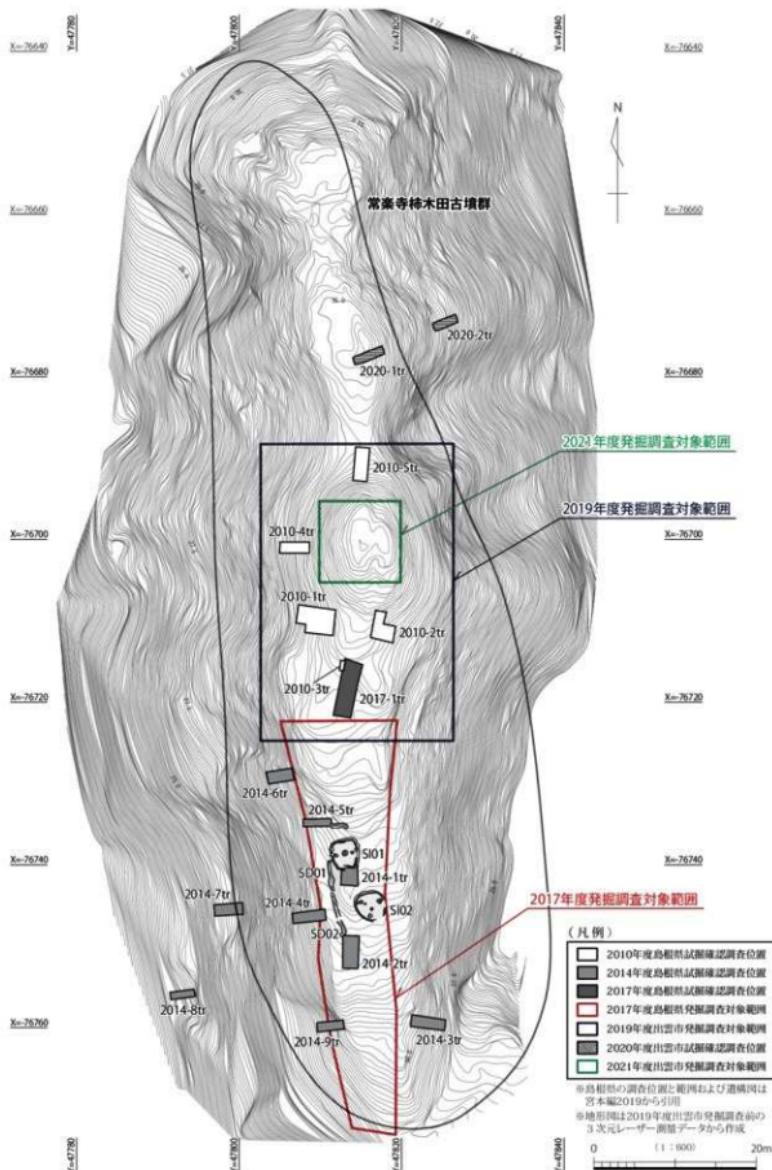
常楽寺柿木田1号墳は、古墳から南に延びる丘陵上面を覆う常楽寺柿木田古墳群の埋蔵文化財包蔵地の範囲内にあり、その丘陵南側について島根県教育委員会が9箇所のトレンチを設けて2014（平成26）年度に試掘確認調査を実施した。1トレンチでは溝状の落ち込みと弥生土器が確認されたほか、2トレンチで溝状の落ち込み、5トレンチで弥生土器が確認されたことから、弥生時代の遺構が存在する蓋然性が高まり、試掘確認調査した範囲を中心に丘陵南側の発掘調査が必要であると判断された。出土した弥生土器は甕および鼓形器台であり、総じて弥生時代の後期後半頃に比定されている。

（3）2017年度発掘調査

2014年度の試掘確認調査の結果を踏まえ、丘陵南側の全面的な発掘調査が島根県教育委員会によって2017（平成29）年度に実施された。調査区北側は後世の墓地の造成で削平されていたが、調査区中央では弥生時代の竪穴建物跡2棟（SI01・SI02）と時期不明の溝状遺構2条（SD01・SD02）が見つかった。竪穴建物跡SI01からは弥生時代後期後葉の草田3期と考えられる鼓形器台が出土しており、その時期の所産である可能性が高い。また竪穴建物跡SI02も包含層出土遺物から草田2～4



第15図 常楽寺柿木田1号墳想定復元図（左：1998・1999年度調査 右：2010・2017年度調査）



第16図 常楽寺柿木田古墳群の試掘確認調査位置と発掘調査対象範囲

期と推定されるため、竪穴建物跡 S101 と概ね同じ頃に形成されたとみられ、丘陵上に弥生時代後期後葉頃の小規模な集落が展開していたことが明らかになった。弥生時代の高地性の集落跡は出雲平野のなかでは調査事例が少なく、この時期の集落様相を考えるうえで重要となる。

(4) 2017年度試掘確認調査

2017年度は、島根県教育委員会が丘陵南側の全面的な発掘調査を実施するとともに、丘陵北側に存在する常楽寺柿木田1号墳の前方部先端の確認を目的に1箇所のトレンチを設けて試掘確認調査が行われた⁽³⁾。トレンチの南半分は後世の墓地が存在した範囲であり、墓地造成に伴う土坑が確認されている。その他に東西方向の溝状遺構も確認されたが、古墳に伴うものではないと判断され、前方部の墳丘端部を示す明確な痕跡は確認されなかった。なお、試掘確認調査の報告（宮本編2019）では、墳長30mの前方後円墳として常楽寺柿木田1号墳の想定復元図が示されている（第15図右）。

3 出雲市文化財課による試掘確認調査・発掘調査の成果（第17～20図）

国交省は、一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事の事業計画のなかで完成4車線道路の整備に伴いアンカーワークによる法面工事を検討しており、常楽寺柿木田1号墳の前方部南側と東半分および後円部東側の一部が工事範囲に含まれる可能性があった。その一方で、詳細な工法内容は発掘調査の成果などをもとに具体化する方針であった。そのため、古墳の墳丘規模や構造を明確にする発掘調査が必要となり、島根県教育委員会の全面的な協力を得て出雲市文化財課が発掘調査を実施した。

(1) 2019年度発掘調査

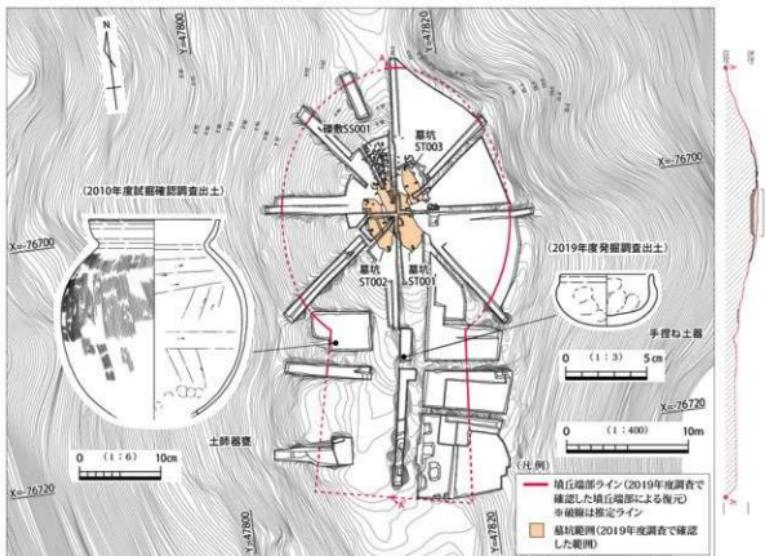
2019（令和元）年度の発掘調査は、古墳の墳丘規模や構造を可能な限り正確に把握して、葺石など墳丘の外表施設の有無を確認し、さらに主体部の有無や主体部が残存する場合における規模や範囲、深さなどを明確にする目的で、後円部に9箇所、くびれ部に2箇所、そして前方部に5箇所のトレンチを設定し、後円部東側ではトレンチ間に調査区を設けて調査を行った。

各トレンチでは墳丘端部が認められ、後円部は長径22.4m、短径18.7mの楕円形で、高さは2.7mであることを確認した。一方、前方部では後世の墓地造成などで大幅に削平されていたため南端を捉えることができなかったが、前方部の東西で墳丘端部を確認でき、その墳端ラインと丘陵東西幅との関係性から、前方部の長さは12.8m程度、裾部の幅が最大で13m程度、高さは0.9m、くびれ部の幅は11m程度となる長方形に近い台形であると推定された。これらの調査成果から、墳丘規模が最大で全長約35mの前方後円墳であったと想定される（第17図）。

後円部上面は、丘陵の地山上に全体的に盛土が施されていた。また地山の上面を精査すると、後円部における墳頂部に3箇所で地山の掘り込みが確認でき、これらが主体部の墓坑であると考えられた（墓坑ST001～ST003）（第18図）。3基の墓坑はそれぞれ規模が異なるが、主軸方向は3基ともにN-15°-Wであり、北西にある当時の神西湖の想定水域とその周辺の平野部に向けられている。

外表施設は、墳丘面に設置された葺石や埴輪は確認できなかったが、墓坑ST001の北側において墳丘面の盛土上に展開する礫敷SS001が見つかった（第19図）。

後円部の裾部に近い前方部の上面からは、ミニチュアの手捏ね土器が出土した（第20図）。また



第17図 常楽寺柿木田1号墳の墳丘規模と墳丘全体図・出土遺物（2019年度調査）



第18図 墓坑ST001～ST003平面図（左）・オルソ画像（中）・赤色立体地図（右）（2019年度調査）



第19図 碳酸SS001検出状況(2019年度調査、南西から)

第20図 手捏ね土器出土状況(2019年度調査・南西から)

2010年度試掘確認調査では、くびれ部周辺で土師器の甕が出土しているため、前方部やくびれ部周辺でこれらの土器を用いた葬送儀礼が行われたと考えられ、常楽寺柿木田1号墳は、弥生時代後期後葉から古墳時代前半期にかけての墳丘上における葬送儀礼の場が変遷するなかで重要な位置づけにあることを確認した。

(2) 2020年度試掘確認調査

常楽寺柿木田1号墳が築かれた位置から北側の丘陵東側斜面に国土交通省が管理道を設置する計画を進めており、その一部が常楽寺柿木田古墳群の埋蔵文化財包蔵地の範囲に該当していた。古墳群や関連遺構の有無などを確認するために、2020（令和2）年度に2箇所のトレンチを設けて試掘確認調査を行った。調査の結果、古墳の存在や関連遺構などは確認できなかった。

註

- (1) 2号墳の位置を正確に把握するために、2019年度の発掘調査のなかで周辺を踏査したが、墳丘の存在が想定される明確な地形の高まりは確認できなかった。
- (2) 出土した土師器の甕は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが所蔵している。
- (3) 墳丘の南側では、想定される前方部先端ではなく、現存する墳丘端部にトレンチが設けられた（宮本編2019）。

参考文献

野坂俊之編 2000『湖陵町遺跡地図』湖陵町教育委員会

幡中光輔編 2021『常楽寺柿木田古墳群－常楽寺柿木田1号墳の調査－』一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事

に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・出雲市の文化財報告46 出雲市教育委員会

宮本正保編 2019『常楽寺柿木田古墳群－弥生時代集落の調査－』一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書5 島根県教育委員会

第3表 既往調査成果のまとめ

調査主体	調査年度	調査内容	主な調査成果
湖陵町教育委員会	1998・1999	分布調査	常楽寺柿木田古墳群（1・2号墳）を発見
	1999	測量調査	常楽寺柿木田1号墳が前方後円墳（全長30m）である可能性を想定
島根県教育委員会	2010	試掘確認調査	常楽寺柿木田1号墳で前方後円墳の要素（くびれ部など）やくびれ部で土師器甕を確認
	2014	試掘確認調査	丘陵南側で弥生時代後期後半頃の遺構や遺物を確認
	2017	発掘調査 試掘確認調査	丘陵南側で弥生時代後期後葉頃の高地性集落跡を確認 常楽寺柿木田1号墳の南端が後世の墓地造成などで削平されている状況を確認
出雲市文化財課	2019	発掘調査	常楽寺柿木田1号墳が前方後円墳（全長約35m）である可能性のほか円部上に主体部の墓坑を3基確認 前方部でミニチュアの手捏ね土器を確認
	2020	試掘確認調査	常楽寺柿木田1号墳の北側に古墳や関連遺構が認められないことを確認

第2節 発掘調査の成果

2019（令和元）年度の常楽寺柿木田1号墳の発掘調査では、墳丘の後円部上に主体部の墓坑を3基確認した。古墳における主体部の保護を目的とするほか、今後の整備や活用に向けて周辺地域における常楽寺柿木田1号墳の歴史的な位置づけや評価を明確にするため、2021（令和3）年度に出雲市文化財課が主体部の残存状況を含めた内容確認のための発掘調査を実施した。

1 主体部のトレーニング設定（第21・22図）

主体部の調査方針は、主体部を中心複数のトレーニングを設けて部分的に調査を実施し、主体部内部の構造や構築状況を把握することにした。なお、2019年度の発掘調査で見つかった墓坑STO01～STO03とそれに伴う関連施設をそれぞれ第1～3主体部として把握し、各主体部にトレーニングを設定した（第21・22図）。トレーニングの位置は調査指導者の指導・助言を得て設定し、調査が進むなかで必要に応じて追加トレーニングを設けて確認を行った。ここでは、2019年度の調査成果とその報告内容（以下、2019年度調査）（幡中編2021）を踏まえ、各トレーニングで確認した主体部の遺構や土層堆積状況（第22～40図）を中心に報告する。

2 主体部の調査（第22～40図、図版5～17）

（1）第1主体部（第22・23・26・28・29・32～35図、図版7～10）

第1主体部は後円部における墳頂部中央に設けられている。第1主体部の墓坑STO01の主軸方位はN-15°-Wであり、南北に沿う墳丘の主軸に対して斜位に配置されている。今回の調査では、主体部内部に遺物は確認されなかった。なお、第1主体部の墓坑STO01の南北土層（第23図）から試料を採取してPCN分析（全リン分析およびCN分析）を行っている⁽¹⁾（第4章第1節）。

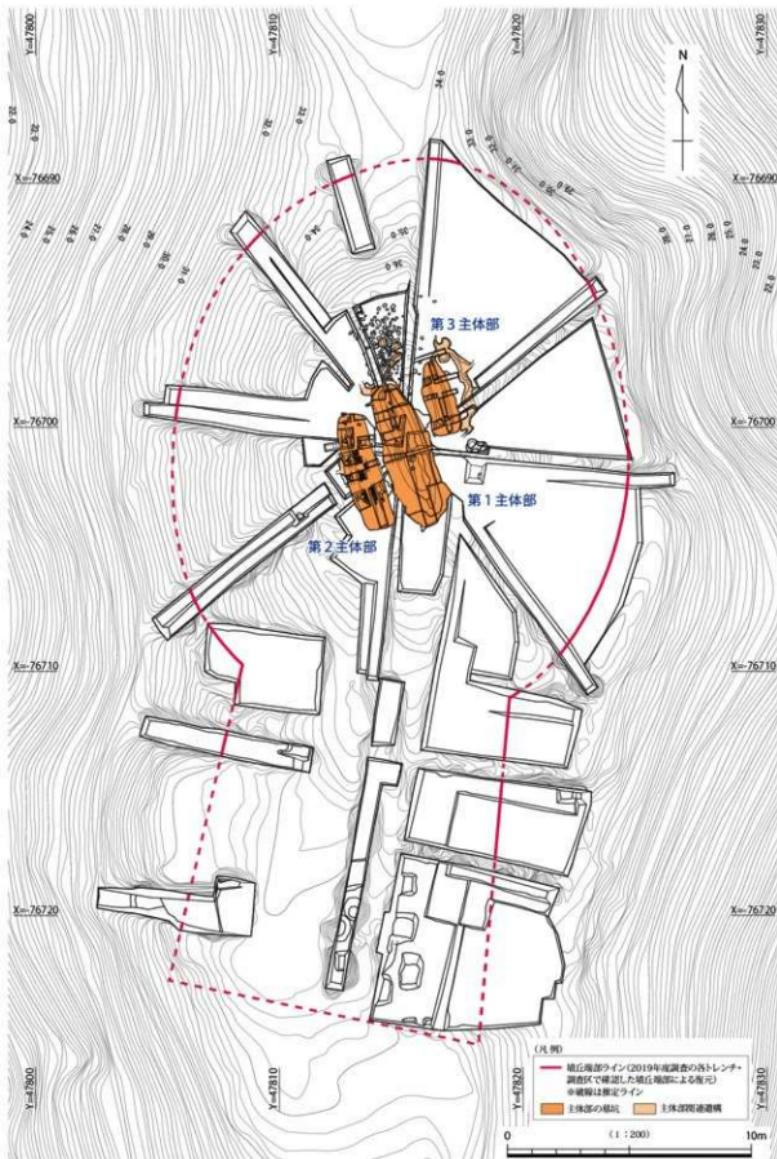
土層堆積状況（第23・26・28・29・32・33図）

第1主体部は、地山を掘り込んで墓坑STO01が構築される。地山直上には砂質土が堆積し、砂質土の上面に硬質粘質土が認められた。それらの上部には埋土が墓坑の掘形付近まで充填され、埋土上に盛土が施されていた（第23図）。なお、墓坑STO01と墓坑STO02の間には一部で硬質土を確認している（第28図②、第32図①）。盛土および埋土の堆積状況から、硬質土は埋土充填後に施されたと考えられる。各土層の詳細な堆積状況は、棺の構造のなかで確認する。

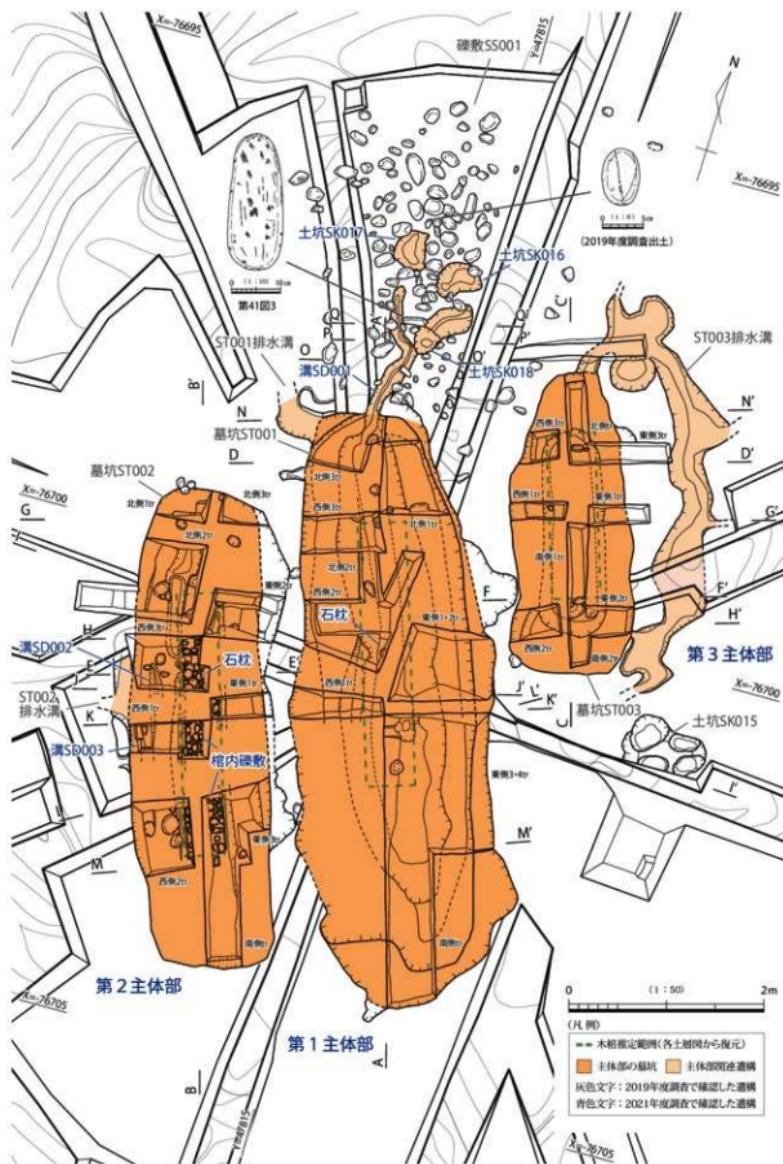
墓坑STO01の構造（第22・23図）

墓坑STO01の規模は南北約6.1m、東西約2.1mであり、深さは最大で約0.6mを測る。平面形は隅丸長方形である。北側は比較的明瞭な隅丸形となるが、南側に向かうにつれて形状が不明瞭となり、やや不整形な梢円形状に広がる。意図的に墓坑の南側の空間を広く設定した可能性が高い。

墓坑は二段の掘り込みを持ち、下段の規模は南北約4.8m、東西約1.05m、深さが約0.2m程度である。一方、墓坑の南側は一部で三段に掘り込まれて段差が生じている状況を確認した。そのため南側は墓坑の出入口となっていたことが想定され、加えてこの周辺の墓坑の幅がやや広いことも勘案す



第21図 常楽寺柿木田1号墳の主体部位置と遺構全体図



第22図 常楽寺柿木田1号墳の主体部全体図とトレンチ・土層図位置

ると、墓坑南側の空間で何らかの葬送儀礼が行われた可能性が考えられる。また、墓坑の左右壁面には緩やかな斜面や段状の加工が部分的に認められ、埋葬や葬送儀礼などに伴う足場として設けられた可能性もある。なお墓坑の下段の掘り込みはやや粗く、側面や床面に起伏が残されている。

棺の構造（第23・26・28・32～34図）

墓坑ST001の下段の掘り込み内には、上段の掘り込み面まできめの細かい砂質土が敷き詰められ、上面に平坦面を作出する。この平坦面が棺を据えた設置面を示す可能性が高いと考えられる。よって、墓坑を二段に掘り込んだ後に棺台の役割を担う敷土として砂質土が充填され、棺を設置する平坦面を作出したと想定される。

墓坑の底面に敷土で作出した平坦面の上面には、垂直方向に近い勾配で立ち上がる硬質の砂質土が第1主体部の東西土層堆積状況（第26・28図・32図①～③）で確認された。これらは棺材の裏込土であり、平坦面上に木棺を配置した後に敷設されたと考えられる。これらの状況から、第1主体部の埋葬施設は組合式木棺であったと想定できる。

また、第1主体部の南北土層堆積状況（第23図）を見ると、緩やかに立ち上がる硬質の砂質土が墓坑の北側と南側に認められ、木棺の小口板に伴う裏込土であった可能性が高い。小口板の明瞭な痕跡は確認できなかったが、裏込土や後述する硬質粘質土の位置関係から概ね小口板の設置場所が想定可能である。これらの状況を総合すると、木棺の規模は、最大で長さ約2.7m、幅0.5mと推定される。

墓坑の中央部付近の平坦面上では、西側2トレンチの東壁でやや大形の円礫が見つかった（第34図）。円礫はPCN分析（全リン分析およびCN分析）が実施され（第4章第1節）、高いリン濃度とC/N値が得られた。C/N値は植物の根などの混入物の反応を示す可能性があるものの、総合的に遺体埋葬の痕跡を残していると考えられ、石枕に伴う石材であったと想定される。なお円礫は1点のみであったが、今回の調査で確認していない部分に石枕の他の石材が存在する可能性がある。円礫を石枕と考えた場合、棺内において、後述する第2主体部の石枕と同じ位置関係にあると想定すると、頭位方向は北西方向であったと推測できる。その場合、石枕から南側は木棺内における被葬者の埋葬空間であり、北側は副葬品などが納められた空間の可能性があるが、北側の空間で副葬品は確認できず、仕切り板痕跡なども認められなかった。

木棺の小口板付近および側板部分と想定される箇所の上部に硬質の粘質土が部分的に確認された（第23・28図、第32図①～③）。これらの硬質粘質土は棺全体を覆うのではなく、天板と小口板および側板の接点面付近に重点的に施して木棺を密閉した可能性が考えられ、一部は棺材の腐朽に伴って棺内に流入した状況が土層堆積状況から認められる。なお、敷土の平坦面上には砂質土が堆積しており、底板などを含む腐朽した木棺に伴う土砂や棺内に流入した土砂であったと想定される。また棺材の腐朽に伴って埋土も棺内に崩落した状況を同時に想定できるが、2019年度調査でも墓坑の埋土上面がやや窪んだ状態であったことを確認している。

棺外施設（第22・23・33・35図）

第1主体部北側の棺外施設には、墓坑周辺の排水施設（ST001排水溝）や盛土上に礫敷SS001が展開する状況を2019年度調査にて確認した。今回の調査で墓坑内の北側端部には狭小な切り込みが認

められ、墓坑北側の礫敷 SS001 の下部に続く状況を把握した。その周辺を詳しく調査すると、幅が約 20cm、深さが最大で約 35cm の狭小な溝 SD001 を確認した（第 35 図）。溝 SD001 の延長に小形の土坑 SK016・SK017 が認められ、溝 SD001 の中央付近の分岐点近くには土坑 SK018 が設けられる。

土坑 SK018 内部からは岩脈の脈石が認められた（第 3 章第 3 節第 41 図 2）。この石材は下端部に若干の研磨痕がある程度で加工痕跡はほとんど認められなかったが、周囲の礫敷の石材と色調や風合いが明確に異なり、また単体で土坑 SK018 から出土したため、意図的に溝 SD001 に埋納した可能性がある。なお溝 SD001 は、墓坑に向かって徐々に低くなる点が注目され（第 33 図）、排水とは異なる導水機能を持つ施設であった蓋然性が高い⁽²⁾。

また溝 SD001 の分岐点付近では、長軸が東西方向となる長大な礫（第 3 章第 3 節第 41 図 3）が礫敷 SS001 のなかに敷設されていた。それ以外の礫は東西方向に設定されたものはほとんどなく、意図的に配置されたと考えられる。この礫は部分的に加工痕が認められ、石製品として用いられていた可能性があり、その後に礫敷 SS001 に転用されたと推測される。

第 1 主体部に伴う石材（第 34・35 図）

第 1 主体部の石枕として用いられた石材は、丘陵の岩盤を構成する布志名層に含まれる流紋岩質凝灰岩である⁽³⁾。また、溝 SD001 の分岐点付近に配置された長大な礫は凝灰岩質で、盛土上の礫敷 SS001 の石材も同様に凝灰岩や流紋岩質凝灰岩など布志名層由来の礫を使用しているため、これらの石材は古墳が立地する丘陵やその周辺から採取した可能性が高いと考えられる。

（2）第 2 主体部（第 22・24・27・28・31・32・36～38 図、図版 11～14）

第 2 主体部は第 1 主体部の西側に位置し、後円部における墳頂部西側の斜面付近に設けられる。墓坑 ST002 の主軸方位は N-15°-W で、第 1 主体部の墓坑 ST001 と同方向に設定されており、第 1 主体部と並列する位置関係にある。第 2 主体部からの遺物は確認できなかった。

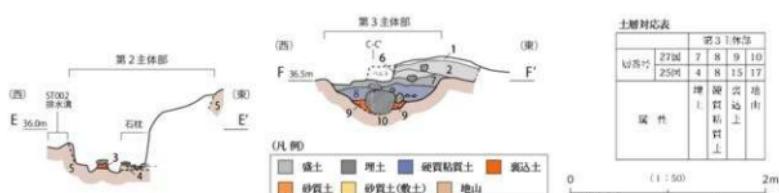
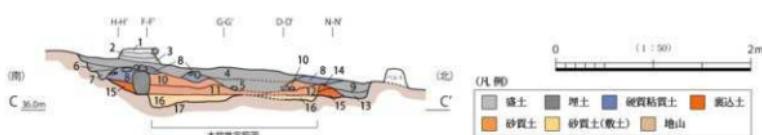
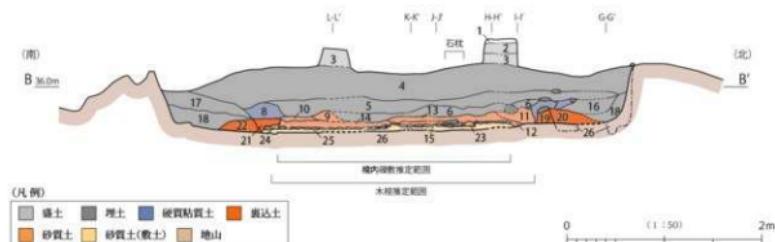
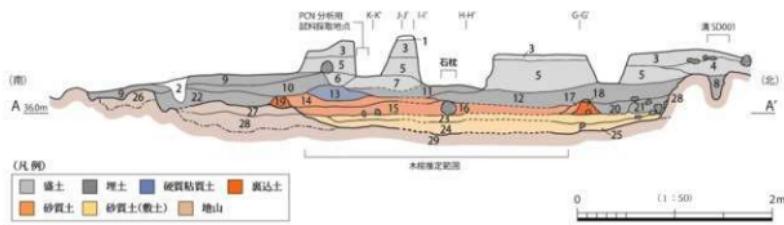
土層堆積状況（第 24・27・28・31・32 図）

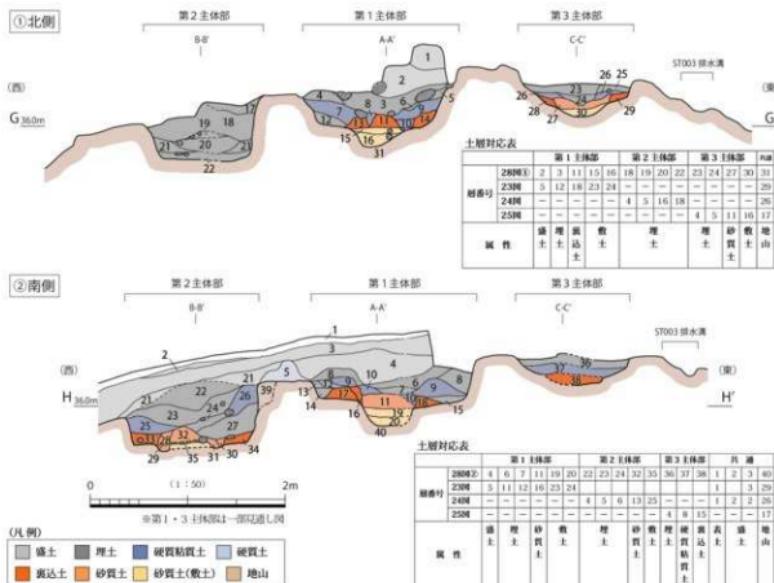
第 2 主体部は、第 1 主体部と同様に地山を掘り込んで墓坑 ST002 が構築されている。地山直上にはきめの細かい砂質土が認められ、砂質土上面に礫敷が展開していた。その上には砂質土および硬質粘質土が堆積する。埋土が墓坑の掘形上面まで充填された後に墓坑 ST002 と墓坑 ST001 の間に硬質土が施工され（第 28 図②、第 32 図①）、埋土上には盛土がなされている。各土層の詳細な堆積状況は、棺の構造のなかで検討する。

墓坑 ST002 の構造（第 22・24 図）

墓坑 ST002 の規模は、南北約 4.85m、東西約 1.4m で深さは最大約 0.7m である。墓坑は地山に対して垂直に掘り込まれ、第 1 ～ 3 主体部のなかで最も深い。平面形は隅丸長方形である。

墓坑 ST002 の掘り込みに伴う側面や底面は比較的滑らかなに整えられ、丁寧に成形されている印象を受ける。墓坑北側が高く、中央から南側は若干低くなっている。墓坑の南側には第 1 主体部にみられたような地山が複数の段状に加工された痕跡は認められない。そのなかで墓坑東西の壁面には緩やかな斜面や段が認められる部分があり、第 1 主体部と同様に埋葬や葬送儀礼などに伴う足場が設けられたと推測される。また墓坑西側は墳丘斜面付近にあたり、後世の墓地造成などで地山が削平され





第28図 第1～3主体部東西土層図



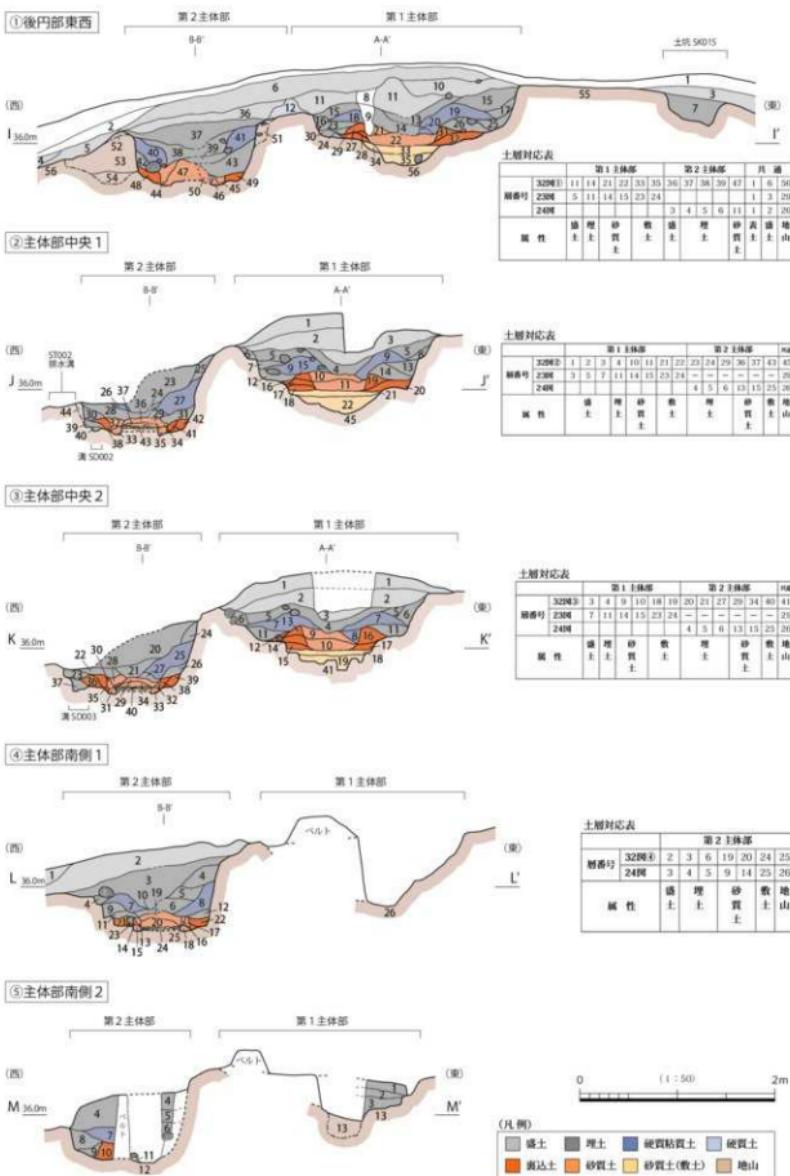
第29図 第1主体部西侧2tr土層堆積状況（北西から）



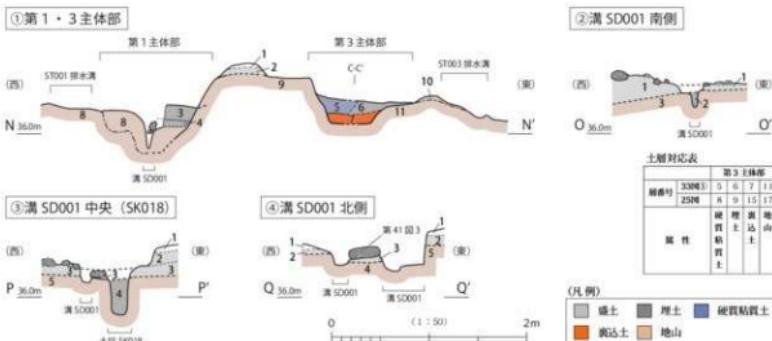
第30図 第3主体部東側2tr土層堆積状況（南から）



第31図 第2主体部西側1・3tr土層堆積状況（左：北西から 右：南西から）



第32図 第1・2主体部東西土層図



第33図 第1・3主体部および溝SD001東西土層図



第34図 第1主体部の石枕 (西側2tr, 西から)



第35図 第1主体部北側と溝SD001・礫敷SS001 (南から)

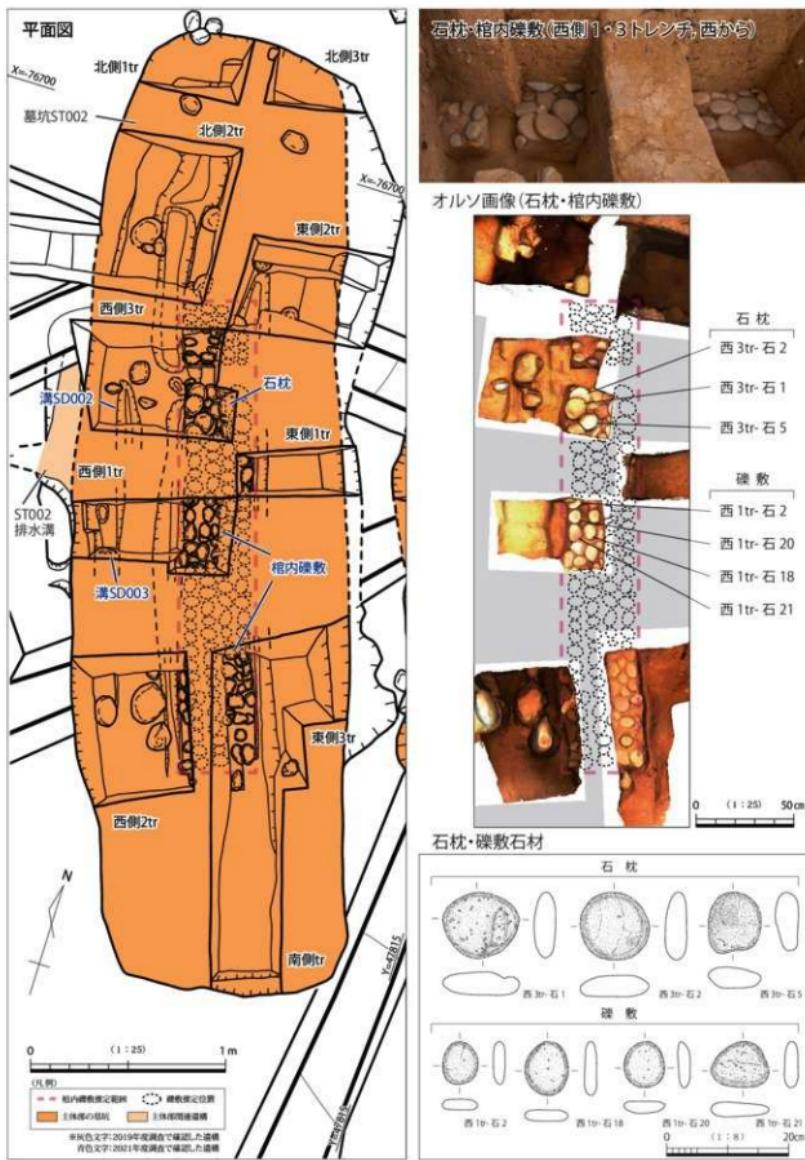
た可能性はあるが、2019年度調査のなかで構築面が他の墓坑よりも相対的に低い状況を確認している。墓坑内への出入口として、比較的低い西側斜面が利用されたと考えられる。

棺の構造 (第24・27・28・32・36～38図)

墓坑ST002底面の地山上にはきめの細かい砂質土を薄く敷き詰めて平坦面を作り出す。その上面で直径約5～10cm程度の扁平な円礫を並べた礫敷を確認した(第36・37図)。地山直上の砂質土は敷土で、各石材で厚みが異なる円礫の上面を平坦に整える礫敷台として機能したと考えられる。後述するが、礫敷外側に小口板や側板の痕跡が認められ、この礫敷は棺内の礫敷であったと考えられる。

棺内礫敷の北側では、礫敷の石材よりもやや大形の直径約10～15cm程度の円礫が円形に並べられている状況を確認した。これらは石枕として設置された蓋然性が高い。そのため、被葬者の頭位は北西方向であったと想定される。礫敷周辺の土壤はPCN分析が実施され、礫敷上面や礫敷に近い石枕上面の土層から高いリン濃度が得られ、遺体埋葬の痕跡が確認されている(第4章第1節)。

第2主体部の平面図や東西土層堆積状況(第28図②、第32・36図)を見ると、地山に幅が約10～15cm程度の溝が礫敷を挟んで2条確認できる。これらは木棺の側板を設置するための溝であると考えられる。一方で、底板の痕跡は認められないが、地山底面上には砂質土と礫敷が敷設され、また礫敷上に石枕が存在することから、礫敷が木棺の底板に相当する施設であると想定できる。これらの状



第36図 第2主体部館内碟敷全体図



第37図 第2主体部棺内碌敷全景（南西から）



第38図 第2主体部西側2tr木棺側板裏込め状況（南から）

況から、第2主体部の埋葬施設は組合式木棺であり、碌敷上に被葬者を安置したと考えられる。

また、木棺の側板を設置した溝外側には、垂直方向に立ち上がって堆積する硬質の砂質土の裏込土が認められるほか、大形の円礫が部分的に据えられた状況が確認でき（第38図）、側板を固定する裏込めとして設置されたとみられる。なお、第2主体部の南北土層堆積状況（第24図）からも裏込土が認められる。裏込土は墓坑北側で裏込めの円礫とともに敷設され、墓坑南側では碌敷の南端部付近で確認できる。これらの状況から、木棺の規模は最大で長さ約2.7m、幅0.5mと想定される。

碌敷は石枕北側で一度途切れで再び北側に敷設されている。途切れた場所には木棺の仕切り板が存在したと考えられる。一方、仕切り板の北側に展開する碌敷は、被葬者が安置された南側の碌敷よりも小形の礫が用いられ、扁平度合いはそれほど高くない。南側の碌敷とは役割が異なり、北側の碌敷は副葬品などを配置する空間に伴うものであったと想定される。なお、今回の調査では北側の空間から副葬品は確認できなかった。

木棺の小口板の近くや側板部分と考えられる箇所の上部では硬質粘質土が堆積する（第24・28図②、第32図）。第1主体部と同様にこれらは棺全体を覆わず、天板と小口板や側板との接点付近に集中的に施工して木棺を密閉したと考えられ、棺材の腐朽により棺内に流入した状況が認められる。なお、碌敷上には、木棺に伴う土砂や棺内に流入した土砂と考えられる砂質土が堆積し、また棺材の腐朽で埋土も一部が崩落した様子が土層堆積状況から確認できる。

棺外施設（第22・27・32・36図）

墓坑ST002内の棺外施設は、墓坑西側の壁面近くに設けられた溝SD002・SD003を確認した（第32図②・③、第36図）。これらの正確な用途は不明であるが、両方の溝は碌敷面よりもやや低いため、ある程度の排水機能を有したと考えられる。その他は墓坑周辺の排水施設(ST002排水溝)が存在する。

第2主体部に伴う石材（第36～38図）

碌敷の円礫は表面が風化して白色に似た色調を示すものが多く、石材は流紋岩やデイサイト、安山岩がみられるほか、溶結凝灰岩も含まれており、古墳が立地する丘陵裾を流れる常楽寺川流域周辺の碌岩層に由来する可能性が高い（第4章第2節）。また碌敷の円礫は概ね同程度の大きさで揃えられ、石材を選択的に採取していたと想定される。

石枕の石材は碌敷の石材と同様に、常楽寺川流域の碌岩層に由来する可能性が高いデイサイトや安

山岩が用いられている。礫敷の石材と同じか比較的近い場所で採取されたと推測できる。

木棺の側板を固定する裏込めに用いられた石材は凝灰岩であり、第1主体部の石枕や礫敷SS001と同様に丘陵の岩盤を成す布志名層に由来すると考えられる。

(3) 第3主体部(第22・25～28・30・33・39・40図、図版15～17)

第3主体部は、第1主体部の東側にあり、後円部における墳頂部の東側端部付近に配置される。墓坑ST003の主軸方位はN-15°-Wであり、第1・2主体部の墓坑ST001・ST002と同方向に設定されている。第3主体部からの遺物は確認されていない。

土層堆積状況(第25～28・30・33図)

第3主体部は、第1・2主体部と同じく地山を掘り込んで墓坑ST003が設けられるが、第1・2主体部に比べて浅い。地山上に砂質土が堆積し、その上に硬質粘質土と埋土が認められる。詳細な各土層の堆積状況は、棺の構造において触ることにする。

墓坑ST003の構造(第22・25図)

墓坑ST003は、南北約3.1m、東西約1.25m、深さは約0.55mを測り。墓坑のなかで最も規模が小さい。平面形は隅丸長方形であり、北側の短辺がやや短い形状となる。墓坑は地山を掘り込んで成形されているが、北側の掘り込みは南側に比べて浅く、墓坑の上面の一部が後世に削平された可能性が考えられる。墓坑の構造は第1主体部と比較的類似しており、二段に掘り込まれ、下段は南北約2.1m、東西約0.6m、深さが最大で約0.18mを測る。また墓坑の南側壁面は、第1主体部と同様に掘り込みが若干段状となっているため、墓坑内の出入口の足場として成形された可能性が考えられる。

棺の構造(第25～28・33・39図)

墓坑ST003は、上段の掘り込み面まできめの細かい砂質土が敷かれて上面が平坦面となり、第1主体部と同様の構築状況となっている。作出した平坦面に棺を据えたと考えられ、充填された砂質土は敷土として棺台の役割を担っていたと想定できる。また東西の土層堆積状況(第26・27図・28図①)からは、垂直気味に立ち上がる硬質の砂質土である裏込土が認められる。平坦面に配置された木棺の側板に伴うと想定されることから、第3主体部の埋葬施設は組合式木棺であると考えられる。

墓坑の二段目の掘り込みに伴う掘形の南端付近には人頭大の比較的大きな円礫が据えられており、小口板の裏込石であったと考えられる(第39図)。第3主体部の南北の土層堆積状況(第25図)では円礫外側に裏込土が敷設され、円礫を固定して安定させたとみられ、墓坑北側にも垂直に立ち上がる硬質の砂質土の裏込土が認められる。こうした状況を勘案すると、木棺の規模は、最大で長さ1.7m、幅0.5mであったと推定できる。また、被葬者の頭位方向は明らかではないが、第1・2主体部と墓坑の主軸方向が揃えられている点を積極的に評価すれば、頭位方向は北西であったと推測できる。

第1主体部および第2主体部と同様に、木棺の小口板付近や側板部分の上部付近に硬質の粘質土が施されている(第25・27・28図、第33図①)。これらは棺全体を被覆するのではなく、天板と小口板および側板との設置面付近に施されて木棺の密閉を意図したと考えられる。敷土上で作出された平坦面上には木棺の底板などの腐朽に伴う土砂や、棺内へ流入した土砂と想定される砂質土が堆積しており、また棺材の腐朽で棺内に硬質粘質土が埋土とともに流入した様子が土層堆積状況で確認できる。



第39図 第3主体部東側2ヶ木棺小口板裏込め状況(南東から)



第40図 第3主体部排水溝全景(北東から)

樁外施設（第22・26・28・33・40図）

第3主体部の東側には、墓坑ST003の北東端部から南東端部までの東側を囲うように排水溝(ST003排水溝)を設けている状況(第26・28図・33図①・40図)が2019年度調査で確認された。排水溝の幅は場所によって異なるが概ね20~60cm程度であり、墳丘東側の斜面の2箇所が途切れで開口する。排水溝は、主体部から墳丘下に排水する役割を果たしたと考えられるが、墳丘上での主体部を区画して明示する区画溝の役割も同時に担っていた可能性がある。

第3主体部に伴う石材（第39図）

木棺の小口板の裏込めに伴う大形の円礫は流紋岩質凝灰岩であり、第1主体部の石枕や礫敷SS001および第2主体部の裏込めの石材と同様に丘陵の岩盤を成す布志名層に由来する可能性が高い。

註

- (1) 今回の常楽寺柿木田1号墳の調査に伴うPCN分析は、日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究C(21K00989)の成果の一部を援用している。
- (2) 溝SD001は、墓坑ST001に向かって低くなる点に加え、2019年度調査で確認した墓坑ST003の排水溝(ST003排水溝)などと比べてかなり狭小であり、排水機能は期待できない。そのため、墓坑構築段階で形成された溝SD001は、墓坑の構築や被葬者の埋葬に伴う葬送儀礼に関連した導水機能を持つ施設の可能性が考えられる。
- (3) 常楽寺柿木田1号墳で確認された石材全般については、中村唯史氏からご教示を得た。

参考文献

- 幡中光輔編 2021『常楽寺柿木田古墳群—常楽寺柿木田1号墳の調査—』一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・出雲市の文化財報告46 出雲市教育委員会

第4表 土層觀察表

第1 主体部南北土層図(第23図)

番号	種名	属性	しまり	備考	番号	種名	属性	しまり	備考
1	灰青褐色土	高土	しまりなし	3～5cmの大内縫をまれに含む 木の根を多く含む	10	黄色土	砂質土	ややしまる に含む	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
2	灰褐色土	高土	しまりなし	3～5cmの大内縫をまれに含む 木の根を含む	11	明灰褐色土	砂質土	しまる	1～3mmの大塊山礫をまれに含む
3	灰褐色土	低土	しまる	5～10cmの大内縫をまれに含む	12	黄褐色土	砂質土	しまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
4	黄褐色土	土	しまりない	3～10cmの大内縫をまれに含む 10～30cmの大内縫をまれに含む	13	明灰褐色土	砂質土	しまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
5	黄褐色土	土	ややしまる	5～10cmの大内縫をまれに含む	14	明灰褐色土	砂質土	ややしまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
6	黄褐色土	土	ややしまる	5～10cmの大内縫をまれに含む	15	明灰褐色土	砂質土	ややしまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
7	黄褐色土	土	ややしまる	5～10cmの大内縫をまばらに含む	16	明灰褐色土	理工	ややしまる	3～5cmの大内縫をまばらに含む
8	黄褐色土	調査用土 理工	しまりなし		17	黄褐色土	理工	しまりなし	0.5～1mmの大白色砂利をまばらに含む
9	黄褐色土 樹木の付着土に含む	理工	しまりない	1～3mmの大塊山礫をまれに含む	18	黄色土	理工	しまりなし	1～3mmの大塊山礫をまばらに含む
10	明灰褐色土	理工	ややしまる	1～3mmの大塊山礫をまれに含む	19	明灰褐色土	調査用土	かたくしまる	0.5～1mmの大白色砂利をまばらに含む
11	黄褐色土	理工	ややしまる	3～5cmの大内縫をまれに含む	20	黄色土	栗土	ややしまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
12	にじみ 黄褐色土	理工	ややしまる	3～5cmの大内縫をまばらに含む 5～10cmの大内縫をまれに含む	21	黄褐色土	栗土	しまる	1～3mmの大内縫をまれに含む
13	明灰褐色土	破壊試料土	しまる	5～10cmの大内縫をまれに含む 3～5cmの大内縫をまばらに含む	22	にじみ 黄色土	栗土	ややしまる	1～3mmの大塊山礫をまばらに含む
14	にじみ 黄褐色土	砂質土	ややしまる	0.5～1mmの大白色砂利をまばらに含む	23	明灰褐色土	砂質土	ややしまる	0.5～1mmの大内縫をまばらに含む
15	黄褐色土	砂質土	ややしまる	0.5～1mmの大白色砂利をまばらに含む	24	明灰褐色土	砂質土	ややしまる	0.5～1mmの大内縫をまばらに含む
16	明灰褐色土	砂質土	ややしまる	0.5～1mmの大砂利をまれに含む	25	明灰褐色土	砂質土(軟土)	しまる	0.5～1mmの大内縫をまばらに含む
17	明灰褐色土	砂質土	ややしまる		26	黄褐色土	地山	かたくしまる	0.5～1mmの大白色砂利をまばらに含む

第3 主体部南北土層図(第25図)

番号	種名	属性	しまり	備考	番号	種名	属性	しまり	備考
19	明灰褐色土	栗土	中やしまる	0.5～1mmの砂利をまれに含む	20	明灰褐色土	高土	しまりなし	2～5cmの大内縫をまれに含む 木の根を多く含む
20	明灰褐色土	栗土	ややしまる	1～2mmの大塊山礫をまばらに含む	1	明灰褐色土	高土	しまりなし	木の根を多く含む
21	灰褐色土	栗土	ややしまる	3～10cmの大内縫をまばらに含む	2	黄色土	高土	しまる	5～10cmの大内縫をまれに含む
22	にじみ 明灰褐色土	理工	しまる	0.5～1mmの大白色砂利をまばらに含む	3	明灰褐色土	理工	ややしまる	5～10cmの大内縫をまれに含む
23	明灰褐色土	砂質土(軟土)	しまりない	0.5～1mmの大白色砂利をまばらに含む	4	にじみ 明灰褐色土	理工	ややしまる	3～5cmの大塊山礫をまれに含む
24	明灰褐色土	砂質土(軟土)	しまりない	0.5～1mmの大白色砂利をまばらに含む	5	にじみ 明灰褐色土	理工	ややしまる	3～5cmの大塊山礫をまれに含む
25	明灰褐色土	砂質土(軟土)	しまりない	0.5～1mmの大白色砂利をまばらに含む	6	明灰褐色土	理工	ややしまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
26	黄色土	地山	しきりめい	0.5～1mmの大砂利をまれに含む	7	にじみ 黄色土	理工	しまりめい	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
27	明灰褐色土	地山	しまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む	8	明灰褐色土	破壊試料土	しまる	5～10cmの大内縫をまばらに含む
28	明灰褐色土	地山	かたくしまる	0.5～1mmの大白色砂利をまばらに含む	9	にじみ 明灰褐色土	理工	しまりめい	1～3mmの大塊山礫をまれに含む
29	明灰褐色土	地山	かたくしまる	0.5～1mmの大白色砂利をまばらに含む	10	にじみ 明灰褐色土	砂質土	ややしまる	5～10cmの大内縫をまれに含む

第2 主体部南北土層図(第24図)

番号	種名	属性	しまり	備考	番号	種名	属性	しまり	備考
1	灰褐色土	高土	しまりなし	3～5cmの大内縫をまれに含む 木の根を多く含む	12	にじみ 黄色土	砂質土	しまる	1～3mmの大内縫をまれに含む
2	灰色土	土	しまる	5～10cmの大内縫をまれに含む	13	にじみ 明灰褐色土	理工	ややしまる	0.5～1mmの大白色砂利をまばらに含む
3	明灰褐色土	土	ややしまる	3～10cmの大内縫をまれに含む	14	明灰褐色土	栗土	しまる	0.5～1mmの大白色砂利をまばらに含む
4	にじみ 明灰褐色土	理工	かたくしまる	0.5～1mmの大白色砂利をまばらに含む	15	明灰褐色土	栗土	しまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
5	明灰褐色土	理工	ややしまる	0.5～1mmの大砂利をまれに含む	16	明灰褐色土	砂質土(軟土)	しまりめい	0.5～1mmの大白色砂利をまばらに含む
6	にじみ 明灰褐色土	理工	ややしまる	0.5～1mmの大白色砂利をまばらに含む	17	明灰褐色土	地山	かたくしまる	0.5～1mmの大白色砂利をまばらに含む
7	明灰褐色土	破壊試料土	しまる	3～5cmの大内縫をまばらに含む	18	明灰褐色土	砂質土	ややしまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
8	明灰褐色土	破壊試料土	しまる	1～3mmの大内縫をまばらに含む	9	明灰褐色土	理工	ややしまる	0.5～1mmの大内縫をまばらに含む
9	明灰褐色土	砂質土	ややしまる	0.5～1mmの大内縫をまれに含む	10	明灰褐色土	理工	ややしまる	0.5～1mmの大内縫をまばらに含む

第1～3 主体部東西土層図(第26図)

番号	種名	属性	しまり	備考
7	明灰褐色土	砂質土	しまる	0.5～1mmの大内縫をまばらに含む
8	明灰褐色土	砂質土	しまる	0.5～1mmの大内縫をまばらに含む
9	明灰褐色土	砂質土	ややしまる	0.5～1mmの大内縫をまれに含む

解説番号	解説名	属性	しまり	場所	解説番号	解説名	属性	しまり	場所
3	高い 黄色土色	埋土	ややしまる むち	5~10cmの大粒をまれに むち	13	高い、 黄色土	埋込土	しまる むち	0.5~1mmの大粒をまれに むち
4	明黄色土色	埋土	しまる	0.5~1mmの砂粒をばらば らにむち	14	高い、 黄色土	埋込土	しまる むち	0.5~1mmの大粒をまれに むち
5	明黄色土色	埋土	しまる	1~2mmの大粒をまれに むち、第1(1)種	15	明黄色土 (埋土)	砂質土	しまる むち	0.5~1mmの大粒をまれに むち
6	明黄色土色	埋土	しまる	3~10mmの大粒をまれに むち	16	黄色土色	砂質土 (埋土)	しまり弱い むち	0.5~1mmの大粒を まれにむち
7	に高い 土色	埋土	ややしまる むち	0.5~1mmの砂粒をばらば らにむち	17	明黄色土	埋込土	ややしまる むち	0.5~1mmの大粒をまれに むち
8	に高い 黄色土色	埋土	しまる	0.5~1mmの砂粒をまれに むち	18	に高い、 黄色土	埋込土	かたこじまる むち	0.5~1mmの大粒を まれにむち
9	明黄色土色	砂質土	しまり弱い むち	0.5~1mmの大粒をまれに むち	19	黄色土色	埋土	ややしまる むち	0.5~1mmの大粒をまれに むち
10	高黄色土	砂質土	しまり弱い むち	0.5~1mmの大粒をまれに むち	20	明黄色土	埋土	ややこじま るむち	3~5mmの大粒をまれに むち
11	に高い 黄色土色	埋土	ややしまる むち	3~5mmの大粒山地土色に まれにむち	21	黄色土色	埋土	しまり弱い むち	0.5~1mmの大粒を まれにむち
12	に高い 黄色土色	埋土	ややしまる むち	3~5mmの大粒山地土色に まれにむち	22	黄色土色	埋土	しまり弱い むち	1~3mmの大粒(ロック) まれにむち
13	に高い 黄色土色	砂質土	しまる	1~3mmの大粒山地土色に まれにむち	23	高い、 黄色土色	埋土	ややしまる むち	3~3mmの大粒山地土色に まれにむち
14	高黄色土	埋込土	しまる	0.5~1mmの大粒をまれに むち	24	高い、 黄色土色	埋土	ややしまる むち	3~5mmの大粒をまれに むち
15	明黄色土色	砂質土 (埋土)	しまり弱い むち	0.5~1mmの大粒をまれに むち	25	明黄色土色	埋土	ややしまる むち	5~10mmの大粒をまれに むち
16	明黄色土色	地山	かたこじまる むち	0.5~1mmの大粒をまれに むち	26	明黄色土色	砂質土質土	しまる むち	1~3mmの大粒をまれに むち

第2・3主体部東西土圖（第27圖）

番号	種名	属性	しまり	備考				
				28	に長い 黄褐色土	圓柱土	しまる 0.5～1mmの粒を多く含む	
1	灰褐色土	表土	しまりなし	3～5mmの大粒の礫をまれに 木の根を多く含む	29	に長い 黄褐色土	圓柱土	しまる 0.5～1mmの大粒の粒を多く 含む
					30	半粗粒土 (粘土)	砂質土 (粗土)	しまる 0.5～1mmの大粒の粒を多く 含む
2	灰褐色土	表土	しまる	5～10mmの大粒をまれに 含む	31	黄褐色土	塊状土	かたくしまる 0.5～1mmの粒を多く含む
					32	主部東西南北層(③)(南)	主部東西南北層(③)(北)	
3	に長い 黄褐色土	礫土	かたくしまる に含む	0.5～1mmの大粒をばらばら に含む	33	黄褐色土	塊状土	かたくしまる 0.5～1mmの粒を多く含む
					34	黄褐色土	塊状土	かたくしまる 0.5～1mmの粒を多く含む
4	明褐色土	砂質土 (粗土)	しまる	第2主部	35	主部東西南北層(③)(北)	主部東西南北層(③)(北)	
					36	地山	かたくしまる に含む	0.5～1mmの大粒の粒を多く 含む
5	黄褐色土	地山	かたくしまる に含む	5～10mmの大粒をまれに 含む	37	灰褐色土	表土	しまりなし 木の根を多く含む
					38	灰褐色土	表土	しまる 0.5～1mmの大粒をまれに 含む
6	黄褐色土	表土	やわらか しまる	5～10mmの大粒をまれに 含む	39	灰土	土	しまる 0.5～10mmの大粒をまれに 含む
					40	灰褐色土	土	しまる 0.5～10mmの大粒をまれに 含む
7	に長い 黄褐色土	地土	やわらか しまる に含む	2～5mmの大粒の砂礫をまれに 含む	41	灰褐色土	土	しまる 0.5～10mmの大粒をまれに 含む
					42	灰褐色土	土	やわらか しまる 0.5～10mmの大粒をまれに 含む
8	明褐色土	礫質灰土	しまる	0.5～10mmの大粒をばらばら に含む	43	灰土	土	しまる 0.5～10mmの大粒をまれに 含む
					44	黄褐色土	土	やわらか しまる 0.5～10mmの大粒をまれに 含む
9	黄褐色土	礫土	しまる	0.5～1mmの大粒をまれに 含む	45	黄褐色土	礫質土	かたくしまる 0.5～1mmの大粒の粒を多く 含む
					46	黄褐色土	礫質土	かたくしまる 0.5～1mmの大粒の粒を多く 含む
10	黄褐色土	地山	かたくしまる に含む	0.5～1mmの大粒の粒を多く 含む	47	黄褐色土	礫質土	かたくしまる 0.5～1mmの大粒の粒を多く 含む

第1~3主剖面東西土層圖(②北側)(3)

番号	種名	固有性	しまり	備考		7
				7	8	
1	灰毛土	灌土	しまる	5～10cmの大粒の砂をまれに含む	5～10cmの大粒の砂をまれに含む	7
				表面砂質土	表面砂質土	8
2	黄褐色土	灌土	ややしまる	5～10cmの大粒の砂をまれに含む	5～10cmの大粒の砂をまれに含む	7
				表面砂質土	表面砂質土	8
3	高い 酸性土	灌土	ややしまる	3～5cmの大粒の砂をまばらに含む	3～10cmの大粒の砂をまばらに含む	7
				表面砂質土	表面砂質土	8
4	明黄色地土	灌土	しまる	1～3cmの大粒の砂をまれに含む	1～3cmの大粒の砂をまれに含む	7
				表面砂質土	表面砂質土	8
5	高い 酸性土	灌土	ややしまる	1～3cmの大粒の砂をまれに含む	1～3cmの大粒の砂をまれに含む	7
				表面砂質土	表面砂質土	8
6	高い 酸性 酸性土	灌土	ややしまる	1～3cmの大粒の砂をまれに含む	1～3cmの大粒の砂をまれに含む	7
				表面砂質土	表面砂質土	8
7	明黄色地土	硬質酸性土	しまる	1～3cmの大粒の砂をまばらに含む	1～10cmの大粒の砂をまばらに含む	7
				表面砂質土	表面砂質土	8
8	明黄色地土	硬質酸性土	しまる	0.5～1cmの大粒の砂をまばらに含む	1～3cmの大粒の砂をまばらに含む	7
				表面砂質土	表面砂質土	8
9	明黄色地土	硬質酸性土	しまる	0.5～1cmの大粒の砂をまばらに含む	1～3cmの大粒の砂をまばらに含む	7
				表面砂質土	表面砂質土	8
10	明黄色地土	硬質酸性土	しまる	0.5～1cmの大粒の砂をまばらに含む	1～3cmの大粒の砂をまばらに含む	7
				表面砂質土	表面砂質土	8
11	明黄色地土	灌土	しまる	5～10cmの大粒の砂をまれに含む	5～10cmの大粒の砂をまれに含む	7
				表面砂質土	表面砂質土	8
12	高い 酸性土	灌土	ややしまる	0.5～1cmの大粒の砂をまばらに含む	1～3cmの大粒の砂をまばらに含む	7
				表面砂質土	表面砂質土	8

編番号	解名	属性	しまり	備考		解名	属性	しまり	備考					
				標高	地盤				標高	地盤				
20	高耐候土	砂質土(軟)	しまり弱い	0.5～1mの大粒の白色砂利を多く含む	第1主地盤	18	高耐候土	砂質粘質土	しまる	3～5cmの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤			
21	高耐候土	壤土	ややしまる	3～10cmの大粒を多く含む	第1主地盤	19	高耐候土	砂質粘質土	しまる	3～5cmの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤			
22	に長い 高耐候土	壤土	かたくこじまると やわらかくじまると	1～3cmの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤	20	高耐候土	砂質粘質土	しまる	3～30cmの大粒の山礫を多く含む	第1主地盤			
23	高耐候土	壤土	ややしまる	0.5～1cmの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤	21	に長い 高耐候土	砂質土	ややしまる	0.5～1mの大粒の白色砂利を多く含む	第1主地盤			
24	に長い 高耐候土	壤土	ややしまる	1～3cmの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤	22	高耐候土	砂質土	ややしまる	0.5～1mの大粒の白色砂利を多く含む	第1主地盤			
25	高耐候土	砂質粘質土	しまる	1～30cmの大粒の山礫を多く含む	第1主地盤	23	高耐候土	壤土	ややしまる	0.5～1mの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤			
26	高耐候土	砂質粘質土	しまる	1～3cmの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤	24	に長い 高耐候土	壤土	ややしまる	0.5～1mの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤			
27	高耐候土	壤土	しまる	1～3mの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤	25	高耐候土	壤土	しまり弱い	0.5～10cmの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤			
28	に長い 高耐候土	砂質土	しまる	0.5～1cmの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤	26	に長い 高耐候土	壤土	ややしまる	0.5～10cmの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤			
29	高耐候土	砂質土	しまる	0.5～1cmの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤	27	に長い 高耐候土	高耐候土	しまる	0.5～1mの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤			
30	高耐候土	砂質土	しまる	0.5～1cmの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤	28	に長い 高耐候土	高耐候土	しまる	0.5～1mの大粒の白色砂利を多く含む	第1主地盤			
31	高耐候土	砂質土	しまる	0.5～1cmの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤	29	高耐候土	高耐候土	しまる	第1主地盤				
32	高耐候土	砂質土	しまる	0.5～1cmの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤	30	高耐候土	壤土	ややしまる	0.5～1mの大粒の白色砂利を多く含む	第1主地盤			
33	高耐候土	高耐候土	かたくこじまると やわらかくじまると	0.5～1cmの大粒の白色砂利を多く含む	第1主地盤	31	に長い 高耐候土	高耐候土	しまる	0.5～1mの大粒の白色砂利を多く含む	第1主地盤			
34	高耐候土	高耐候土	かたくこじまると やわらかくじまると	0.5～1cmの大粒の白色砂利を多く含む	第1主地盤	32	に長い 高耐候土	高耐候土	しまる	0.5～1mの大粒の白色砂利を多く含む	第1主地盤			
35	高耐候土	砂質土(軟)	しまる	第1主地盤	33	高耐候土	砂質土(軟)	しまる	0.5～1mの大粒の白色砂利を多く含む	第1主地盤				
36	に長い 高耐候土	壤土	ややしまる	3～5mの大粒の山礫を多く含む	第1主地盤	34	高耐候土	砂質土(軟)	しまる	第1主地盤				
37	高耐候土	砂質粘質土	しまる	3～10cmの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤	35	高耐候土	砂質土(軟)	しまり弱い	0.5～1mの大粒の白色砂利を多く含む	第1主地盤			
38	高耐候土	高耐候土	しまる	0.5～1cmの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤	36	高耐候土	壤土	ややしまる	5～10cmの大粒の砂利を多く含む	第2主地盤			
39	高耐候土	地山	かたくこじまると やわらかくじまると	1～3mの大粒の山礫を多く含む	第1主地盤	37	に長い 高耐候土	壤土	かたくこじまると やわらかくじまると	1～3mの大粒の山礫を多く含む	第2主地盤			
40	高耐候土	地山	かたくこじまると やわらかくじまると	0.5～1cmの大粒の白色砂利を多く含む	第1主地盤	38	高耐候土	壤土	ややしまる	0.5～1mの大粒の砂利を多く含む	第2主地盤			
41	第1・2主地盤東西土層図(④後部門西)(第32回)		39	に長い 高耐候土	壤土	ややしまる	0.5～1mの大粒の白色砂利を多く含む	第2主地盤	40	高耐候土	砂質粘質土	しまる	1～30cmの大粒の山礫を多く含む	第2主地盤
1	河岸崩塌土	高土	しまりなし	3～5cmの大粒の砂利を多く含む	私の板を多く含む	41	高耐候土	砂質粘質土	しまる	1～3m的大粒の砂利を多く含む	第2主地盤			
2	河岸土	高土	しまりなし	木の板を多く含む		42	に長い 高耐候土	壤土	しまる	0.5～1mの大粒の白色砂利を多く含む	第2主地盤			
3	河岸土	壤土	ややしまる	0.5～1mの大粒の白色砂利を多く含む		43	高耐候土	壤土	しまる	0.5～1mの大粒の砂利を多く含む	第2主地盤			
4	に長い 高耐候土	壤土	かたくこじまると やわらかくじまると	0.5～1cmの大粒の白色砂利を多く含む		44	に長い 高耐候土	砂質土	しまる	第2主地盤				
5	高耐候土	壤土	かたくこじまると やわらかくじまると	0.5～1cmの大粒の白色砂利を多く含む		45	高耐候土	砂質土	しまる	第2主地盤				
6	灰土	壤土	しまる	0.5～1cmの大粒の砂利を多く含む		46	高耐候土	砂質土	しまる	第2主地盤				
7	に長い 高耐候土	壤土	しまり弱い	0.5～1cmの大粒の砂利を多く含む		47	高耐候土	砂質土	しまる	1～2mの大粒の山礫を多く含む	第2主地盤			
8	高耐候土	高土	しまり弱い	1～3mの大粒の山礫を多く含む	第1主地盤	48	高耐候土	高土	かたくこじまると やわらかくじまると	1～3mの大粒の山礫を多く含む	第2主地盤			
9	高耐候土	高土	しまり弱い	1～3mの大粒の山礫を多く含む	第1主地盤	49	高耐候土	高土	かたくこじまると やわらかくじまると	1～3mの大粒の山礫を多く含む	第2主地盤			
10	灰白色土	壤土	しまる	1～3mの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤	50	高耐候土	砂質土	しまる	第2主地盤				
11	高耐候土	壤土	ややしまる	0.5～10cmの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤	51	高耐候土	地山	かたくこじまると やわらかくじまると	1～3mの大粒の山礫を多く含む	第2主地盤			
12	高耐候土	砂質土	かたくこじまると やわらかくじまると	0.5～1cmの大粒の白色砂利を多く含む	第1主地盤	52	高耐候土	地山	かたくこじまると やわらかくじまると	0.5～1mの大粒の白色砂利を多く含む	第2主地盤			
13	高耐候土	壤土	ややしまる	0.5～1cmの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤	53	高耐候土	地山	かたくこじまると やわらかくじまると	0.5～1mの大粒の白色砂利を多く含む	第2主地盤			
14	高耐候土	壤土	ややしまる	0.5～1cmの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤	54	高耐候土	地山	しまる	0.5～1mの大粒の白色砂利を多く含む	第2主地盤			
15	高耐候土	壤土	ややしまる	0.5～1cmの大粒の砂利を多く含む	第1主地盤	55	高耐候土	地山	かたくこじまると やわらかくじまると	0.5～1mの大粒の白色砂利を多く含む	第2主地盤			
16	高耐候土	壤土	しまる	0.5～1cmの大粒の白色砂利を多く含む	第1主地盤	56	高耐候土	地山	かたくこじまると やわらかくじまると	0.5～1mの大粒の白色砂利を多く含む	第2主地盤			
17	高耐候土	壤土	しまる	0.5～1cmの大粒の白色砂利を多く含む	第1主地盤									

第1・2主体部東西土層図(②主体部中央1)(第32回)

層番号	層名	属性	しまり	層考	層番号	層名	属性	しまり	層考									
1	灰色土	底土	しまる	5～10cmの大約縦をまことに含む	31	1主体	42	明黄褐色土	底土	ややしまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	21主体						
2	黄褐色土	底土	ややしまる	5～10cmの大約縦をまことに含む	31	1主体	43	明黄褐色土	砂質土 (粒土)	ややしまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	21主体						
3	黄褐色土	底土	ややしまる	5～10cmの大約縦をまことに含む	31	1主体	44	黄褐色土	地山	かたくしまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	21主体						
4	黄褐色土	理土	ややしまる	3～5cmの大約縦をまことに含む	31	1主体	45	黄褐色土	地山	かたくしまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	21主体						
5	明黄褐色土	理土	ややしまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31	1主体	第1・2主体部東西土層図(③主体部中央2)(第32回)											
6	黄褐色土	理土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31	1主体	5	黄褐色土	底土	しまる	5～10cmの大約縦をまことに含む	31主体						
7	明黄褐色土	理土	ややしまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31	1主体	6	黄褐色土	底土	ややしまる	5～10cmの大約縦をまことに含む	31主体						
8	黄褐色土	理土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31	1主体	7	黄褐色土	底土	ややしまる	5～10cmの大約縦をまことに含む	31主体						
9	明黄褐色土	砂質粘質土	しまる	3～5cmの大約縦をまことに含む	31	1主体	8	黄褐色土	理土	ややしまる	3～5cmの大約縦をまことに含む	31主体						
10	にじい 黄褐色土	砂質土	ややしまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31	1主体	9	黄褐色土 (泥炭化の状況)	理土	しまり固い	1～3cmの大約縦をまことに含む	31主体						
11	黄褐色土	砂質土	ややしまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31	1主体	10	黄褐色土	砂質土	ややしまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体						
12	黄褐色土	理土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31	1主体	11	褐色土	理土	しまる	3～5cmの大約縦をまことに含む	31主体						
13	黄褐色土	理土	しまり固い	31主体	12	明黄褐色土	砂質粘質土	しまる	31主体	14	にじい 黄褐色土	底土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体			
14	にじい 黄褐色土	理土	ややしまる	5～10cmの大約縦をまことに含む	31	1主体	15	にじい 黄褐色土	砂質土	ややしまる	5～10cmの大約縦をまことに含む	31主体						
15	にじい 黄褐色土	底土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31	1主体	16	にじい 黄褐色土	底土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体						
16	にじい 黄褐色土	底土	ややしまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31	1主体	17	にじい 黄褐色土	底土	ややしまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体						
17	にじい 黄褐色土	底土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31	1主体	18	明黄褐色土	砂質粘質土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体						
18	黄褐色土	底土	しまる	31主体	19	明黄褐色土	底土	ややしまる	31主体	20	にじい 黄褐色土	底土	しまる	1～3cmの大約縦をまことに含む	31主体			
19	にじい 黄褐色土	底土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31	1主体	21	にじい 黄褐色土	底土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体						
20	にじい 黄褐色土	底土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31	1主体	22	にじい 黄褐色土	底土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体						
21	明黄褐色土	砂質土 (粒土)	しまり固い	31主体	23	明黄褐色土	砂質土 (粒土)	しまり固い	31主体	24	にじい 黄褐色土	底土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体			
22	黄褐色土	砂質土 (粒土)	しまり固い	31主体	25	明黄褐色土	底土	しまる	31主体	26	明黄褐色土	砂質粘質土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体			
23	にじい 黄褐色土	理土	かたくしまる	1～3cmの大約縦をまことに含む	31	1主体	27	にじい 黄褐色土	底土	しまる	1～3cmの大約縦をまことに含む	31主体						
24	黄褐色土	理土	ややしまる	0.5～1cmの大約縦をまことに含む	31	1主体	28	明黄褐色土	砂質土	ややしまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体						
25	黄褐色土	理土	しまる	0.5～1cmの大約縦をまことに含む	31	1主体	29	明黄褐色土	砂質土	しまり固い	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体						
26	明黄褐色土	砂質粘質土	しまる	1～3cmの大約縦をまことに含む	31	1主体	30	明黄褐色土	砂質土	かたくしまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体						
27	明黄褐色土	砂質粘質土	しまる	1～3cmの大約縦をまことに含む	31	1主体	31	明黄褐色土	砂質土	ややしまる	1～3cmの大約縦をまことに含む	31主体						
28	明黄褐色土	理土	しまる	5～10cmの大約縦をまことに含む	31	1主体	32	明黄褐色土	理土	しまる	1～3cmの大約縦をまことに含む	31主体						
29	にじい 黄褐色土	理土	ややしまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31	1主体	33	明黄褐色土	砂質土	しまり固い	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体						
30	黄褐色土	理土	しまり固い	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31	1主体	34	明黄褐色土	理土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体						
31	にじい 黄褐色土	理土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31	1主体	35	明黄褐色土	砂質土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体						
32	黄褐色土	砂質土	しまる	31主体	32	明黄褐色土	砂質土	ややしまる	31主体	36	明黄褐色土	砂質土	ややしまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体			
33	黄褐色土	砂質土	かたくしまる	1～3cmの大約縦をまことに含む	31	1主体	37	にじい 黄褐色土	理土	ややしまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体						
34	明黄褐色土	砂質土	しまる	0.5～1cmの大約縦をまことに含む	31	1主体	38	明黄褐色土	砂質土	しまる	1～3cmの大約縦をまことに含む	31主体						
35	明黄褐色土	砂質土	しまる	5～10cmの大約縦をまことに含む	31	1主体	39	明黄褐色土	砂質土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体						
36	明黄褐色土	砂質土	しまる	0.5～1cmの大約縦をまことに含む	31	1主体	40	明黄褐色土	砂質土	ややしまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体						
37	明黄褐色土	砂質土	ややしまる	31主体	31	明黄褐色土	砂質土	ややしまる	31主体	41	にじい 黄褐色土	底土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体			
38	にじい 黄褐色土	底土	ややしまる	0.5～1cmの大約縦をまことに含む	31	1主体	32	明黄褐色土	砂質土	ややしまる	31主体	33	にじい 黄褐色土	底土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体	
39	黄色土	砂質粘質土	しまる	1～3cmの大約縦をまことに含む	31	1主体	34	明黄褐色土	砂質土	ややしまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体	40	黄色土 (泥炭化の状況) 内	砂質土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体
41	にじい 黄褐色土	底土	しまる	0.5～1cmの大約縦をまことに含む	31	1主体	35	にじい 黄褐色土	底土	しまる	0.5～1mmの大約縦をまことに含む	31主体						

第3章 発掘調査の成果

順番号	種名	属性	しまり	備考	順番号	種名	属性	しまり	備考					
36	にじいろ の砂質土	高込土	かたくしまる	1～3m大的地山標をまれに 当たる	5	第2主体部		6	明高畠色土 理土	理土 ややしまる	3～5m大的地山標をまれに 当たる	3～5m大的地山標をまれに 当たる	第2主体部	
37	褐色土	ISS0000内 埋土	ややしまる	1～3m大的地山ブロックを まばらに含む	7	第2主体部		7	明高畠色土 砂質粘質土	砂質粘質土 しまる	1～3m大的地山標をまれに 当たる	1～3m大的地山標をまれに 当たる	第2主体部	
38	にじいろ の砂質土	高込土	しまる	0.5～1m大的砂質粘をまれに 当たる	8	第2主体部		8	褐色土 理土	しまり高い 褐色土 理土	1～3m大的地山標をまれに 当たる	1～3m大的地山標をまれに 当たる	10～20m大的地山標をまれに 当たる	第2主体部
39	明高畠色土	高込土	ややしまる	0.5～1m大的砂質粘をまれに 当たる	9	第2主体部		9	にじいろ の褐色土	理土 ややしまる	1～3m大的地山標をまれに 当たる	1～3m大的地山標をまれに 当たる	第2主体部	
40	明高畠色土 (軟土)	砂質土 (軟土)	しまる	第2主体部	10	灰褐色土	高込土 しまる	10	砂質土 (軟土) しまる	第2主体部	1～3m大的地山標をまれに 当たる	1～3m大的地山標をまれに 当たる	第2主体部	
41	黒褐色土	地山	かたくしまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	11	明高畠色土 (軟土)	高込土 しまる	11	明高畠色土 (軟土) しまる	第2主体部	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	第2主体部	
第1・2主体部東西土層図(④主体部南側1)(第32図④)														
順番号	種名	属性	しまり	備考	順番号	種名	属性	しまり	備考					
1	にじいろ の砂質土	土	中やしまる	3～5m大的地山標をまれに 当たる	第1・3主体部および満 SD001 東西土層図(①第1・3主体部)(第33図①)									
2	高畠色土	土	中やしまる	3～10m大的地山標をまれに 当たる	2	第2主体部		3	にじいろ の白色砂質粘	高士 しまり高い 白色砂質粘	3～5m大的地山標をまれに 当たる	3～5m大的地山標をまれに 当たる	木の根を多く含む	
3	にじいろ の砂質土	理土	かたくしまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	4	第2主体部		4	明高畠色土 高士	高士 しまり高い 明高畠色土	1～2m大的地山標をまれに 当たる	1～2m大的地山標をまれに 当たる	第2主体部	
4	高畠色土	理土	しまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	5	第2主体部		5	にじいろ の白色砂質粘	理土 ややしまる	3～5m大的地山標をまれに 当たる	3～5m大的地山標をまれに 当たる	第2主体部	
5	高畠色土	理土	しまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	6	第2主体部		6	にじいろ の白色砂質粘	理土 ややしまる	3～10m大的地山標をまれに 当たる	3～10m大的地山標をまれに 当たる	木の根を多く含む	
6	高畠色土	理土	ややしまる	0.5～1m大的地山標をまれに 当たる	7	第2主体部		7	灰褐色土 高士	高士 ややしまる	0.5～1m大的地山標をまれに 当たる	0.5～1m大的地山標をまれに 当たる	第2主体部	
7	明高畠色土 砂質粘質土	土	しまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	8	第2主体部		8	明高畠色土 高士	高士 ややしまる	0.5～10m大的地山標をまれに 当たる	0.5～10m大的地山標をまれに 当たる	第2主体部	
8	明高畠色土 砂質粘質土	土	しまる	1～3m大的地山標をまれに 当たる	9	第2主体部		9	にじいろ の白色砂質粘	理土 しまり低い 白色砂質粘	1～3m大的地山標をまれに 当たる	1～3m大的地山標をまれに 当たる	第2主体部	
9	明高畠色土	理土	しまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	10	第2主体部		10	明高畠色土 高士	高士 しまる	0.5～1m大的地山標をまれに 当たる	0.5～1m大的地山標をまれに 当たる	第2主体部	
10	高畠色土	土	しまる	第2主体部	11	第2主体部		11	高畠色土 地山	地山 かたくしまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	第2主体部	
11	高畠色土	理土	Lまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	第1・3主体部および満 SD001 東西土層図(②満 SD001 南側)(第33図②)									
12	にじいろ の砂質土	理土	Lまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	12	第2主体部		12	明高畠色土 砂質土	砂質土 しまる	0.5～1m大的地山標をまれに 当たる	0.5～1m大的地山標をまれに 当たる	第2主体部	
13	明高畠色土 砂質土	土	Lまる	0.5～1m大的砂質粘をまれに 当たる	13	第2主体部		13	明高畠色土 地山	地山 かたくしまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	第2主体部	
14	明高畠色土 砂質土	土	しまる	第2主体部	第1・3主体部および満 SD001 東西土層図(③満 SD001 南側)(第33図③)									
15	高畠色土	砂質土	ややしまる	第2主体部	14	第2主体部		14	高畠色土 地山	地山 かたくしまる	0.5～10m大的地山標をまれに 当たる	0.5～10m大的地山標をまれに 当たる	第2主体部	
16	明高畠色土 砂質土	土	しまる	第2主体部	15	第2主体部		15	明高畠色土 地山	地山 かたくしまる	0.5～10m大的地山標をまれに 当たる	0.5～10m大的地山標をまれに 当たる	第2主体部	
17	明高畠色土 砂質土	土	しまる	第2主体部	16	第2主体部		16	にじいろ の高士	高士 しまり低い 高士	1～3m大的地山標をまれに 当たる	1～3m大的地山標をまれに 当たる	第2主体部	
18	高畠色土	砂質土	ややしまる	第2主体部	17	第2主体部		17	高畠色土 地山	地山 しまる	0.5～1m大的地山標をまれに 当たる	0.5～1m大的地山標をまれに 当たる	第2主体部	
19	明高畠色土 砂質土	土	ややしまる	第2主体部	18	第2主体部		18	明高畠色土 (白色土底じり)	地山 かたくしまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	第2主体部	
20	明高畠色土 砂質土	土	しまる	第2主体部	19	第2主体部		19	明高畠色土 (白色土底じり)	地山 かたくしまる	0.5～10m大的地山標をまれに 当たる	0.5～10m大的地山標をまれに 当たる	第2主体部	
21	にじいろ の砂質土	高込土	しまる	0.5～1m大的砂質粘をまれに 当たる	20	第2主体部		20	高畠色土 地山	地山 しまる	0.5～10m大的地山標をまれに 当たる	0.5～10m大的地山標をまれに 当たる	第2主体部	
22	明高畠色土 砂質土	土	しまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	21	第2主体部		21	高畠色土 地山	地山 しまり高い 高士	1～3m大的地山標をまれに 当たる	1～3m大的地山標をまれに 当たる	木の根を多く含む	
23	明高畠色土 砂質土	土	しまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	22	第2主体部		22	高畠色土 地山	地山 しまり高い 高士	1～3m大的地山標をまれに 当たる	1～3m大的地山標をまれに 当たる	木の根を多く含む	
24	明高畠色土 (軟土)	砂質土	しまる	第2主体部	23	第2主体部		23	高畠色土 地山	地山 しまり高い 高士	1～3m大的地山標をまれに 当たる	1～3m大的地山標をまれに 当たる	木の根を多く含む	
25	高畠色土	地山	かたくしまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	24	第2主体部		24	高畠色土 地山	地山 しまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	第2主体部	
26	高畠色土	地山	かたくしまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	25	明高畠色土 (白色土底じり)	地山 しまる	25	明高畠色土 (白色土底じり)	地山 しまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	第2主体部	
第1・2主体部東西土層図(⑤主体部南側2)(第32図⑤)										第1・3主体部および満 SD001 東西土層図(④満 SD001 北側)(第33図④)				
順番号	種名	属性	しまり	備考	順番号	種名	属性	しまり	備考					
1	明高畠色土 (白色土底じり)	理土	しまり高い 白色土底じり	1～3m大的地山標をまれに 当たる	1	从高畠色土 高士	高士 しまり高い 白色土底じり	3～5m大的地山標をまれに 当たる	木の根を多く含む					
2	明高畠色土	理土	中やしまる	1～3m大的地山標をまれに 当たる	2	从高畠色土 高士	高士 ややしまる	5～10m大的地山標をまれに 当たる						
3	にじいろ の砂質土	理土	しまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	3	从高畠色土 高士	高士 しまりなし	5～10m大的地山標をまれに 当たる						
4	明高畠色土	理土	かたくしまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	4	从高畠色土 高士	高士 しまりなし	5～10m大的地山標をまれに 当たる						
5	明高畠色土	理土	ややしまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	5	从高畠色土 (白色土底じり)	高士 しまる	0.5～1m大的地山標をまれに 当たる						
第1・2主体部東西土層図(⑥主体部南側2)(第32図⑥)										第1・3主体部および満 SD001 東西土層図(⑤満 SD001 中央)(第33図⑤)				
順番号	種名	属性	しまり	備考	順番号	種名	属性	しまり	備考					
1	明高畠色土 (白色土底じり)	砂質土	しまる	第2主体部	1	从高畠色土 高士	高士 しまり高い 白色土底じり	3～5m大的地山標をまれに 当たる	木の根を多く含む					
2	明高畠色土 (白色土底じり)	砂質土	しまる	第2主体部	2	从高畠色土 高士	高士 しまり高い 白色土底じり	5～10m大的地山標をまれに 当たる						
3	明高畠色土 (白色土底じり)	砂質土	しまる	第2主体部	3	从高畠色土 高士	高士 しまりなし	5～10m大的地山標をまれに 当たる						
4	明高畠色土 (白色土底じり)	砂質土	ややしまる	第2主体部	4	从高畠色土 高士	高士 しまりなし	5～10m大的地山標をまれに 当たる						
5	明高畠色土 (白色土底じり)	地山	かたくしまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	5	从高畠色土 (白色土底じり)	地山 しまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む						
第1・2主体部東西土層図(⑦主体部北側)(第32図⑦)										第1・3主体部および満 SD001 東西土層図(④満 SD001 北側)(第33図④)				
順番号	種名	属性	しまり	備考	順番号	種名	属性	しまり	備考					
1	明高畠色土 (白色土底じり)	砂質土	しまる	第2主体部	1	从高畠色土 高士	高士 しまり高い 白色土底じり	3～5m大的地山標をまれに 当たる	木の根を多く含む					
2	明高畠色土	砂質土	しまる	第2主体部	2	从高畠色土 高士	高士 しまり高い 白色土底じり	5～10m大的地山標をまれに 当たる						
3	にじいろ の砂質土	砂質土	しまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	3	从高畠色土 高士	高士 しまりなし	5～10m大的地山標をまれに 当たる						
4	明高畠色土	砂質土	かたくしまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	4	从高畠色土 高士	高士 しまりなし	5～10m大的地山標をまれに 当たる						
5	明高畠色土	砂質土	ややしまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む	5	从高畠色土 (白色土底じり)	地山 しまる	0.5～1m大的白色砂質粘を まれに含む						

第3節 出土遺物

今回の調査で確認できた遺物は少なく、第1～3主体部に伴う遺物は確認されなかった⁽¹⁾。ここでは、その他に確認できた遺物を報告する（第41図・第5表、図版18下）。

第41図1は土師器の甕で、肩部付近の破片と考えられる。第1主体部周辺において、2019年度調査の埋戻土の掘削中に確認した。外面はタテハケが施され、内面は横方向のヘラケズリが認められる。器面調整の状況や胎土の風合いは、2010年度試掘確認調査（宮本編2019）の1トレンチにおけるくびれ部付近で出土した土師器の甕と類似する。そのため小谷4式から大東式の古段階までの時期（松山編年Ⅱ期古段階）（松山2000）として報告した土師器の年代（幡中編2021）と概ね同時期頃の所産と考えられる。

第41図2は、溝SD001の中央付近に設けられた土坑SK018内の埋土内から見つかった岩脈の脈石である。石英を含んで全体的に光沢を帯び、下端部付近には若干の研磨痕が歓る。後述する第41図3などの礫敷SS001に多用される凝灰岩とは明確に色調や風合いが異なる。確認は得られていないが、溝SD001の敷設やその周辺での葬送儀礼などに伴い埋納された可能性がある。

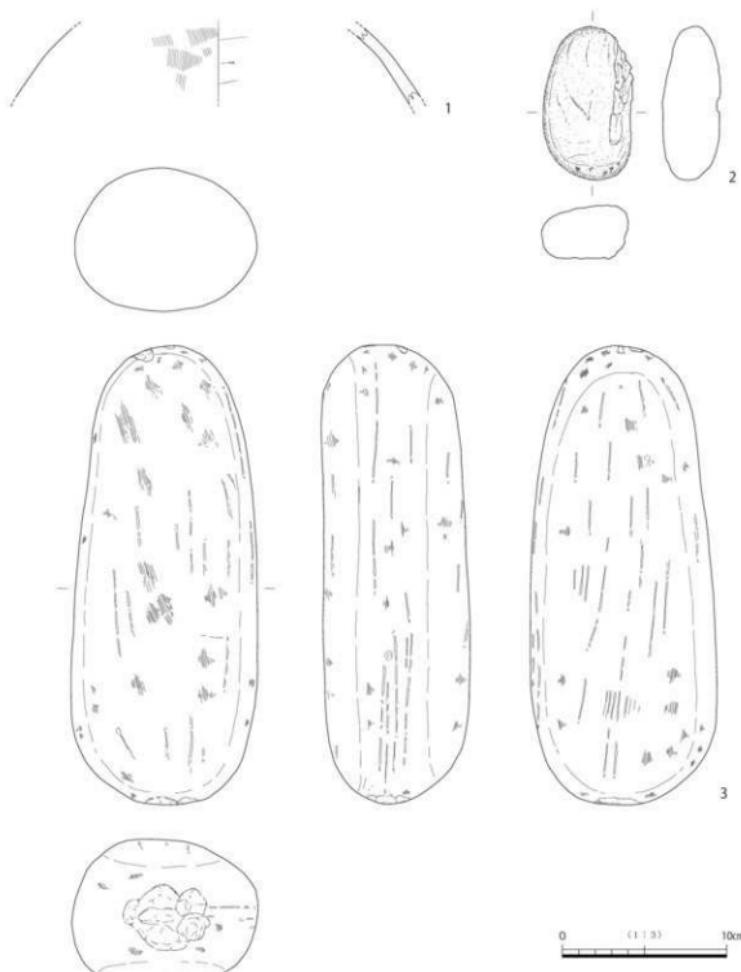
第41図3は、第1主体部の北側に構築された溝SD001および盛土上面に展開する礫敷SS001の一部で、石製品が転用されたものと考えられる。この石製品は、礫敷SS001の下にある溝SD001の分岐点付近で東西方向に長軸を合わせて据えられ、意図的に配置した蓋然性が高い。表面は部分的に研磨痕が認められるほか、長軸方向に筋状の線刻が散見され、下端部には若干の敲打痕が確認できる。石材は凝灰岩である。正確な時期は不明であるが、縄文時代後期以降の石製品が礫敷SS001に転用されたと考えられる。なお、2019年度調査でも礫敷SS001に転用された石製品が礫敷中央付近で見つかっている（幡中編2021）。

註

- (1) 第1～3主体部内や関連遺構からは、時期が明確な遺物の出土が認められなかつたため、2019年度調査で推定した古墳の築造時期（前期末から中期初頭頃）（幡中2021）に変更は生じない。

参考文献

- 幡中光輔 2021「小結」『常楽寺柿木田古墳群－常楽寺柿木田1号墳の調査－』一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・出雲市の文化財報告46 出雲市教育委員会 64～74頁
幡中光輔編 2021『常楽寺柿木田古墳群－常楽寺柿木田1号墳の調査－』一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・出雲市の文化財報告46 出雲市教育委員会
松山智弘 2000「小谷式再検討－出雲平野における新資料から－」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会 99～130頁
宮本正保編 2019『常楽寺柿木田古墳群－弥生時代集落の調査－』一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5 島根県教育委員会



第41図 遺物実測図

第5表 遺物観察表

遺物番号	登録番号	出土位置	出土層位	種別	器種 石材	寸法 (cm)			表面調査 / 文様等 加工痕	断土	焼成	重量 (g)	備考
						長さ	幅	厚さ					
41-1	18	第1主床跡附近	埋立土	石製品	直				内面：灰褐色 外面：タマゴ色 内面：ハラキ色	1~2mm程度の石突を少量含む 1mm以下の凹凸を含む	良好	231.2	古墳時代後半の石製品を 含む
41-2	18	上段床跡内	埋立土	石製品	直線的 の断面	9.3	5.5	2.5	下端部に若干の研磨痕			3700.0	古墳時代後半の石製品を 含む
41-3	18	第1主床跡附近 (標高800.0m)	填土上面	石製品	断面直	28.0	11.3	9.1	直面：研磨痕・研磨の跡 下端部に若干の研磨痕				

第4節 小結

今回の常楽寺柿木田1号墳の調査では、後円部における墳頂部に存在する第1～3主体部を対象に、複数のトレンチを設けて部分的に主体部の内容を確認し、内部構造や構築状況を把握した。ここでは、その調査成果を簡潔に整理し、主体部の評価について具体的に検討を進める。

1 主体部の調査成果

主体部の調査成果は、第3章第2節で報告した内容をもとに第6表にまとめた。なお墓坑ST001～ST003の形態は、和田晴吾氏が設けた類型化に準拠すると、地山に墓坑を掘り込んだ後に盛土を施す「掘込墓坑C類」に区分される（和田1989）。

（1）第1主体部

第1主体部は墳頂部中央に設けられ、墓坑は南北約6.1m、東西約2.1mの隅丸長方形で、深さは約0.6mを測り、二段の掘り込みを持つ。南側には埋葬や葬送儀礼などに伴う緩斜面や段状の加工痕が認められる。

埋葬施設は組合式木棺であり、最大で長さ約2.7m、幅0.5mであったと推定される。二段の墓坑の掘り込みで下段は上段の掘り込み面に合わせて砂質土が充填され、棺台の役割として敷土が施されたと考えられる。また石枕とみられる流紋岩質凝灰岩製の人頭大の円礫が墓坑中央付近で確認され、頭位方向は北西であり、その北側には副葬品などが納められた空間が存在したと考えられる。その一方で、副葬品などは確認されなかった。木棺の小口板や側板部分の上部周辺には硬質の粘質土が認められ、天板と小口板および側板の接点付近に重点的に施して木棺の密閉を志向した可能性がある。

第6表 常楽寺柿木田1号墳主体部調査成果一覧

		第1主体部	第2主体部	第3主体部
墓 坑	名 称	墓坑 ST001	墓坑 ST002	墓坑 ST003
	平面形態	隅丸長方形	隅丸長方形	隅丸長方形
	掘込形式	掘込墓坑C類	掘込墓坑C類	掘込墓坑C類
	方 位	N-7.5°-E	N-7.5°-E	N-7.5°-E
	法 量	南北 6.1m × 東西 2.1m × 深さ 0.6m	南北 4.85m × 東西 1.4m × 深さ 0.7m	南北 3.1m × 東西 1.25m × 深さ 0.55m
	段 数	二段	一段	二段
棺 構 造	種 類	組合式木棺	組合式木棺 礫敷（底板代替）	組合式木棺
	組合形式	組合式2類 (1b類似)	組合式1a類	組合式2類 (1b類似)
	棺 台	敷土	敷土（礫敷台）	敷土
	法量（推定）	長さ 2.7m × 幅 0.5m	長さ 2.7m × 幅 0.5m	長さ 1.7m × 幅 0.5m
	被葬者頭位 (推定)	北西	北西	北西
	付属施設	石枕	石枕・側板設置溝	—
棺外施設	外 表	礫敷 SS001	—	—
	溝・土坑	溝 SD001・ST001 排水溝 土坑 SK016～土坑 SK018	溝 SD002・溝 SD003 ST002 排水溝	ST003 排水溝

棺外施設は、礫敷 SS001 と盛土下に設けられた溝 SD001 を確認した。溝 SD001 は狭小であり、墓坑に向かって低くなるため排水溝とは異なる導水機能を持つ蓋然性が高く、被葬者の埋葬に伴う葬送儀礼などに関連した施設の可能性もある。溝 SD001 の分岐点には、長大な礫（第3章第3節第41図3）が礫敷 SS001 のなかに認められ、縄文時代後期以降の石製品を転用したと考えられる。

（2）第2主体部

第2主体部は、第1主体部の西側に位置する。墓坑は南北約4.85m、東西約1.4mの隅丸長方形で、深さは最大で約0.7mを測る。墓坑の側面や底面は比較的滑らかに整えられ、丁寧に成形されている。

墓坑内には組合式木棺が納められ、規模は長さ約2.7m、幅0.5mであったと推定できる。木棺の底板の代替として直径約5～10cm程度の扁平な円礫で構成される礫敷が確認された。礫敷の石材は流紋岩やデイサイト、安山岩、溶結凝灰岩などで、常楽寺川流域周辺の礫岩層に由来する（第4章第2節）。礫敷下の地山底面には礫敷台として機能した敷土が施される。また礫敷の外側の墓坑底面には、木棺側板の設置に伴う溝や、側板および小口板を支える裏込めなども見つかっている。礫敷北側の上面には、礫敷の円礫よりも大形の直径約10～15cm程度の円礫が石枕として円形に並べられ、頭位方向は北西である。石枕の北側には仕切り板痕跡が認められ、その北側には小形の礫を用いた礫敷が展開する。埋葬空間の北側に副葬品などを配置する空間が設けられた可能性がある。なお第2主体部からは副葬品などは見つかっていない。また第1主体部と同じく、木棺を密閉するために天板と小口板や側板の接点付近に施された硬質の粘質土が小口板や側板部分の上部付近で認められた。

棺外施設は、墓坑ST002内で木棺の西側に溝SD002・SD003が確認された。これらの溝は礫敷面よりも低く設けられているため、一定の排水機能を保持していたと考えられる。

（3）第3主体部

第3主体部は、第1主体部の東側にあり、墓坑は南北約3.1m、東西約1.25mの隅丸長方形で、深さは最大で約0.55mとなる。二段の掘り込みを持つ墓坑で第1主体部の墓坑と構造的に類似する。

墓坑内には組合式木棺が納められていたと考えられ、規模は長さ約1.7m、幅0.5mであった可能性がある。二段の墓坑の掘り込みにおいて、下段は上段の掘り込み面まで砂質土が充填されていた。第1主体部と同様に、棺台として敷土が施された蓋然性が高い。被葬者の頭位方向は不明であるが、第1・2主体部と同じく北西の可能性がある。なお、第3主体部に伴う副葬品などは確認されていない。小口部には小口板の裏込めに使用された人頭大の円礫が据えられ、小口板付近や側板部分の上部付近には木棺を密閉する目的で施されたと考えられる硬質粘質土が認められた。

棺外施設は、墓坑の北東端部から南東端部を囲うようにST003排水溝が設けられ、墳丘下への排水機能とともに、墳丘上での主体部を区画して明示する役割を担っていたと考えられる。

2 出土遺物の特徴

今回の調査による出土遺物は少なく、主体部に伴う副葬品などは確認されなかったが、2019年度調査（幡中編2021）の埋戻土から土師器の甕の肩部片（第3章第3節第41図1）が出土した。2010年度試掘確認調査（宮本編2019）でくびれ部から出土した土師器の甕と同時期頃の所産と考えられる。

第1主体部北側の溝SD001の中央付近に設けられた土坑SK018内の埋土内からは、岩脈の脈石（第3章第3節第41図2）が見つかった。周辺の石材状況や土坑SK018内から単体で出土した状況などから、溝SD001の敷設や葬送儀礼などに関連して意図的に埋納された可能性が高い。

また第1主体部の北側の棺外施設である礫敷SS001の一部には、縄文時代後期以降と考えられる石製品（第3章第3節第41図3）が転用されていた。

3 主体部の構築過程

ここで、今回の調査成果をもとに第1～3主体部の構築過程を検討したい。第1～3主体部の各墓坑は、2019年度調査で同時期または比較的近い時期に形成されたと想定している（輔中2021）。

今回の主体部の調査では、第1～3主体部の墓坑の掘削から組合式木棺の配置、そして埋葬後の埋土の充填までを含めた主体部の構築過程を把握した。その内容について、第1～3主体部の土層堆積状況（第42図）を中心に詳しく検討する。

（1）第1・2主体部の構築状況と関係性

まず、第1・2主体部の墓坑STO01・STO02は並列して設けられ、また最も近い地点では約30cmほどしか離れていないものの重複関係は確認できず、計画的に配置された可能性が高い。第1主体部は後円部の墳頂部中央付近に設けられ、第2主体部は西側斜面に構築されているため、第2主体部の方が墓坑底面は低い。墓坑内に埋土を充填した後、上面には盛土が施されるが、盛土の重複関係は認められなかった。ここで注目されるのは、第1主体部の墓坑STO01と第2主体部の墓坑STO02との間の地山上に硬質土が施工される状況である。土層堆積状況を詳しく見ると、両墓坑への埋土充填が完了した後に硬質土が施されている。そのため、両墓坑への埋土の充填は概ね同時期頃に実施された可能性があり、その後墓坑上面に盛土が施されて墳丘が構築されたと想定できる。

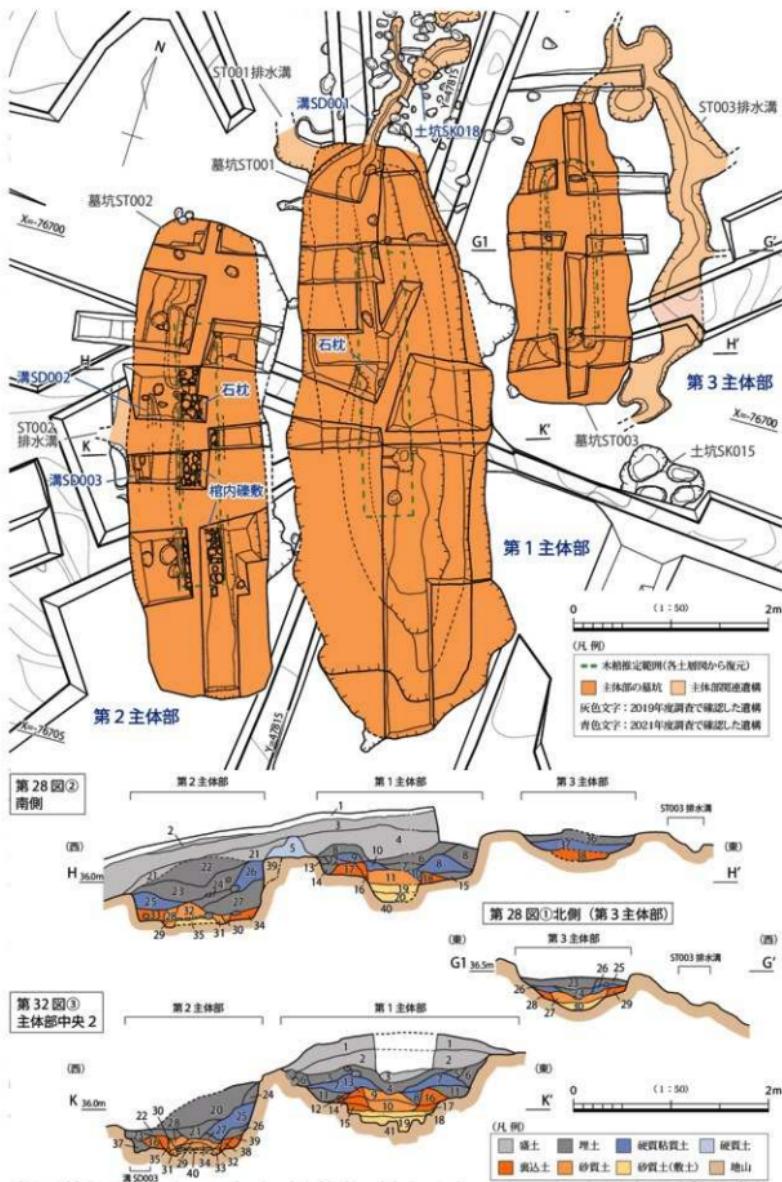
また両墓坑内への埋土の充填完了後に墳丘面が整えられ、盛土による墳丘構築の前工程として整地されたと考えられるが、この段階で埋葬施設の構築完了に伴い葬送儀礼が行われた可能性もある。これらの点から第1・2主体部の構築は、概ね同時期頃であったと推定される。

（2）第1・3主体部の構築状況と関係性

第1・3主体部は、二段の掘り込みを持つ墓坑の構造や墓坑底面の敷土による台形の敷設、溝や排水溝を持つ棺外施設の構築など形式的に共通点が多い。また、第1・3主体部は比較的近接する点や、第1～3主体部で墓坑の主軸方向が揃っていることから、第1・2主体部と同様に第3主体部の配置も予め計画されていた可能性が高い。加えて、第1主体部の北側にある溝SD001が第3主体部北側にまで及んでいないことを積極的に評価すれば、第3主体部は溝SD001の位置を避けて配置されたと考えられ、第1主体部の構築後に第3主体部が設けられた可能性が浮上する。

（3）第1～3主体部の構築過程の推定

これらの検討内容から、第1・2主体部は概ね同時期頃に構築され、その後それほど時間を置かず第3主体部が設けられたと推測できる。そして第3主体部の設置が完了した時点で第3主体部東側に排水溝（STO03排水溝）を廻らせ、墳丘上での主体部の位置を区画して明示したと考えられる。



4 常楽寺柿木田1号墳の構築過程

第1～3主体部の構築過程がこれまでの検討で明らかになったため、ここでは主体部の構築状況を2019年度調査で確認できた墳丘の構築状況や葬送儀礼の各段階（幡中2021）のなかに位置づけ、常楽寺柿木田1号墳の全体の構築過程を総合的に整理する（第7表・第43図）。

（1）第1段階：墳丘の成形

第1段階は墳丘の成形である。常楽寺柿木田1号墳は地山の削り出しで後円部と前方部を作出して墳丘の形状に成形している。後円部では西側の中段付近を中心に平坦面が確認でき、墳丘の盛土が墳丘下へ流出するのを防ぐ役割を担っていたと推測される。

（2）第2段階：主体部の構築

第2段階は主体部の構築である。主体部の構築には墓坑の掘削、木棺の設置、被葬者埋葬、埋土の充填が含まれる。第1・2主体部が概ね同時期頃に構築されたと考えられ、第1・2主体部の構築が完了した後にそれほど時間を置かずに第3主体部が設けられたと想定される。なお、第1主体部の南側には一定の空間が存在しており、埋葬に伴う葬送儀礼が行われた可能性が示唆される。また第1主体部に伴う溝SD001や土坑SK018なども葬送儀礼に関連する施設として機能した可能性がある。こうした埋葬に関連する葬送儀礼が第2・3主体部でも行われたことは想像に難くない。

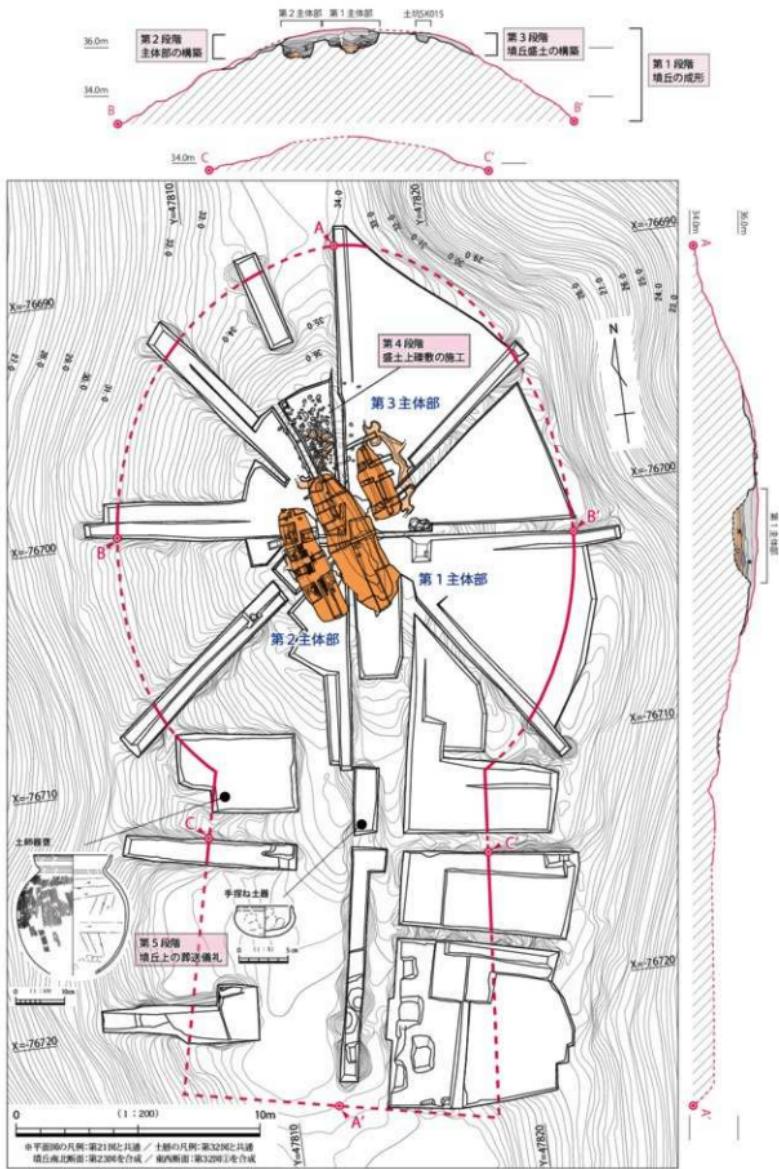
一連の埋葬行為が完了した後に硬質の粘質土で木棺の密閉状態を保ち、その後に埋土で墓坑内が充填される。埋土の充填後には、埋葬施設の構築完了に伴う葬送儀礼が行われた可能性が考えられる。

（3）第3段階：墳丘盛土の構築

第3段階は墳丘盛土の構築である。墓坑の埋土充填完了後には、後円部上面に盛土が施されている。盛土は墓坑全体を覆う墓坑盛土と、後円部上面の外表を整えるために施された外表盛土の2種類に区分できる。またこれらの盛土は、同一地点や比較的近い場所の地山や地山風化土の掘削土を利用した可能性がある。

第7表 常楽寺柿木田1号墳の構築と葬送儀礼

		構築内容・葬送儀礼	備考
第1段階	墳丘の成形	①墳丘全体の成形 ②後円部西側中段に平坦面成形	地山削り出しで成形
第2段階	主体部の構築	①墓坑ST001～ST003の掘削 ②木棺設置（礫敷・石枕敷設） ③被葬者埋葬 ④硬質粘質土・埋土の施工	各段階で葬送儀礼を実施した可能性 礫敷石材は流紋岩・ディサイト・安山岩を中心（常楽寺川流域の礫岩層由来）
第3段階	墳丘盛土の構築	①墓坑盛土（墓坑を被覆） ②墳丘盛土（墳丘外表を整地）	地山や地山風化土の掘削土を利用
第4段階	盛土上の礫敷施工	第1主体部北側に礫敷SS001敷設	礫敷石材は凝灰岩が中心（岩盤の布志名層由来）
第5段階	墳丘上の葬送儀礼	前方部・くびれ部での葬送儀礼	手捏ね土器出土（前方部） 土師器蓋出土（くびれ部）



第43図 常楽寺柿木田1号墳の構築過程

(4) 第4段階：盛土上礫敷の施工

第4段階は墳丘盛土の完了後、第1主体部北側の盛土上に礫敷SSO01が敷設される。なお後円部北西側の表土中に礫が散乱しており、本来は後円部北西側にも礫敷が展開していた可能性がある。

(5) 第5段階：墳丘上の葬送儀礼

第5段階は墳丘上の葬送儀礼である。常楽寺柿木田1号墳では、後円部での明確な葬送儀礼の痕跡は確認できず、後円部上での葬送儀礼は行われていなかった蓋然性が高い。その一方で、後円部の裾部に近い前方部の墳丘上面では、非日常的な用途が想定されるミニチュアの手捏ね土器が2019年度調査で確認されている（幡中編2021）。また、2010年度の試掘確認調査では前方部に近いくびれ部周辺で土師器の甕が見つかっている（宮本編2019）。これらの状況から、墳丘の完成やその前後の時期に、前方部やくびれ部周辺で葬送儀礼が行われたと推測される。

5 主体部の棺構造の特質と階層構造

今回の調査では、第1～3主体部の棺の構造を把握できた。特に第2主体部の組合式木棺の底面には、底板の代わりに棺内の礫敷が確認でき、常楽寺柿木田1号墳の主体部の埋葬施設を評価するうえで重要である。ここでは、第1～3主体部の棺構造の特質やその位置づけを詳しく検討する。

(1) 組合式木棺の分類

常楽寺柿木田1号墳の第1～3主体部は組合式木棺である。組合式木棺の構造は、岩本崇氏が古墳時代前半期の奥才古墳群（松江市鹿島町）の棺内礫敷を備えた「奥才型木棺」（赤澤2002）を検討するなかで分類している（岩本2022）。岩本氏の論考では、墓坑内で棺底周辺に材を設置するための溝を持つものを組合式1類、墓坑に溝を持たずに底面が平坦なものを組合式2類としている。

さらに、組合式1類は墓坑底面を断面箱形に近い形状に掘削するものを1a類、棺下部に断面U字形の掘り込みを持つものを1b類として細分されている（第44図）。また、1類は比較的小規模で小口部がH字形構造になる傾向から箱式石棺との類似性が高く、2類は類似性が弱まるという型式変化を示すとともに、組合式1類から2類への推移は、古墳時代前期後半以降で短期的に進行し、中期前半頃まで両者は併存した可能性が示されている。

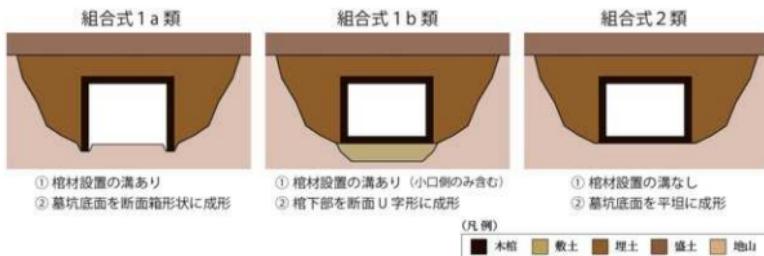
(2) 主体部の棺構造の特質

常楽寺柿木田1号墳の第1～3主体部における組合式木棺の様相は、第1・3主体部と第2主体部で特質が異なっており（第45図）、岩本氏が示した分類を援用して位置づけを検討する。

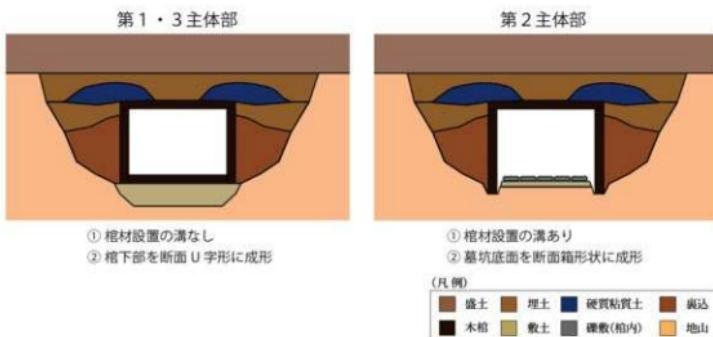
第1・3主体部は、墓坑内に棺材を設置するための溝を持たないが、断面U字形の掘り込みを備えており、掘り込み内には棺台の役割を担った敷土が施される。そのため、第1・3主体部の組合式木棺の構造としては、組合式1b類に近い2類に相当すると判断できる。

第2主体部は、墓坑内に棺材を設置するための溝が設けられ、また底面の断面形は箱形状に成形されている。よって第2主体部の棺構造は、組合式1a類に位置づけられる。型式学的には、組合式1a類の第2主体部、そして組合式1b類に近い2類の第1・3主体部という配列が想定できる。

なお、第2主体部は箱形に成形された墓坑底面上に敷土を施してその上面に礫敷を構築しているが、



第44図 組合式木棺（断面形態）の分類模式図（岩本2022を参考に作成）



第45図 常楽寺柿木田1号墳における第1～3主体部の組合式木棺（断面形態）の分類模式図

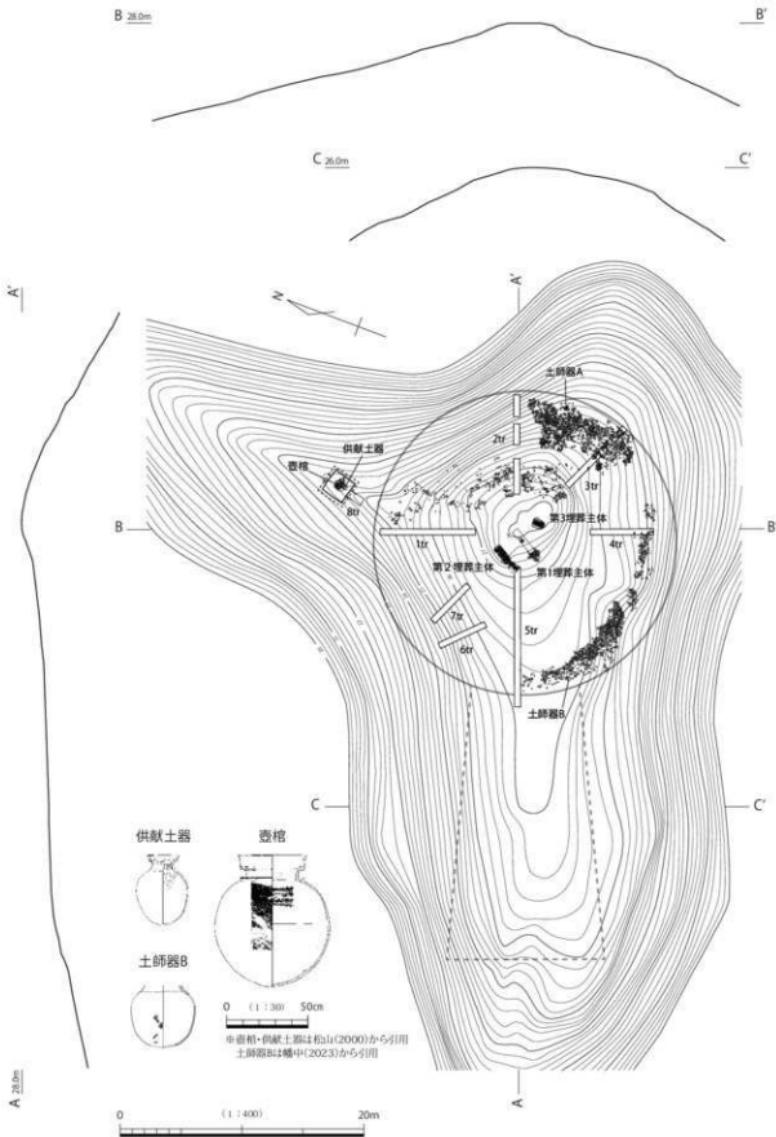
第1・3主体部には礫敷が確認できないなどの相違点が目立つ一方、棺材を固定する裏込土の敷設や棺の密閉を志向した硬質粘質土の施工が共通して認められるなど、主体部の構築状況には共通点も多く、同一の技術体系のなかで主体部が構築された可能性が高い。

(3) 主体部の階層構造

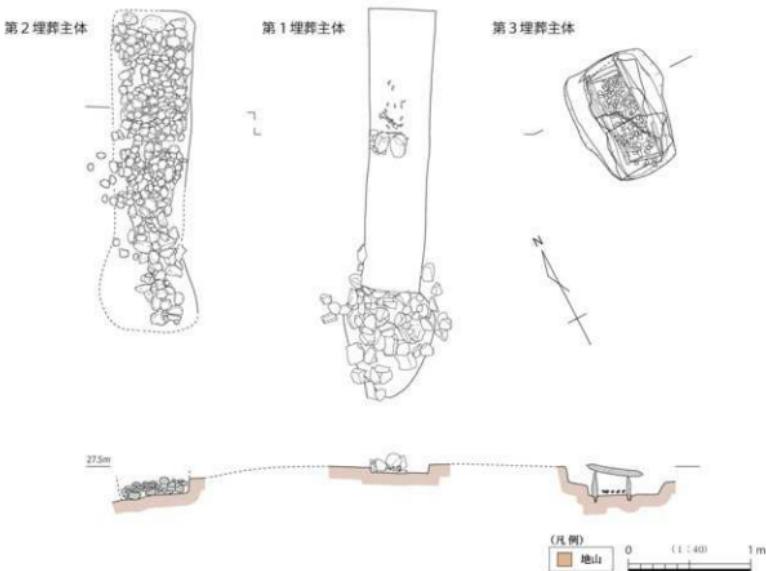
これまでの検討内容を踏まえ、常楽寺柿木田1号墳の主体部の階層構造を検討したい。いずれの主体部でも副葬品は出土しておらず、副葬品から社会的な位置づけを求めるることは難しい。ここで、古墳時代前半期で棺内礫敷を備える主体部が多数認められる奥才古墳群に注目すると、棺内礫敷を設けた主体部の被葬者は、礫敷を持たない主体部の被葬者よりも社会的に優位であった点や、主体部の規模と墳頂部での位置関係で優劣が決定された可能性が指摘されている（岩本2022）。

こうした前提をもとに、常楽寺柿木田1号墳の主体部の様相に目を向けると、棺内に礫敷を持たないが最も規模の大きい第1主体部が墳頂部中央に設けられ、その両脇に棺内礫敷を備えた第2主体部と礫敷のない第3主体部が構築される状況にある。そのため、棺内礫敷を持つ第2主体部の被葬者が社会的に優位であったとは即断できない。

類似した状況は、常楽寺柿木田1号墳から直線で北に約2.5kmの距離にある丘陵上に造られた古墳時代前期末頃の山地古墳（出雲市神西沖町）で確認できる（第46図）。山地古墳は1985（昭和60）



第46図 山地古墳の埴丘全体図



第47図 山地古墳の主体部全体図

年に発掘調査が行われ（川上編 1986），3つの主体部が埴頂部に確認されている⁽¹⁾（第47図）。棺内に疊敷を持たない組合式木棺の第1埋葬主体は，埴頂部中央に位置して最も規模が大きく，その両脇に疊敷を伴う組合式木棺の第2埋葬主体と箱式石棺の第3埋葬主体が配置される。副葬品は第1埋葬主体が最も豊富であり，棺内疊敷の有無よりも主体部の規模や埴頂部での位置関係を優先的に重視して社会的な位置関係が規定された可能性が高い（幡中 2023）。よって，常楽寺柿木田1号墳の主体部についても，棺内疊敷による社会的な位置づけよりも，主体部の規模や埴頂部での配置によって社会的な優位性が表象されたと考えられよう。

これらの点を踏まえると，第1主体部の被葬者が最も社会的地位が高く，次いで第2主体部，そして第3主体部という階層構造が存在した可能性が想定される。

6 神西湖湖南岸地域に展開する古墳と棺内疊敷

今回の調査成果のなかで，第2主体部の埋葬施設で棺内疊敷が確認されたことは重要な成果の一つである。棺内疊敷は，主に近畿地方北部や島根半島東部でまとまって確認されるほか，九州地方北部でも確認されており，日本海沿岸の水上交通による地域間の交流や交易などを具体的に示している可能性が指摘されている（赤澤 2002，岩本 2003・2010）。

近年，出雲平野周辺では古墳時代前半期の古墳の調査事例が増加し，棺内疊敷を持つ埋葬施設は出雲平野西南部における神西湖湖南岸地域に比較的まとめて分布する状況（第48図）が明らかになっ



第48図 神西南岸地域の古墳時代前半期の主な古墳の分布

てきた（輪中 2022a・2022b）。かつての神西湖は日本海とつながる入江であり、奈良時代には水産資源の豊かな「神門水海」として『出雲国風土記』に登場する。古墳時代の神西湖も同様に入江で、汀線が現在よりも内陸側の丘陵麓の近くまで入り込んでいたと考えられる。日本海とつながった入江に面するこの地域は、水上交通の要所として他地域との交流が盛んであったことは想像に難くない。

神西南岸地域において、古墳時代前期中葉頃に築造され、墓坑の床面全体に礫を充填する礫床が確認された浅柄II古墳（出雲市知井宮町）が存在するものの、現在のところ埋葬施設である棺内に礫敷を持つ古墳として最も古い時期に位置づけられるのは、当時の想定水域が眼前に広がる丘陵上に築造された古墳時代前期末頃の山地古墳である。古墳時代前期末から中期初頭頃に比定される常楽寺柿木田1号墳を含め、山地古墳周辺には埋葬施設に棺内礫敷を持つ古墳時代前半期の古墳が展開しており、この地域のなかで棺内礫敷の埋葬施設が世代間で継承されながら波及したと考えられる。

また神西南岸地域は、古墳時代前半期に数多くの古墳が構築され、そのなかで当時出雲地方で最大級の規模を誇った前方後円墳の北光寺古墳（出雲市東神西町）が古墳時代中期中葉から後葉頃に出現する。その背景には入江に面して水上交通の要所として様々な地域との交流や交易を可能にした地理的環境が大きく影響していると考えられる。この地域に展開する棺内礫敷の埋葬施設は、こうした広域的な交流の一端を示していると想定され、常楽寺柿木田1号墳の調査成果を踏まえて古墳時代前半期における神西南岸地域の古墳文化の特質や歴史的位置づけを考えていく必要がある。

註

- (1) 山地古墳では、墳頂部で3つの主体部が見つかったほか、北側の丘陵裾部に壺棺と供献土器が確認され、これらの土器は古墳時代前期末頃の小谷4式期に比定されている(松山2000・2002・2018)。

参考文献

- 赤澤秀則 2002「小結」『奥才古墳群第8支群 県道御津東生馬線改良工事に伴う調査』鹿島町教育委員会 53
～60頁
- 岩本 崇 2003「棺内碟敷をもつ組合式箱形木棺」『大手前大学史学研究所紀要』第3号 大手前大学史学研究所
1～20頁
- 岩本 崇 2010「棺内碟敷をもつ組合式箱形木棺補論」『史跡 茶すり山古墳 総括編』一般国道483号北近畿
豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書VII・兵庫県文化財調査報告第383冊
兵庫県教育委員会 507～518頁
- 岩本 崇 2022「いわゆる「奥才型木棺」と古墳時代の集団関係」『社会文化論集 島根大学法文学部紀要』第
18号 島根大学法文学部社会文化学科 71～90頁
- 川上 稔編 1986『山地古墳発掘調査報告書』出雲市教育委員会
- 幡中光輔 2021「小結」『常楽寺柿木田古墳群－常楽寺柿木田1号墳の調査－』一般国道9号(出雲湖陵道路)改
築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・出雲市の文化財報告 46 出雲市教育委員会 64～74頁
- 幡中光輔編 2021『常楽寺柿木田古墳群－常楽寺柿木田1号墳の調査－』一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・出雲市の文化財報告 46 出雲市教育委員会
- 幡中光輔 2022a「出雲市 常楽寺柿木田1号墳の調査」『中四研だより』第50号 中国四国前方後円墳研究会
7～9頁
- 幡中光輔 2022b「常楽寺柿木田1号墳の調査成果と第2主体部の棺内碟敷」『島根考古だより』第108号 島根
考古学会 2～3頁
- 幡中光輔 2023「山地古墳の再検討」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第11集 出雲弥生の森博物館 1～14
頁
- 松山智弘 2000「小谷式再検討－出雲平野における新資料から－」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会
99～130頁
- 松山智弘 2002「出雲における墳墓の変遷」『神原神社古墳』加茂町教育委員会 243～249頁
- 松山智弘 2018「古墳出土土器をめぐって 山陰」「前期古墳編年を再考する」六一書房 161～174頁
- 宮本正保編 2019『常楽寺柿木田古墳群－弥生時代集落の調査－』一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 5 島根県教育委員会
- 和田晴吾 1989「葬制の変遷」『古代史復元6 古墳時代の王と民衆』講談社 105～119頁

第4章 自然科学分析

第1節 常楽寺柿木田1号墳の第1・2主体部におけるPCN分析

1 はじめに

常楽寺柿木田1号墳は出雲市湖陵町常楽寺に所在する。古墳は出雲市佐田町と湖陵町の境に水源を持ち、神西湖に注ぐ常楽寺川の成す冲積平野を見下ろす東岸丘陵上に立地する。本稿では、2021（令和3）年度の常楽寺柿木田1号墳の調査で確認された第1・2主体部を対象に行ったPCN分析（全リン分析およびCN分析）と粒度分析について報告する。

2 分析対象試料

第49図に分析対象とした第1・2主体部の配置および試料採取対象範囲を示し、第50～53図に分析試料の採取地点を示す。

(1) 第1主体部南北土層

第50図に試料採取地点を示している。厚さ3cmの試料を柱状に、床面上位で4試料、下位で2試料の合計6試料を現地にて採取した（試料No.JK1-1～6）。

(2) 第1主体部西側2トレンチ

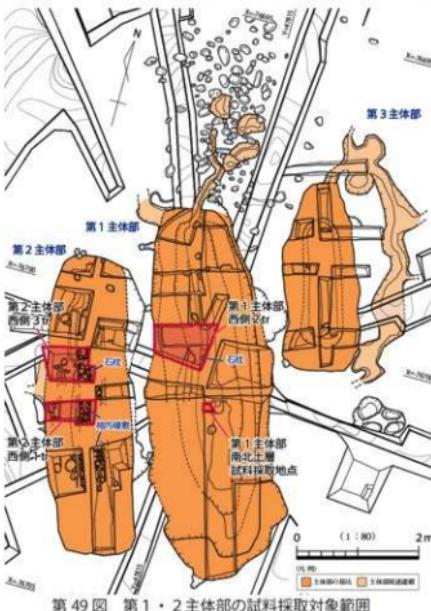
第51図に試料採取地点を示す。石枕と想定され、円礫表面に付着した粘土を削り取り、分析試料（試料No.JK1-S1）とした。

(3) 第2主体部西側1トレンチ

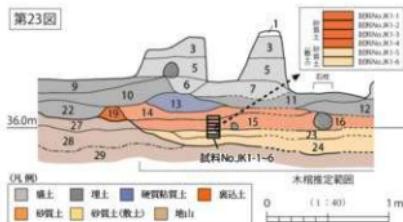
第52図に試料採取地点を示す。第2主体部には礫敷が確認され、礫敷のマトリックスを4～5cm幅で現地で採取した（東から試料No.JK2-1～4）。さらに礫敷を構成する円礫（第2主体部西側1tr-石19）表面に付着した粘土を削り取り、分析試料（試料No.JK2-S1）とした。

(4) 第2主体部西側3トレンチ

第53図に試料採取位置を示す。石枕が確認され、石枕のマトリックス（試料No.JK2-5・6）を現地で採取した。さらに、



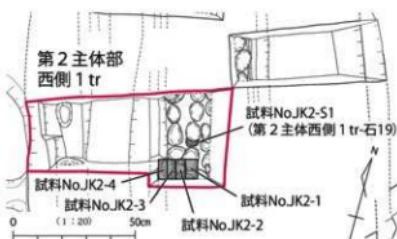
第49図 第1・2主体部の試料採取対象範囲



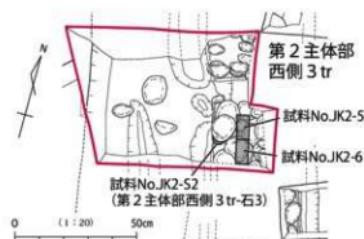
第50図 第1主体部南北土層図(試料採取地点)



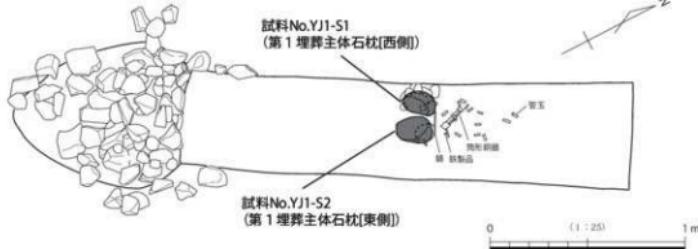
第51図 第1主体部西側 2 tr 平面図(試料採取地点)



第52図 第2主体部西側 1 tr 平面図(試料採取地点)



第53図 第2主体部西側 3 tr 平面図(試料採取地点)



第54図 山地古墳第1埋葬主体平面図(試料採取地点)

石枕下の円礫（第2主体部西側 3 tr-石3）表面に付着していた粘土を削り取り、分析試料（試料 No.JK2-S2）とした。

(5) 山地古墳石枕

比較試料として、山地古墳（出雲市神西沖町）の第1埋葬主体（第54図）で採取され、出雲市文化財課が保管していた石枕の表面に付着した粘土を削り取り、分析試料（試料 No.YJ1-S1・S2）とした。

3 分析方法

(1) 全リン分析方法

全リン分析の方法は、以下の通りである。

- ① 試料を 60°Cで 1日乾燥後、メノウ乳鉢で 200 メッシュ程度に粉碎。

- ② フッ化水素酸分解法（土壤環境分析法編集委員会編 1997）による試料調整。
- ③ モリブデン酸による定量（日本薬学会編 2010）に従い、紫外可視分光光度計（島津社製 UV-1600PC）による濃度測定。

(2) C N分析方法

以下の手順によって各試料のC N濃度を測定した。

- ① 試料を60°Cで1日乾燥後、メノウ乳鉢で200メッシュ程度に粉碎する。
- ② 約15mgをひょう量し銀コンテナに入れる。貝殻起源等の無機態炭素を取り除くために、1M-HCl添加後100°Cで加熱乾燥する。
- ③ 更に錫コンテナで包む。
- ④ 元素分析機EA-1108により測定する。標準試料にはBBOTを用いる。
- ⑤ 乾燥試料に対する重量百分率で有機炭素濃度(TOC)と全窒素濃度(TN)を測定し、C/Nを算出する。

(3) 粒度分析方法

粒度分析方法は、以下の通りである。

- ① 分析試料1g程度を分取し、秤量（分析試料秤量時に別途試料を分取し、含水率測定）。
- ② 1～1φの間を0.5φごとの篩で湿式篩別。
- ③ 1φ通過分にH₂O₂（およそ0.3cc）を加え分散。一昼夜静止。
- ④ 水を加え25ccとし、測定試料とする。
- ⑤ 島津製作所製SALD-2300により粒度分析実施。
- ⑥ 分析結果をφスケール（数字が小さいほど粒径が大）で表示し、50%粒径の分布図を作成する。

4 分析結果

(1) 全リン分析およびC N分析結果

第55～57図および第8表に分析結果を示す。また、以下に濃度分布の特徴を示す。

① 第1主体部南北土層（第55図）

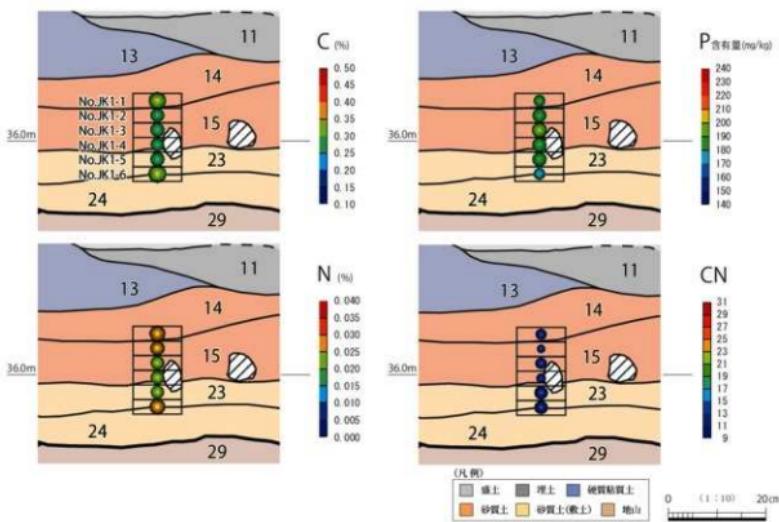
試料No.JK1-4・5の間が木棺の設置面に相当する。P(リン)濃度は試料No.JK1-3でピークを成し、上下に向かい減少する。N(窒素)濃度は試料No.JK1-5が最も低く、上下に向かい微増する。C(炭素)濃度は試料No.JK1-4が最も低く、上下に向かい微増傾向にある。C/N値は試料No.JK1-5・6の敷土部分で12.77とやや高く、上部の試料No.JK1-1～4では11.02～11.76と変動が大きい。

② 第1主体部西側2トレンチ（第56図左）

石枕と想定される円礫（試料No.JK1-S1）表面に付着した粘土を分析した。他の分析値と比べ、P(リン)濃度が2倍程度の値を示す。一方、N(窒素)濃度は最も低く、C(炭素)濃度は比較的高い。この結果、C/N値は30.21と最も高い値を示した。

③ 第2主体部西側1トレンチ（第56図中央）

礫敷マトリックス（試料No.JK2-1～4）と礫敷の円礫（第2主体部西側1tr-石19）（試料No.JK2-S1）



第55図 第1主体部南北土層のPCN分析結果

第8表 分析結果一覧

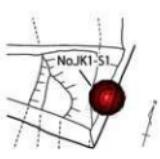
古墳・主体部	分析対象地点	試料No.	粒度分析				P (mg/kg)	Nitrogen (%)	Carbon (%)	C/N	P/C	
			50%粒径	平均粒径	分級度	密度						
東条寺跡木田1号墳 第1主体部	南北土層	JK1-1	2.84	3.46	2.83	0.31	0.90	180.1	0.028	0.329	11.661	0.055
		JK1-2	3.27	3.65	2.61	0.26	0.98	186.7	0.026	0.286	11.017	0.065
		JK1-3	3.15	3.77	2.60	0.35	0.94	190.8	0.025	0.288	11.759	0.066
		JK1-4	2.55	3.09	2.22	0.36	0.87	188.3	0.025	0.281	11.311	0.067
		JK1-5	1.55	2.33	2.03	0.62	1.41	188.3	0.024	0.291	12.167	0.065
		JK1-6	1.73	2.51	2.12	0.57	1.17	179.8	0.028	0.340	12.166	0.053
東条寺跡木田1号墳 第2主体部	西側2tr 石枕	JK1-S1	-	-	-	-	-	457.2	0.012	0.362	30.212	0.126
		JK2-1	3.49	3.97	2.88	0.28	0.84	216.3	0.033	0.366	11.074	0.059
		JK2-2	1.97	2.77	2.16	0.55	1.07	202.7	0.034	0.418	12.392	0.049
		JK2-3	1.90	2.70	2.19	0.54	1.10	203.6	0.037	0.461	12.370	0.044
		JK2-4	1.84	2.77	2.25	0.57	1.18	228.4	0.037	0.447	12.095	0.051
		JK2-S1	-	-	-	-	-	160.0	0.023	0.262	11.537	0.061
山地古墳 第1埋葬主体	西側3tr (石枕マトリックス)	JK2-S2	2.38	3.00	2.16	0.43	0.99	175.5	0.029	0.302	10.277	0.058
		JK2-6	2.63	3.43	2.42	0.41	0.77	210.2	0.029	0.318	10.823	0.066
		JK2-S2	-	-	-	-	-	147.5	0.021	0.263	12.561	0.056
山地古墳 第1埋葬主体	石枕	YJ1-S1	-	-	-	-	-	2970.6	0.062	1.419	22.796	0.209
		YJ1-S2	-	-	-	-	-	3321.1	0.042	1.190	28.025	0.279

表面に付着した粘土を分析した。P濃度は、試料No.JK2-1～4では200mg/Kg以上と比較的高い値を示す。一方で試料No.JK2-S1では160.0mg/Kgと低い。N, C濃度も同傾向にあり、試料No.JK2-1～4ではN濃度が0.033～0.037%, C濃度が0.366～0.461%と比較的高い値を示す。一方で試料No.JK2-S1ではN濃度が0.023%, C濃度が0.262%と低い。これに対しC/N値は、11.07～12.39とやや高めの値を示した。

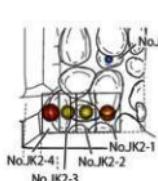
④ 第2主体部西側3トレーナー（第56図右）

石枕マトリックス（試料No.JK2-5・6）と石枕下の円礫（第2主体部西側3tr-石3）（試料No.JK2-S2）表面に付着した粘土を分析した。P濃度は、石枕マトリックス2試料のうち、試料No.JK2-5では

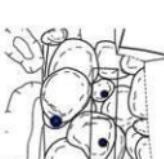
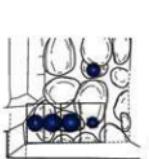
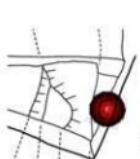
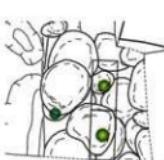
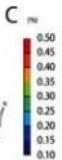
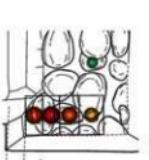
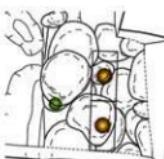
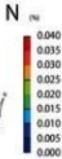
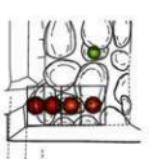
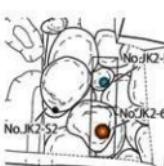
第1主体部西側2tr



第2主体部西側1tr



第2主体部西側3tr



0 (1 : 20) 50cm

0 (1 : 10) 50cm

第56図 第1主体部西側2tr（左）・第2主体部西側1tr（中央）・第2主体部西側3tr（右）のPCN分析結果
175.5mg/Kgと低い。一方、試料No.JK2-6では210.2mg/Kgと高かった。また、試料No.JK2-S2では147.5mg/Kgと今回の測定値のなかでは最も低かった。N濃度は、石枕マトリックス2試料間で差がなく、0.029%と今回の測定値では中葉の値を示すが、試料No.JK2-S2ではやや低めの値を示す。C濃度はP濃度と同傾向にあり、試料No.JK2-6が0.318%とやや高く、試料No.JK2-5が中葉、試料No.JK2-S2が低い値を示した。C/N値は石枕マトリックス2試料で10.28, 10.82とやや低い値となり、試料No.JK2-S2で12.50とやや高めの値を示した。

⑤ 山地古墳第1埋葬主体（第57図）

石枕表面付着の粘土を分析した（試料No.YJ1-S1・S2）。P濃度は、常楽寺柿木田1号墳試料の10倍程度の値を示す。同様にN、C濃度も高い値を示した。C/N値も22.80, 28.03と高い値を示した。

(2) 粒度分析結果

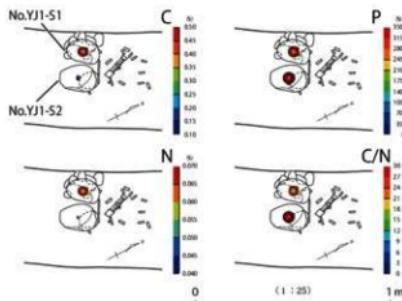
粒度分析結果として第58図に50%粒径分布を示す。また、第8表に50%粒径のほか、粒度分布グラフの4要素を示す。以下に粒度組成の特徴を示す。

① 第1主体部南北土層

上位(試料No.JK1-1～4)では50%粒径が2.5～3.27φ、平均粒径3.09～3.77φを示し、細～極細粒砂に分類されるほか、分級度、歪度、尖度もほぼ同じ値を示す。一方、下位(試料No.JK1-5・6)では上位に比べ粗粒で、中～細粒砂に分類される。また分級度も低く歪度、尖度は高い。下位の2試料は敷土、上位4試料が砂質土に相当し、現地での観察結果と一致する傾向を示した。

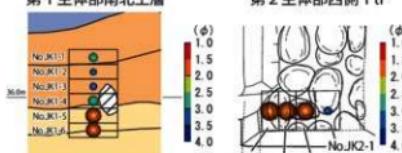
② 第2主体部西側1トレンチ

いずれも礫敷マトリックスを試料とするが、試料No.JK2-1と試料No.JK2-2～4の2グループに分かれた。試料No.JK2-1の50%粒径は3.49φ、平均粒径は3.97φと極細粒砂に分類される。一方、試料No.JK2-2～4の50%粒径は試料No.JK2-1に比べ粗粒で、中～細粒砂に分類される。試料No.JK2-1は試料No.JK2-2～4に比べ分級度が高く、歪度、尖度が低い。

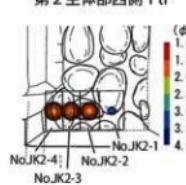


第57図 山地古墳第1埋葬主体のPCN分析結果

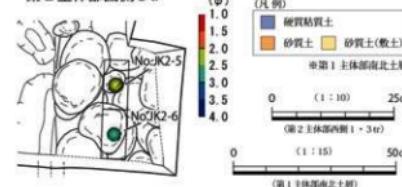
第1主体部南北土層



第2主体部西側1tr



第2主体部西側3tr



第58図 第1・2主体部の粒度分析結果(50%粒径)

5 P濃度分布およびC/N値分布と遺体痕跡

今回の調査では、分析試料採取状況を①石枕(常楽寺柿木田1号墳第1主体部: 試料No.JK1-S1, 山地古墳第1埋葬主体: 試料No.YJ1-S1・S2), ②礫敷の円碟および礫敷マトリックス(常楽寺柿木田1号墳第2主体部: 試料No.JK2-S1, 試料No.JK2-1～4), ③石枕下の円碟および石枕マトリックス(常楽寺柿木田1号墳第2主体部: 試料No.JK2-S2, 試料No.JK2-5・6), ④主体部内部の南北土層の垂直分布(常楽寺柿木田1号墳第1主体部: 試料No.JK1-1～6)に大別できる。以下では分析試料採取状況ごとにP濃度分布、C/N値(分布)、50%粒度分布の関係について詳細に検討し、遺体痕跡について考察する。

(1) 石枕(常楽寺柿木田1号墳: 試料No.JK1-S1, 山地古墳第1埋葬主体: 試料No.YJ1-S1・S2)

P濃度は試料間の差が大きかった。特に山地古墳の2試料は常楽寺柿木田1号墳の10倍近い濃度を示している。また、常楽寺柿木田1号墳試料No.JK1-S1も457.2mg/kgと高い値を示した。

P濃度から、3試料とも遺体の痕跡を捉えている可能性が指摘できる。一方、これら3試料のC/N値はいずれも20を超えており、人間（動物）指標の10を大きく超える。程度の差があるものの、神門横穴墓群10支群J-5号横穴では、横穴内壁面に伸びた根の影響から壁面に沿ってC/N値が高くなっていた（渡辺2021）。堆積物中でも礫の周間に根が絡むことは普通にあり、J-5号横穴同様に、根の影響でC/N値が高くなったものと考えられる。一方、P/C値が高いことから根そのものの影響でP濃度が高くなかったとは考えにくい。根跡を経由して土壤由来のPが流れ込む可能性もある（渡辺2008）が、C濃度がさほど高くないことから、土壤の影響も考えにくい。

したがって、山地古墳の枕石（試料No.YJ1-S1・S2）、および常楽寺柿木田1号墳の第1主体部の枕石（試料No.JK1-S1）には、遺体埋葬の痕跡が残っていた可能性が高い。

（2）礫敷円礫・礫敷マトリックス（常楽寺柿木田1号墳：試料No.JK2-S1、試料No.JK2-1～4）

P濃度は礫敷円礫の試料No.JK2-S1で160.0mg/Kgと低く、礫敷マトリックスの試料No.JK2-1～4で200mg/Kg以上と相対的に高かった。一方、C/N値は11.074～12.329、P/C値は0.044～0.061であり、礫敷マトリックス4試料と礫敷円礫の間に大きな差はない。また、礫敷円礫試料No.JK2-1の粒度組成が礫敷マトリックスの試料No.JK2-2～4と異なっていたが、化学分析の値には影響が認められなかった。木棺が存在した場合にC/N値が高くなることは報告されており（渡辺2017）、木棺の存在を想定すると遺体の痕跡と考えるには妥当な値である。

礫敷マトリックス4試料に関して、今回分析を行った第1主体部の南北土層の柱状採取試料（試料No.JK1-1～6）に比べP濃度が高いことから、遺体の痕跡を検出したと考えられる。また前述のように、礫敷円礫（試料No.JK2-S1）ではP濃度が低いことから、遺体の痕跡が残っているとは言いにくい。

（3）石枕下円礫・石枕マトリックス（常楽寺柿木田1号墳：試料No.JK2-S2、試料No.JK2-5・6）

P濃度は石枕マトリックスの試料No.JK2-6が210.2mg/Kgと高く、石枕下円礫の試料No.JK2-S2および石枕マトリックスの試料No.JK2-5は低かった。またC/N値は石枕マトリックスの試料No.JK2-5・6が10.277、10.823と相対的に低く、石枕下円礫の試料No.JK2-S2が12.501とやや高かった。いずれも人間（動物）の指標である10を超えるが、前述のように木棺の存在を想定すると、妥当な値である。

したがって、P濃度の高い石枕マトリックスの試料No.JK2-6からは、遺体の痕跡を検出したと考えられる。一方、石枕マトリックスの試料No.JK2-5、石枕下円礫の試料No.JK2-S2は、P濃度が低いことから、遺体の痕跡が残っていたとは言いにくい。

（4）第1主体部内部の南北土層の垂直分布（常楽寺柿木田1号墳：試料No.JK1-1～6）

第1主体部の砂質土から敷土にかけての試料を分析した。粒度分析結果では、試料No.JK1-4と5の間で粒度組成が分かれ、砂質土と敷土の境と一致している。これに対し、P濃度は全体にさほど高くなく、砂質土と敷土境界での濃縮も認められなかった。一方でC/N値は11.017～12.167と木棺の存在を想定すると遺体の痕跡と考えるには妥当な値である。

C/N値は遺体の存在を示唆するような値であったが、P濃度に有意な変化が認められなかったことから、遺体の痕跡が残っていたとは言いにくい。

6 まとめ

常楽寺柿木田1号墳主体部のPCN分析の結果、第1主体部の石枕（試料No.JK1-S1）、第2主体部の礫敷マトリックス（試料No.JK2-1～4）、第2主体部の石枕マトリックス（試料No.JK2-6）、および比較のために行った山地古墳第1埋葬主体の石枕（試料No.YJ1-S1・S2）からPが高濃度で検出された。これらは、遺体の痕跡を検出したものと考えられる。礫敷マトリックス、石枕マトリックスではC/N値がやや高かったものの、木棺の存在を想定すれば、妥当な値であった。また、3つの石枕では20～30と高いC/N値を示した。これは石枕に根が絡みつき、高いC/N値を示したものと考えられる。

一方、第1主体部内部の南北土層の垂直分布では、有為なP濃度の濃縮傾向を示さなかった。敷土が砂質土に対して粗粒であったことから、境界部でPが濃縮することなく移動した可能性が指摘され、さらに下位の地山面まで分析する必要があったと考えられる。

（渡辺正巳・瀬戸浩二）

謝辞

本研究は、日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究C（21K00989）の成果の一部を利用している。また出雲市文化財課の幡中光輔氏には、現地での試料採取や研究成果の公表に便宜を図っていただいた。ここに感謝の意を示します。

参考文献

- 土壤環境分析法編集委員会編 1997「28 全量分析分解方法 B フッ化水素酸分解法」『土壤環境分析法』博友社
171～174頁
- 日本薬学会編 2010「12) 総リン(1) モリブデン酸による定量」『衛生試験法・注解 2010』金原出版 947～948頁
- 渡辺正巳 2008「原田遺跡8区土坑(SK57)の自然科学的検討」『原田遺跡(4) 第2分冊—縄文時代以降の調査一』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12 島根県教育委員会 192～202頁
- 渡辺正巳 2017「古屋敷遺跡で検出された「土坑墓(SK01)」の自然科学的検証」『古屋敷遺跡(D区)』一般国道9号(静岡仁摩道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2 島根県教育委員会 132～137頁
- 渡辺正巳 2021「検出石棺・石床の遺骸痕跡」『神門横穴墓群 第10支群』十間川防災安全工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・出雲市の文化財報告45 出雲市教育委員会 71～78頁

第2節 常楽寺柿木田1号墳の第2主体部に伴う棺内疊敷の石材

1 はじめに

常楽寺柿木田1号墳の第2主体部では、扁平な円疊が敷かれた棺内疊敷が認められた（第59図）。本稿では、この疊敷用いられた疊の採取地について、古墳が立地する丘陵裾を流れる常楽寺川流域周辺を踏査して河床や露頭などの石材を検討した結果を述べる。棺内疊敷の疊は、常楽寺川流域の疊岩層に由来する可能性が多く、崖縦堆積物から採取したか、常楽寺川河床から選択的に採取した可能性が考えられる。

2 疊床の岩石種と特徴

主体部の棺内疊敷の疊は、良く円摩された扁平な円疊を用いている。表面は風化して白っぽい色を示すものが多い。表面観察のみで正確には区別できないが、大部分は火山岩で、流紋岩とデイサイトが多く、安山岩を伴う。同質の溶結凝灰岩（高温の火山灰が再溶結して火山岩と似た岩相を示すもの）も含まれるとみられる。

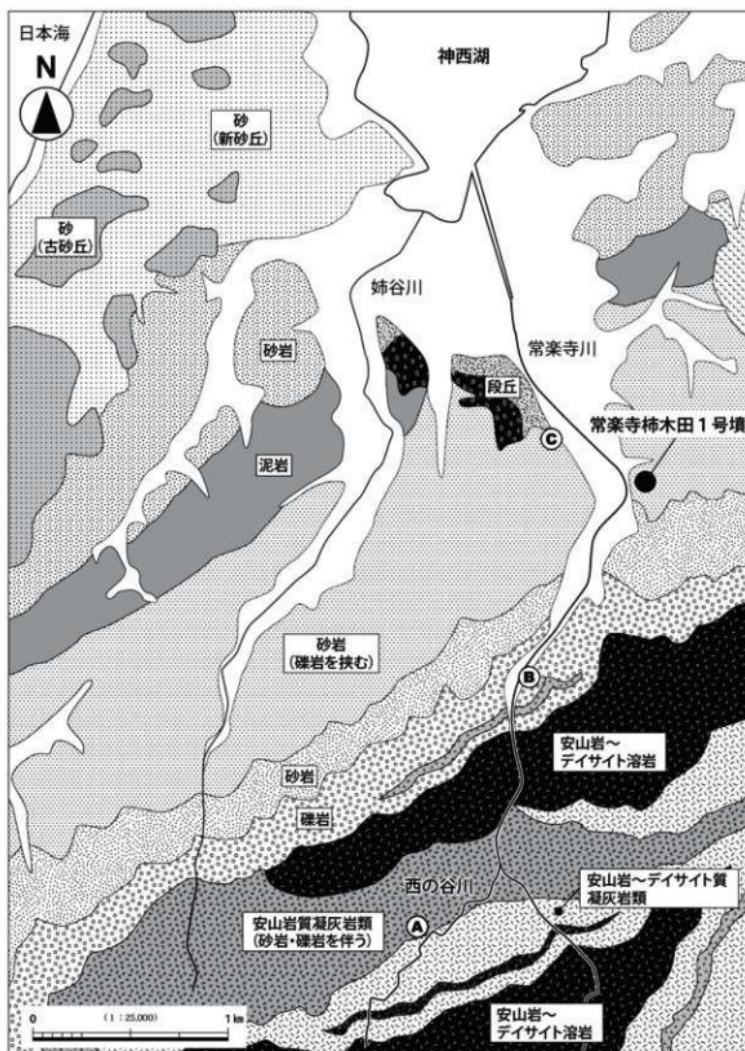
常楽寺柿木田1号墳が立地する丘陵は新第三紀の堆積岩で、一部に疊岩層を伴う砂岩層である。丘陵の下部には、貫入岩とみられる玄武岩（ドレライト）が認められる。立地場所の疊岩層に含まれる疊は、形状的と大きさは棺内疊敷のものと共通するが、流紋岩が大部分を占め、岩石種の構成が疊敷のそれとは異なる。疊岩から疊を取り出すことは容易ではないこともあり、棺内疊敷の疊は他の地点から持ち込んだ可能性が高い。

3 周辺の地質分布と河床の疊

常楽寺柿木田1号墳は常楽寺川右岸の丘陵上に築造されており、常楽寺川の集水域は基本的に新第三紀の火山岩類および凝灰岩類と堆積岩類（おもに砂岩、疊岩）の分布域で、神西湖に近い下流域には段丘堆積物（第四紀更新世）が分布する（第60図）。谷底平地には疊を主体とする完新世の堆積物が分布している。



第59図 常楽寺柿木田1号墳の第2主体部の棺内疊敷（左：南西から 右：西から）



第60図 常楽寺川流域周辺の地質図と現地踏査位置 (A～C地点)

古墳付近の河床の礫は上記の地質分布を反映して、安山岩またはデイサイトの火山岩（溶岩）および同質の凝灰岩類が主体となっている（第61・62図）。礫の形状は上流域から下流域まで角礫～亜角礫が主体であり、常楽寺柿木田1号墳の主体部における棺内礫敷に使われているような円礫の割合は



第61図 古墳付近の常楽寺川河床の円礫(撮影用に集積)



第62図 常楽寺川上流域の安山岩溶岩(露頭から採取)

第63図 常楽寺川と西の谷川の合流部(左:南から/下流側[奥]が円礫 右:西から/上流側[右]が角礫~亜角礫)
少量である。また、そのなかでも特に扁平な形状のものは少ない。

注目すべきは、円礫は少ないながらも存在することに対し、亜角礫との中間的な形状の亜円礫はほとんど認められない点である。河道内で角礫から円礫に段階的に円摩されたものであれば中間的な形状が存在するはずだが、礫形状は角礫～亜角礫(常楽寺川上流側)と円礫(常楽寺川下流側)の2グループにはっきり分かれている(第63図)。流程が約6.5kmと短く、流量が少ない常楽寺川の河道内では、硬い岩質の礫が円礫まで円摩されるために必要な時間と移動量がないと考えられ、円礫は河道に供給された時点ですでにその形状だったと推定できる。流域に分布する新第三紀の礫岩層にはよく円摩された円礫が含まれ、これが河床に存在する円礫の起源の可能性が高い。

4 石材採取地の推定

常楽寺柿木田1号墳の第2主体部における棺内襯敷で使われている礫と同質の円礫は、現在の常楽寺川の河床に存在しており、古墳直近の河床でも採取可能だったと思われる。しかし、円礫の割合は低く、これを選別するのは非効率である。

円礫の起源は新第三紀の礫岩層の可能性が高い。第60図のA地点では、斜面上方からの崖錐堆積物が認められ、緩い粘土質の堆積物中に円礫が存在している(第64図左)。このように、風化した礫岩層から侵食によって洗い出された硬質な円礫が集まった場所が、石材採取地の候補として有力と考えられる。第60図のB地点は礫岩層の分布域(第64図右・第65図)で、常楽寺柿木田1号墳から



第64図 A地点の崖錐堆積物に含まれる円礫（左：写真的礫は直径10cm未満）とB地点の河床礫（右）



第65図 B地点から約50m下流の砂岩層に挟まれる
砂岩層の円礫（左側の円礫が約15cm程度）

第66図 C地点の段丘堆積物の礫層
(層中の縦は風化が進んでいる)

の距離は1km程度と近い。現在は石垣やコンクリート擁壁によって崖錐堆積物が覆われているために地点の特定には至らないが、比較的近い場所で採取できたのであろう。なお、第60図のC地点の段丘堆積物にも河床礫と類似した形状の円礫が認められるが、この地点では亜円礫から亜角礫が大部分を占め、また礫は風化が進んでおり（第66図）、古墳における棺内礫敷の礫の供給源にはなりにくいと考えられる。

（中村唯史）

註

（1）第60図は、鹿野ほか（1998）をもとに作成している。

参考文献

鹿野和彦・松浦浩久・沢田順弘・竹内圭史 1998『5万分の1地質図幅「石見大田及び大浦」』地質調査所

第5章 総括

第1節 常楽寺柿木田1号墳の主体部土層の定量分析

1 はじめに

常楽寺柿木田1号墳の主体部の内容確認調査は、主体部内部の構造や構築状況を把握するために実施し、墓坑内の詳細な土層堆積状況を確認している。

調査のなかで、主体部に伴う副葬品などが墓坑内に存在する可能性が想定され、内容物を確認する必要があった。加えて、主体部の墓坑内に堆積する土層の特徴を明らかにするため、水洗篩別を実施して埋土などの内容物の定量分析を行った。なお、2019（令和元）年度には後円部上の墳丘盛土を中心に入内容物の定量分析を行っており（幡中2021）、今回の分析も同様の方法で進めた。また土層の採取は、第1～3主体部の各トレンチにおける組合式木棺の設置推定範囲やその周辺を中心に行った。

2 主体部土層と内容物の種類

（1）主体部土層の種類

ここでは主体部の墓坑内に存在した土層を一括して主体部土層と示したが、第3章第2節で報告した調査成果のなかで、属性の異なる5種類に区分して土層堆積状況を把握している（第67図）。具体的には、木棺の設置に伴う平坦面の作出や棺台の役割を担うために墓坑底面に施された砂質土の敷土、木棺の底面付近や礎敷土および木棺側板設置溝内に堆積する砂質土、木棺板材外側に施される裏込土、木棺を密閉する目的で木棺上面に敷設された硬質粘質土、そして墓坑上面付近まで充填される埋土が認められた。これら5種類を中心にそれぞれの内容物を確認する。

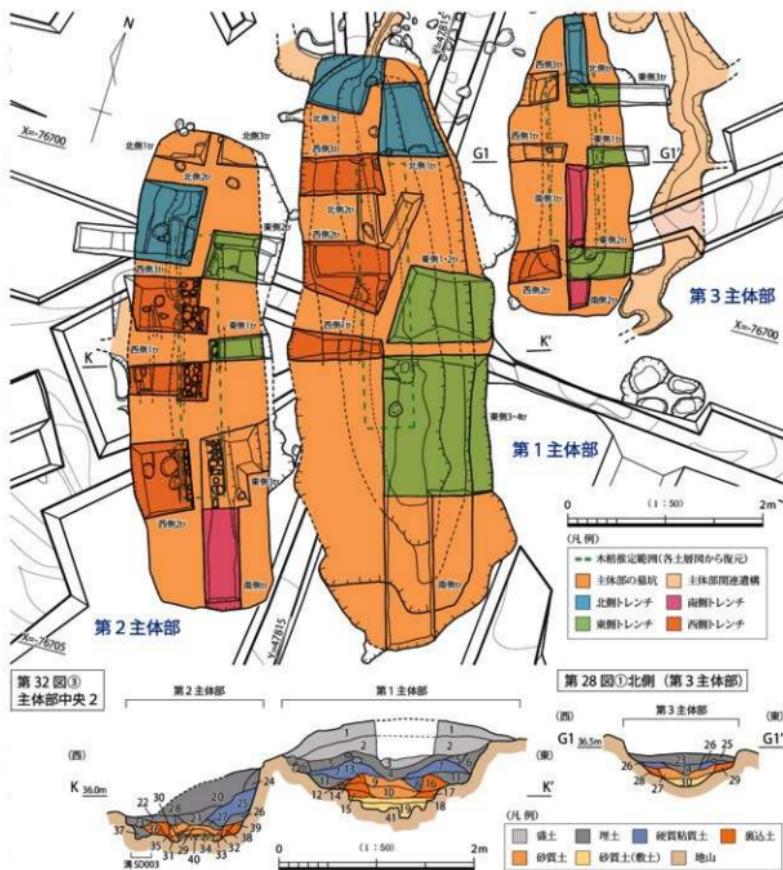
（2）内容物の種類

2019年度調査の墳丘盛土の定量分析では、墓坑STO01～STO03のサブトレンチで墓坑埋土（今回の主体部土層における埋土）を採取しており、墓坑埋土は地山および地山風化土の掘削土を用いたと推定した。布志名層に由来する地山は地点によって異なる様相を示すことが分かっており、地山掘削土に含まれる内容物の比率に差異が生じる。こうした前提を踏まえ、前回の墳丘盛土の定量分析と同様に、主体部土層の内容物を土砂と地山礎に分け、地山礎は光沢礎（半透明や不透明で光沢を帯びる礎）とその他の礎に分類した（第68図）。この前提を踏まえて水洗篩別を実施し、含有比率を算出した。

3 水洗篩別の実施

（1）水洗篩別の実施方法

主体部の各トレンチで採取した土層は、出雲弥生の森博物館に搬入し、水洗篩別を行った（第69図左）。水洗篩別は2mmメッシュの篩を使用し、その後に肉眼観察で礎を分類した（第69図右）。



第67図 分析対象地区（上）と土層堆積状況および土層の種類（下）



第68図 地山礫に含まれる光沢礫（左）とその他の礫（右）



第69図 水洗篩別状況（左）と肉眼観察による内容物の分類（右）

（2）遺物の有無の確認

水洗篩別では、まず墓坑内に含まれる遺物の有無を確認した。木棺の底面付近の位置に堆積する砂質土を中心に精査したが、副葬品などは確認できなかった。今回の調査はトレンチを設けて主体部の内部を部分的に確認したため、未調査の部分に副葬品が埋納されている可能性はあるが、水洗篩別の結果を積極的に評価すれば、木製品に比べて残存しやすい鉄器や土器などの副葬品は埋納されなかつたか、あるいは埋納されたとしてもかなり少量であった公算が大きい。

4 主体部土層の定量分析

（1）主体部土層の内容物の含有比率

主体部土層の水洗篩別を行い、内容物を土砂および光沢礫とその他の礫に選り分け、含有比率を整理した（第9表）。この含有比率をもとに主体部土層の様相を検討する⁽¹⁾。

主体部間の比較

最初に主体部全体として第1～3主体部のそれぞれの含有比率に注目したい。第1主体部は土砂が92.8%、光沢礫は1.4%、その他の礫が5.8%となる。一方、第2主体部は土砂94.8%、光沢礫が0.9%、その他の礫は4.3%となり、第2主体部の土層は第1主体部の土層と比べて土砂が占有する状況となる。ここで第3主体部の含有比率に目を転じると、土砂が92.8%、光沢礫は1.2%、その他の礫が6.0%を示しており、ほぼ第1主体部の含有比率と同様の様相であることが分かる。

第1～3主体部で採取した土層の種類に偏りがあり、そのため含有比率に差が生じた可能性もあるが、種類別に全体を俯瞰しても第2主体部で土砂の占有率が相対的に高い傾向にある。よって、この分析結果を積極的に捉えれば、第1・3主体部は墓坑の特徴や主体部の棺構造の特質が類似しており、主体部の土層も同じ地点、あるいは同質の地山掘削土を用いて構築された可能性が考えられる。対照的に、墓坑や棺構造の特徴に違いのある第2主体部の土層は、第1・3主体部と異なる地点の地山掘削土を採用していたと推測できる。

トレンチ間の比較

次に第1～3主体部に設けられた各トレンチ間の含有比率をもとに、それぞれの主体部内における地点間の様相を確認する。まず第1主体部は、北側トレンチと東側・西側トレンチで含有比率が明確

第9表 分析対象の主体部土層の重量と内容物の含有比率

		重量(kg)				含有比率(%)					
		全 体	土 砂	地山理		全 体	土 砂	地山理			
				光沢理	その他の理			光沢理	その他の理		
第1主体部	北側	盛上	12.92	11.26	0.37	1.27	100.0	87.2	2.9	9.9	
		埋上	9.90	8.90	0.20	0.80	100.0	89.9	2.0	8.1	
		硬質粘質土	88.70	79.30	1.90	7.50	100.0	89.4	2.1	8.5	
		敷上	30.00	27.50	0.40	2.10	100.0	91.7	1.3	7.0	
		理上～敷上	19.90	18.40	0.30	1.20	100.0	92.5	1.5	6.0	
	東側	小 計	161.42	145.36	3.17	12.87	100.0	90.1	1.9	8.0	
		理上～裏込上	5.10	4.50	0.40	0.20	100.0	88.2	7.9	3.9	
		理上～梢底付近砂質土	24.18	23.66	0.05	0.47	100.0	97.9	0.2	1.9	
		硬質粘質土	8.08	7.24	0.23	0.61	100.0	89.6	2.8	7.6	
		理上～裏込上	13.24	12.71	0.08	0.45	100.0	96.0	0.6	3.4	
	西側	理上～梢底付近砂質土+敷上	105.58	99.92	0.87	4.79	100.0	94.6	0.8	4.6	
		小 計	156.18	148.03	1.63	6.52	100.0	94.8	1.0	4.2	
		硬質粘質土	19.30	18.20	0.20	0.90	100.0	94.3	1.0	4.7	
		理上～裏込上	7.69	7.40	0.09	0.20	100.0	96.2	1.2	2.6	
		理上～梢底付近砂質土+敷上	8.73	8.50	0.03	0.20	100.0	97.4	0.3	2.3	
	合計(第1主体部)	2 tr	硬質粘質土	88.10	82.60	0.90	4.60	100.0	93.8	1.0	5.2
		3 tr	理上	7.90	7.20	0.10	0.60	100.0	91.1	1.3	7.6
		理上～梢底付近砂質土+敷上	11.30	10.20	0.20	0.90	100.0	90.3	1.8	7.9	
		小 計	143.02	134.10	1.52	7.40	100.0	93.7	1.1	5.2	
		合 計	460.62	427.49	6.32	26.79	100.0	92.8	1.4	5.8	
第2主体部	北側	北側2 tr	理上～裏込上	73.40	70.40	0.50	2.50	100.0	95.9	0.7	3.4
		南側 tr	理上	11.78	11.29	0.05	0.44	100.0	95.8	0.4	3.8
		1 tr	硬質粘質土	9.79	9.35	0.11	0.33	100.0	95.5	1.1	3.4
		2 tr	硬質粘質土	16.40	15.40	0.20	0.80	100.0	93.9	1.2	4.9
		理上～裏込上	76.10	70.60	0.70	4.80	100.0	92.8	0.9	6.3	
	西側	小 計	102.29	95.35	1.01	5.93	100.0	93.2	1.0	5.8	
		硬質粘質土	10.55	10.31	0.03	0.21	100.0	97.7	0.3	2.0	
		理上～礫散上砂質土	23.68	22.61	0.13	0.94	100.0	95.5	0.5	4.0	
		礫散上砂質土	13.27	12.80	0.07	0.40	100.0	96.5	0.5	3.0	
		柏樹板設置溝内砂質土	11.13	10.90	0.03	0.20	100.0	97.9	0.3	1.8	
	合計(第2主体部)	2 tr	硬質粘質土	7.40	7.10	0.06	0.24	100.0	96.0	0.8	3.2
		理上～礫散上砂質土	11.90	11.30	0.10	0.50	100.0	95.0	0.8	4.2	
		硬質粘質土	16.97	16.12	0.25	0.60	100.0	95.0	1.5	3.5	
		裏込上	20.49	19.73	0.14	0.62	100.0	96.3	0.7	3.0	
		理上～礫散上砂質土	76.63	71.44	0.89	4.30	100.0	93.2	1.2	5.6	
	第3主体部	礫散上砂質土	18.98	18.50	0.09	0.39	100.0	97.5	0.5	2.0	
		小 計	211.00	200.81	1.79	8.40	100.0	95.2	0.8	4.0	
		合 計	398.47	377.85	3.35	17.27	100.0	94.8	0.9	4.3	
		理上～硬質粘質土	15.46	13.87	0.24	1.35	100.0	89.7	1.6	8.7	
		硬質粘質土	10.43	10.20	0.03	0.20	100.0	97.8	0.3	1.9	
	南側	理上～梢底付近砂質土	9.80	9.20	0.10	0.50	100.0	93.9	1.0	5.1	
		小 計	35.69	33.27	0.37	2.05	100.0	93.2	1.0	5.8	
		1 tr	理上～梢底付近砂質土+敷土	3.33	3.20	0.03	0.10	100.0	96.1	0.9	3.0
		2 tr	理上～硬質粘質土	28.60	27.50	0.30	0.80	100.0	96.2	1.0	2.8
		理上～裏込上	3.74	3.16	0.08	0.50	100.0	84.5	2.1	13.4	
	東側	小 計	35.67	33.86	0.41	1.40	100.0	94.9	1.2	3.9	
		硬質粘質土	3.90	3.68	0.02	0.20	100.0	94.4	0.5	5.1	
		理上～硬質粘質土	0.74	0.69	0.01	0.04	100.0	93.2	1.4	5.4	
		硬質粘質土	17.90	15.60	0.30	2.00	100.0	87.1	1.7	11.2	
		理上～裏込上	1.36	1.30	0.01	0.05	100.0	95.6	0.7	3.7	
	西側	硬質粘質土	8.15	7.43	0.10	0.62	100.0	91.2	1.2	7.6	
		小 計	32.05	28.70	0.44	2.91	100.0	89.5	1.4	9.1	
		理上～硬質粘質土	9.20	8.53	0.15	0.52	100.0	92.7	1.6	5.7	
		理上～梢底付近砂質土	14.90	14.00	0.20	0.70	100.0	94.0	1.3	4.7	
		小 計	24.10	22.53	0.35	1.22	100.0	93.5	1.4	5.1	
合 計(第3主体部)		127.51	118.36	1.57	7.58	100.0	92.8	1.2	6.0		

に異なっており、北側トレンチ全体は土砂が90.1%、光沢礫は1.9%、その他の礫が8.0%の含有比率を示す状況に対して、東側トレンチおよび西側トレンチ全体を見ると、土砂が94%前後、光沢礫が1.0%前後、その他の礫は5.0%前後となっている。一方、第2主体部は、主に東側トレンチと西側トレンチが中心となり、第2主体部の各トレンチの含有比率は概ね同程度の値を示している。なお、第3主体部は各トレンチの種類別ではらつきがやや目立つが、東側トレンチは土砂の占有率が比較的低くなっている。

種類間の比較

前述のとおり、第1～3主体部には5種類の土層が確認されている。木棺が設置された推定範囲を含むトレンチでは、それぞれの種類の土層が比較的まとまって存在する。ここでは、それらのトレンチを個別に取り上げて、種類別における含有比率の様相を比較検討する。

まず第1主体部では、東側2トレンチの棺底付近の砂質土を含む土層に目を向けると、98%近くを土砂が占有しており、光沢礫やその他の礫などの地山礫がほとんど含まれていない。同様の状況は比較的近い場所に設定された西側1トレンチの棺底付近の砂質土を含む土層でも確認され、棺底付近の砂質土は土砂の割合が高い傾向にあるといえる。また木棺に伴う裏込土を含む土層も、東側3トレンチや西側1トレンチで比較的土砂が多くを占めている。

第2主体部は棺内礫敷および木棺側板を据えた溝が存在する。西側1トレンチでは、木棺側板を据えた溝に堆積する砂質土の土砂の占有率は約98%でかなり高い値を示している。また西側1・3トレンチで採取した礫敷上に堆積する砂質土も、土砂が97%前後と高い占有率を示す傾向にあることが分かる。その他裏込土や硬質粘質土なども一部で土砂の含有比率が比較的高い状況を看取できる。

第3主体部では、第1・2主体部ほど顕著な特徴は認められなかったが、棺底付近の砂質土を含む土層は土砂の割合が相対的に高い含有比率を示す傾向にある。

(2) 墳丘盛土との比較検討

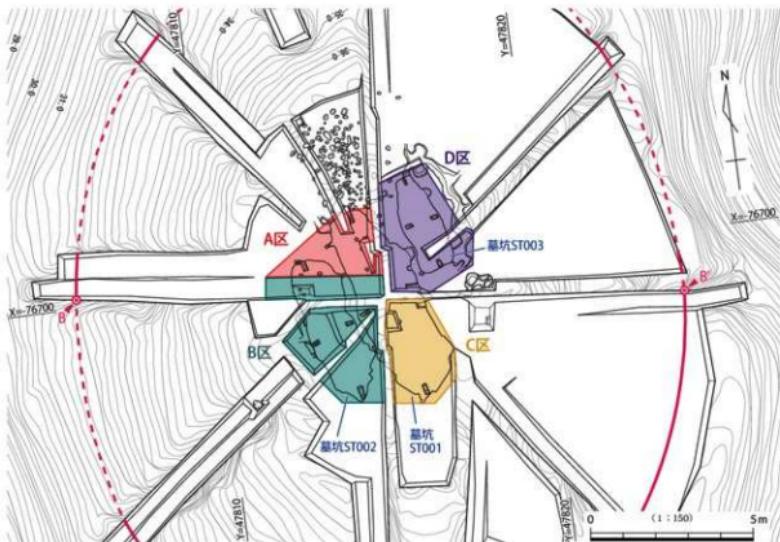
ここで、2019年度調査で分析対象とした墳丘盛土における定量分析の成果（第10表・第70図）との比較検討を行いたい。墳丘盛土の定量分析において、墳丘の外表を整えるための外表盛土は、土砂と地山礫との含有比率にばらつきが多いものの、土砂の比率が相対的に低く、地山礫のなかでもその他の礫が目立つ。その一方、各墓坑を覆うように施された墓坑盛土は地山礫の割合が低く、土砂が95%前後で占有することを確認した。墓坑盛土の含有比率は、墓坑の部分的なトレンチで採取した墓坑埋土と同程度の値を示しており、両者は同じ地点か、あるいは比較的近い場所で採取された可能性を想定することができた。

主体部土層を対象にした今回の定量分析は、第1～3主体部の各地点に設けたトレンチから墓坑内の土層を採取している。硬質粘質土や砂質土が混在した状況が多いものの、第1主体部の北側トレンチで認められるように、盛土よりも埋土を含む土層が土砂の割合は高く、地山礫の占有率が低いと考えられ、2019年度調査の定量分析の成果を追認できた。そして今回の定量分析の結果を見ると、木棺の底面付近や礫敷上および木棺側板設置溝内の砂質土のほか、木棺に伴う硬質粘質土や裏込土などは、埋土よりもさらに土砂の割合が高い値を示す傾向にあることが分かる。

これらの内容を総合すると、外表盛土よりも墓坑盛土や墓坑内における埋土の方が土砂の含有比率が高く、墓坑内で木棺に伴う硬質粘質土や裏込土、そして棺底付近や礫敷上および棺側板設置溝内の砂質土はさらに土砂の含有比率が上昇する様相が認められると判断できる。

第10表 墳丘盛土・埋土の重量と内容物の含有比率（2019年度調査）

		重量(kg)				含有比率(%)			
		全 体	土 砂	地山礫		全 体	土 砂	地山礫	
				光沢礫	その他の礫			光沢礫	その他の礫
A区 (墓坑ST001 北側上面)	外表盛土	590.5	504.1	24.2	62.2	100.0	85.4	4.1	10.5
	墓坑盛土	360.7	343.2	4.6	12.9	100.0	95.1	1.3	3.6
	合 計	951.2	847.3	28.8	75.1	100.0	89.1	3.0	7.9
B区 (墓坑ST002 上面)	外表盛土	557.5	530.9	6.7	19.9	100.0	95.2	1.2	3.6
	墓坑盛土	866.1	830.9	9.0	26.2	100.0	95.9	1.0	3.0
	合 計	1,423.6	1,361.8	15.7	46.1	100.0	95.7	1.1	3.2
C区 (墓坑ST001 南側上面)	外表盛土	456.6	436.8	5.4	14.4	100.0	95.7	1.2	3.2
	墓坑盛土	365.8	346.4	5.3	14.1	100.0	94.7	1.4	3.9
	合 計	822.4	783.2	10.7	28.5	100.0	95.2	1.3	3.5
D区 (墓坑ST003 上面)	外表盛土	116.9	109.3	2.2	5.4	100.0	93.5	1.9	4.6
	墓坑盛土	61.8	58.5	0.8	2.5	100.0	94.7	1.3	4.0
	合 計	178.7	167.8	3.0	7.9	100.0	93.9	1.7	4.4
C ~ D区	外表盛土	362.5	342.1	5.5	14.9	100.0	94.4	1.5	4.1
-	その他盛土	19.5	18.4	0.3	0.8	100.0	94.4	1.5	4.1
-	墓坑埋土	170.1	162.1	2.3	5.7	100.0	95.3	1.4	3.4
総 計		3,928.0	3,682.7	66.3	179.0	100.0	93.8	1.7	4.6



第70図 墳丘盛土の分析対象範囲（2019年度調査）

5 分析結果の考察とまとめ

これまでに確認してきた主体部埋土の定量分析の結果を整理しつつ、その内容について若干の考察を加えていきたい。

(1) 分析結果の考察

まず、主体部間での含有比率について、第1・3主体部は概ね同率の様相であるのに対して、第2主体部は土砂の割合が全体的に高いことが判明した。こうした点から、第1・3主体部と第2主体部は異なる地点の地山の掘削土を利用した可能性を考えた。今回の調査のなかでは、第1～3主体部の構築状況は棺材を固定する裏込土や棺を密閉する硬質粘土が敷設されるなど共通点も多く、同一の技術体系のなかで構築されたと想定した。その一方で、第2主体部にのみ棺内礫敷が施されて組合式木棺の型式学的特徴も異なるため、共通した主体部構築の技術体系のなかにおいても、第2主体部は意図的に作り分けられていた蓋然性が高く、それが主体部土層における内容物の含有比率の違いにも反映されている可能性が指摘できる。

次に主体部の各トレンチからみた地点間の比較では、第1主体部において概ね東側トレンチと西側トレンチの方が北側トレンチよりも土砂の含有比率が高い状況にあると確認した。東側トレンチと西側トレンチは木棺の設置推定範囲を一部含んでおり、第1主体部は木棺に伴う範囲において地山礫をあまり含まないものを意図的に選定したかもしれない。

そして種類間の比較を確認すると、棺底付近および礫敷上の砂質土は土砂の割合が高い傾向にあることを把握したほか、木棺側板を据えた溝に堆積した砂質土の土砂の占有率も同様に高い値を示すことが明らかになった。木棺側板を据えた溝内には、腐朽した棺材が多く含まれていたと想定され、周辺の埋土などに由来する地山礫の混入が極端に少なかった状況を具体的に反映していると推測できる。また、棺底付近の砂質土や棺内の礫敷上の砂質土は、棺材の腐朽により棺内に流入した土砂の含有比率の高い棺材付近の硬質粘土および裏込土や棺材の一部を多く含むため、地山礫の含有比率が低く、土砂が占有する含有比率として具体的に示されている可能性が高いと考えられる。

(2) まとめと今後の課題

今回の定量分析では、内容物の土砂や地山礫の含有比率をもとに主体部土層の特徴や様相を検討した。主体部土層の定量分析の有効性は、今後さらなる検証が必要であるが、一定の成果が得られた。具体的には、棺底付近の砂質土や棺側板を据えた溝内の砂質土が、他よりも土砂の占有率が相対的に高いという結果は、埋葬施設の木棺が具体的な痕跡として確認できない場合にも、土層の内容物の定量分析からその位置をある程度推定することが可能になることを示唆する。

出雲平野周辺は、古墳時代後期になると複雑な墳丘構造や葬送儀礼と関連する埋葬施設が確認されており⁽²⁾、墳丘盛土や主体部土層の定量分析によって墳丘構造や埋葬施設の新たな一側面に照射できる可能性が見込まれる。今後は、詳細な定量分析の手法を磨き上げ、また自然科学分析の成果を援用しつつ、分析の可能性を広げることが必要である。

(幡中光輔)

註

- (1) 主体部の墓坑内に堆積する土層の特徴を把握する目的で行う定量分析の有効性を向上させるには、今後さらに分析事例を増やすして追究する必要がある。
- (2) 具体的には、出雲平野中央部に立地する古墳時代後期の今市大念寺古墳（出雲市今市町）は、墳丘が版築状の盛土で構築されており、複雑な築造技術が採用されている（川上編 1988）。また、同じく古墳時代後期の国富中村古墳（出雲市国富町）では、石室が厳重に密閉されて再生阻止儀礼を含めた複雑な葬送過程が想定されている（坂本編 2012）。

参考文献

- 川上 稔編 1988『史跡今市大念寺古墳保存修理事業報告書』出雲市教育委員会
- 坂本豊治編 2012『中村1号墳』出雲市の文化財報告 15 出雲市教育委員会
- 幡中光輔 2021「常楽寺柿木田1号墳の墳丘盛土の定量分析」『常楽寺柿木田古墳群－常楽寺柿木田1号墳の調査－』一般国道（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・出雲市の文化財報告 46 出雲市教育委員会 83～88頁

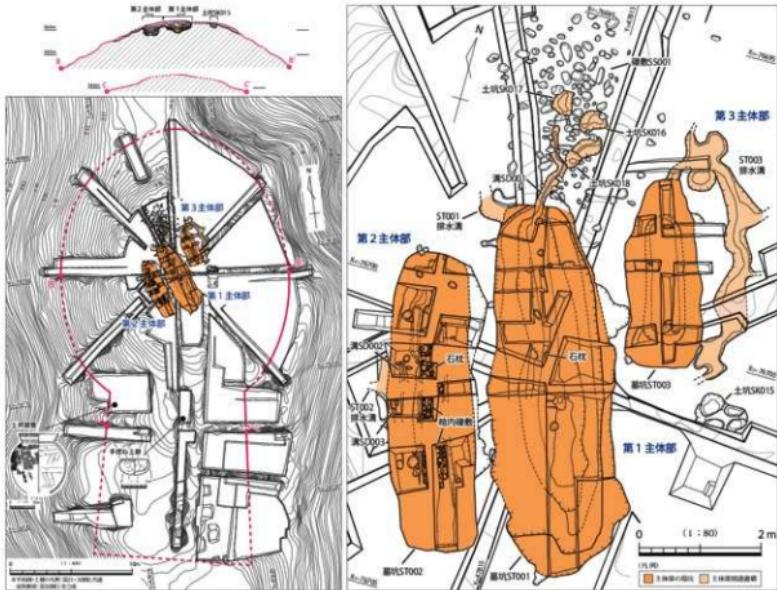
第2節 出雲平野周辺における古墳時代前半期の埋葬施設と棺内碟敷

1 はじめに

出雲平野の西南部にある神西湖南岸地域は、古墳時代前半期に古墳の築造が盛んに行われた地域である。これまで、豊富な副葬品や棺内碟敷が確認された古墳時代前期末頃の山地古墳（出雲市神西町）や、当時出雲地方で最大級の規模を誇る古墳時代中期中葉から後葉頃の前方後円墳である北光寺古墳（出雲市東神西町）の存在が知られていた。

こうした状況のなか、常楽寺柿木田1号墳の発掘調査が行われ、古墳の墳丘構造や埋葬施設の様相を把握することができた。具体的には、常楽寺柿木田1号墳は古墳時代前期末から中期初頭に築かれた全長最大で約35mの前方後円墳であり、後円部に確認された3つの主体部のうち、第2主体部で棺内に碟敷を備えた埋葬施設を持つことが確認され（第71図）、出雲平野周辺における古墳時代前半期の様相を紐解く重要な位置づけにあることが明らかになった。

本稿では、常楽寺柿木田1号墳における主体部の内容確認調査の成果を踏まえ、出雲平野周辺における古墳時代前半期の埋葬施設や棺内碟敷の様相に注目し、常楽寺柿木田1号墳の歴史的位置づけについて検討を行いたい。



第71図 常楽寺柿木田1号墳の墳丘全体図（左）と主体部全体図（右）

2 神西南岸地域の古墳時代前半期の埋葬施設

古墳時代前半期の出雲平野周辺は、古墳時代前期中葉頃から複数の古墳が神西南岸地域に展開する状況となっている(第72図)。まずは神西南岸地域において調査が行われた主要な古墳を中心に、この地域の埋葬施設や棺内繕敷の様相を整理する。



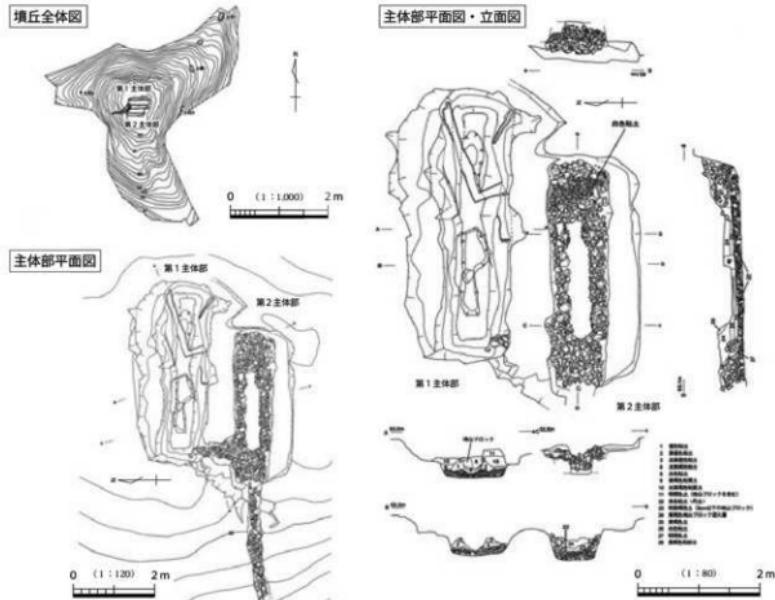
第72図 出雲平野周辺の古墳時代前半期における古墳分布と変遷

(1) 浅柄II古墳（出雲市知井宮町、古墳時代前期中葉頃）

古墳時代前半期の早い段階では、前期中葉頃に築造された可能性のある浅柄II古墳が神西湖湖南岸地域の東西に連なる丘陵東側の尾根上に存在する⁽¹⁾（第73図左上）。発掘調査によって墳丘は地山の地形を利用した削り出して最大で20×16m前後の方墳と想定されており（川原編2005）、墳頂部には墳丘主軸と直交して主軸方位が揃った2つの主体部を設けている状況が確認された（第73図左下）。

主体部に伴う副葬品は第1主体部で鉄剣が出土したのみであったが、主体部の埋葬施設の構造は、第1主体部に粘土櫛と割竹形木棺が採用され、第2主体部は礫櫛と組合式木棺が用いられるなど、櫛構造の異なる埋葬施設が並行して造られている点が注目される。また両主体部の排水溝は連結して構築されており、第1主体部が築かれた後に第2主体部が設けられたと想定されているが、両主体部の時期差はそれほどなく、墳丘上に計画性を持って主体部を構築したことが分かる。なお、第2主体部から墳丘西側斜面に向かって排水溝が設けられ、内部には礫が充填されている。

また、第1主体部と第2主体部は、墓坑床面全体に2~10cm程度の扁平な礫が厚み6~15cm程度で充填されている（第73図右）。特に第1主体部では割竹形木棺の設置や、排水機能を持たせるために中央部分をU字状に窪めて丁寧に構築されていた状況が確認されている。これらは埋葬施設全体の下部構造として墓坑床面に敷設された礫敷であり、常楽寺柿木田1号墳で認められた木棺の底板に代替される棺内の礫敷とは性格が異なる⁽²⁾。

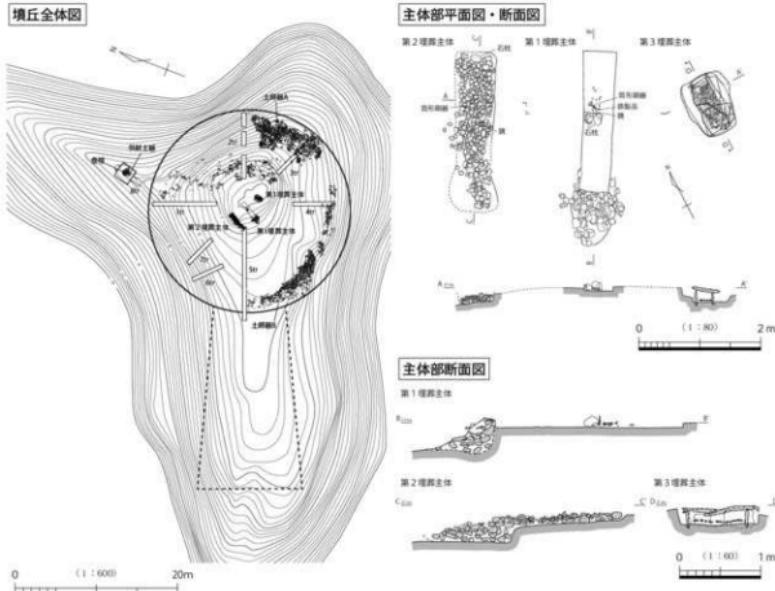


第73図 浅柄II古墳の墳丘と主体部

(2) 山地古墳（出雲市神西湖町、古墳時代前期末頃）

当時の神西湖の想定水域に近接する丘陵上に築かれた山地古墳は、古墳時代前期末頃に造られたと考えられる古墳であり、丘陵地形を利用した地山の削り出しと盛土によって墳丘が形成されている。発掘調査の結果、24mの円墳であると報告されているが（川上編 1986）、円墳から西側に伸びる平坦面を前方部として捉えることも可能であり（幡中 2023）、その場合は最大で約45mの前方後円墳の可能性を持つ（第74図左）。墳丘上には3つの主体部が構築されており、第1・2主体部では豊富な副葬品が認められ、仿製鏡や菅玉のほか、全国的にも事例が限られる筒形銅器が出土した（第74図右上）。山地古墳の被葬者はこの地域一帯を束ねる盟主的な存在であったと推察され、古墳の立地からも当時の神西湖を舞台とした水上交通において重要な役割を担っていた可能性が高い。

主体部の埋葬施設としては、第1・2埋葬主体が組合式木棺、第3埋葬主体は板石で構成される箱式石棺が採用されており、第1・2埋葬主体の南側には地山を掘り窪めて砾を充填させた排水施設を持つ（第74図右下）。注目されるのは、第2・3埋葬主体で棺内の底面にそれぞれ特徴の異なる礫敷が認められる点である。第3埋葬主体の礫敷は1～5cm程度の円礫を用いて一段で構成され、礫敷下の墓坑底面上には棺台としての敷土が認められる。一方、第2埋葬主体では5～10cmの大粒平な円礫が三～四段程度重なりを持って概ね10cm前後の厚みで構築されており、礫敷の構造にやや違いが生じている。第2埋葬主体の礫敷は、中央付近に木棺の仕切り板痕跡が認められる状況（幡中



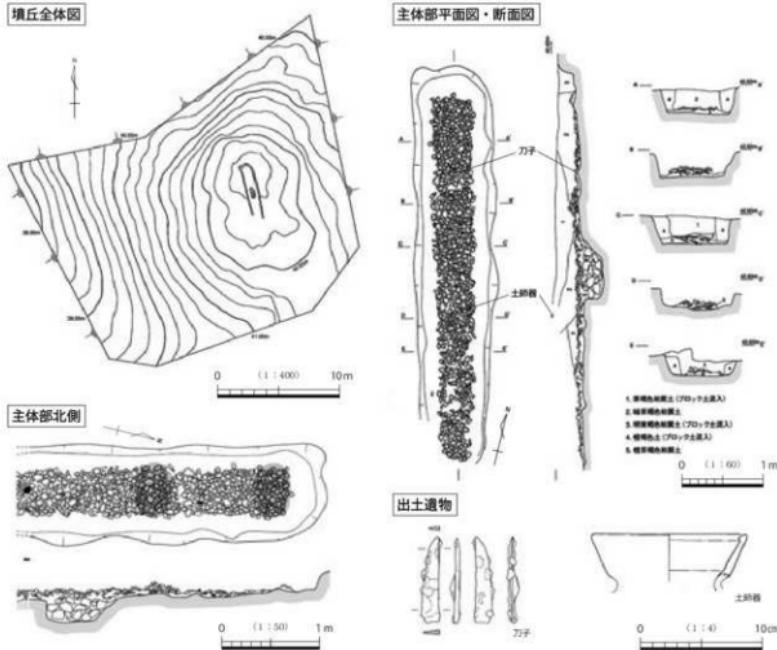
第74図 山地古墳の墳丘と主体部

2023)を勘案すれば、礫敷が底板の代替として敷設されたと考えられ、また多段に積み重ねられた礫の構造状況や、墓坑床面に勾配が設けられて主体部南側の排水施設と連結する構造を考慮すると、埋葬施設の排水機能も同時に担っていた可能性が想定される。

(3) 間谷東古墳(出雲市知井宮町、古墳時代前半期～中期初頭頃)

間谷東古墳は浅柄II古墳や浅柄北古墳が立地する丘陵上に築かれ、周辺には複数の古墳が築かれている。墳丘規模は概ね15m程度の円墳であることが調査成果のなかで報告されており(鷹山・曾田編2008)、墳丘頂部には主体部が1つ確認されている(第75図左上)。主体部の調査では内部から刀子が出土したほか、主体部上の盛土から布留系の土師器甕が出土しており(第75図右下)、常楽寺柿木田1号墳と同時期頃の古墳時代前半期から中期初頭頃に築造されたと推定できる。

主体部の埋葬施設には5～10cm程度の扁平な円礫を用いて一段または二段程度で構成された礫敷が展開する(第75図左下・右上)。内法長が3m以上で棺内底面に礫敷を持ち、棺内が2区画以上に区切られる「奥才型木棺」の要件(赤澤2002)を満たす。墓坑底面には橙茶褐色粘質土が敷設されてその上に礫敷が構築されることから、橙茶褐色粘質土は礫敷台として機能したと考えられる。また礫敷は木棺の仕切り板で3つの空間に区切られ、北側区画(長さ約1.1m)と中央区画(長さ約2.0m)



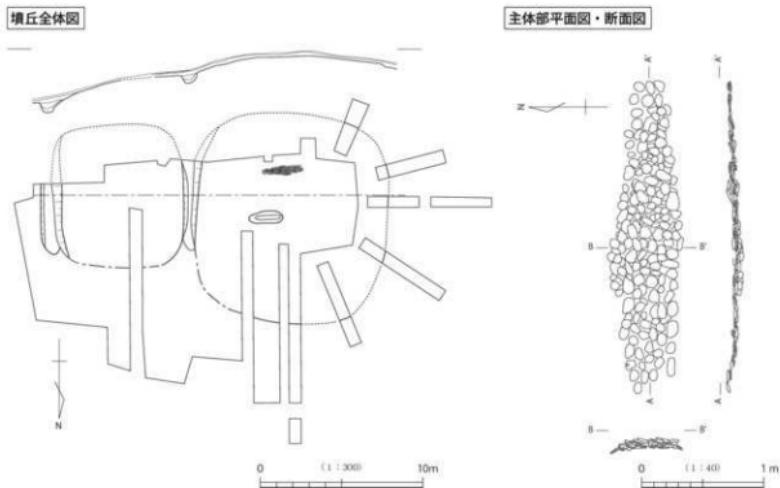
第75図 間谷東古墳の墳丘と主体部・出土遺物

の北端は礫が厚く積み上げられて枕状に盛り上がる。特に中央区画の盛り上がり付近の礫は周辺のものよりも一回り大きく、常楽寺柿木田1号墳の第2主体部で確認した状況に照らし合わせれば、石枕として機能した可能性が高いと考えられる。なお墓坑床面の中央付近では、礫敷の石材と明らかに区別される拳大の亜角礫を充填した墓坑内小土坑を設けている。構築状況から明確な埋葬痕跡は認められず、また排水機能も期待できないことから、埋葬施設や排水施設とは別の機能を持つ何らかの祭祀関連の施設であったと想定されている。

(4) 神待山1号墳（出雲市東神西町、古墳時代中期前半頃）

神待山古墳群は山地古墳が立地する丘陵の南側にある独立した丘陵上に築かれており、円墳が2基、方墳が2基で構成されている（出雲市教育委員会編1993）。このうち神待山1号墳は一辺約12mの方墳であり、墳頂部南側の主体部に礫敷が築かれている状況（第76図）が示されている（川原1992）。その他の遺構に関する詳細な内容は不明であるが、墳頂部中央付近には長円形で約2.1m程度の土坑があり、中央部に埋土が半円形に堆積するほか、その下には木炭が充填されて床面に焼土が認められる状況が報告されている⁽³⁾。

主体部の礫敷は、10cm前後の扁平な円礫で構成されており、断面状況を見ると概ね一段あるいは二段程度で円礫が敷き詰められている状況を把握できる。また礫敷中央からやや東側には礫を積み上げて枕状の高まりを設けている箇所が確認でき、常楽寺柿木田1号墳や間谷東古墳と同様に石枕として構築された可能性がある。副葬品は出土しておらず、報告では古墳時代中期頃の築造と推定されている。なお、礫敷の敷設状況から判断すれば、間谷東古墳や常楽寺柿木田1号墳と類似しており、中期のなかでも両古墳と比較的近い時期に造られたと考えられる。



第76図 神待山1号墳の填丘と主体部

(5) 周辺の古墳（古墳時代前～中期）

これまで神西湖南岸地域の埋葬施設に礫床や棺内器物を用いた古墳を取り上げて詳しく検討してきたが、同地域にはその他にも多くの古墳が存在しており、古墳時代前半期において埋葬施設がある程度把握できる古墳の様相を簡潔に整理しておきたい。

浅柄古墳（出雲市知井宮町、古墳時代前期頃）

浅柄北古墳の南に位置する丘陵上には浅柄古墳が存在しており、古墳の埋葬施設に箱式石棺が採用されている（大谷・池田 1972）。箱式石棺は複数の頁岩の板石を組み合わせて造られ、石棺内には20～30代と考えられる女性の人骨が確認されている。副葬品などは確認されていない。

石棺床面は20～30cmの大いな小石板が全面的に敷き詰められている状況が報告され、石棺の底板が設置されていたと考えられる。詳細な時期比定は難しいが、報告された箱式石棺の構築状況は山地古墳の第3埋葬主体の様相と類似しており、古墳時代前期頃の所産と考えておきたい。

浅柄北古墳（出雲市知井宮町、古墳時代前期後葉頃）

浅柄北古墳は、浅柄Ⅱ古墳から北に向かった丘陵東端部の尾根上に築かれている。墳頂部は削平を受けており明瞭ではないが、古墳の立地から丘陵の地形を活かした地山の削り出しで墳丘が構築されたと推察される。発掘調査の結果、浅柄北古墳は最大で12m程度の墳丘規模を持つと想定され、墳丘上からは土器棺が2基確認された⁽⁴⁾（今岡編 2009）。墳頂部が削平されており、墳丘中央の主体部は確認されていないが、墳丘東側斜面には石棺に伴うと考えられる板石が認められ、石棺の存在が想定されていた。よって、主体部の埋葬施設は箱式石棺と土器棺が設けられたと考えられる⁽⁵⁾。

浜井場2号墳（出雲市東神西町、古墳時代中期頃）

浜井場古墳群は、間谷東古墳の東側に位置して丘陵先端部に築かれる。古墳群を構成する1・2号墳のうち、2号墳の発掘調査が行われた。調査では、一辺が約12m程度の方墳であり、墳丘は地山の削り出しで成形され、墳頂部に二段掘りの墓坑を持つ主体部が確認された（岸編 2005）。主体部からは直刀、刀子、石鎌などの鉄製品が出土しており、築造時期は古墳時代中期頃と想定されている。

その他に注目されるのは、墓坑底面に拳大から20cm程度の礫が充填されている状況であり、埋葬施設として木棺が据えられたと考えられているが、浅柄Ⅱ古墳の埋葬施設の礫床や常楽寺柿木田1号墳などの棺内の礫敷とは様相が異なる。主体部に排水溝は確認されておらず、十分な排水機能を担っていたとは想定しにくい。被葬者の埋葬などに伴う葬送儀礼に関連した遺構の可能性がある。

丁之内古墳（出雲市東神西町、古墳時代中期頃）

丁之内古墳は、浜井場古墳群よりもさらに西側の丘陵先端部にあり、当時の神西湖の想定水域に接する位置にある。これまでに発掘調査が行われ、墳丘は一辺約10m程度の方墳と想定されたほか、木棺が据えられたと考えられる主体部が墳頂部に1つ確認されている（川上編 1981）。主体部からは鉄剣と鉄鎌束が出土しており、古墳時代中期頃の築造として推定されている。

なお、丁之内古墳の西側には古墳内遺跡（出雲市東神西町）が存在しており、墓坑と副葬品の鉄鎌および砥石が確認されている。墓坑には木棺を固定した深さ5cm程度の掘り込みが認められた（川上編 1981）。丁之内古墳との類似性から古墳時代中期頃のものと考えられている（岸編 2005）。

柿木田古墳（出雲市湖陵町、古墳時代前～中期頃）

柿木田古墳は大正時代の開墾によって発見された古墳であり、常楽寺川の西に位置して神西湖に注ぐ姉谷川の右岸にある丘陵上に立地する。古墳は直径が約11mの円墳で、直刀が出土したとされるが詳細は不明である。また埋葬施設は箱式石棺で、床面には礫敷あるいは石敷が存在したとされている（野坂編2000、西尾・野坂2000）。現段階では推測の域を出ないが、山地古墳の第3埋葬主体のように底板の代用として礫敷が展開していた可能性が考えられる。

雲部3号墳（出雲市湖陵町、古墳時代中期前半）

雲部古墳群は神西湖南側の丘陵上に築かれた古墳群で、1号墳は直径約6mの円墳、2号墳は方墳、3号墳は最大で約14mの楕円形墳、4号墳は墳形が不明であるが、一辺10mの規模を持つ古墳として報告されている（野坂編2000、西尾・野坂2000）。古墳時代中期前半頃の築造と考えられる3号墳は埋葬施設に凝灰岩製の舟形石棺が採用され、棺の奥には造り付けの枕が彫り込まれていた。

3 出雲平野周辺の埋葬施設と階層構造

これまで神西湖南岸地域の主要な古墳における埋葬施設の特徴を整理してきた。そのなかで、礫床や棺内の礫敷を持つ主体部のほか、排水溝などの関連施設についても礫が主体的に用いられる様子が確認された。そのなかで、常楽寺柿木田1号墳や山地古墳では墳頂部に複数の主体部を設けているが、棺内礫敷が必ずしも社会的に優位な主体部に伴わない可能性が考えられた（第3章第4節）。よって、これまでに確認してきた神西湖南岸地域の様相を踏まえ、古墳時代前半期の出雲平野周辺における埋葬施設の様相を把握しつつ、そこから見えてくる主体部の階層構造の変遷を検討する。

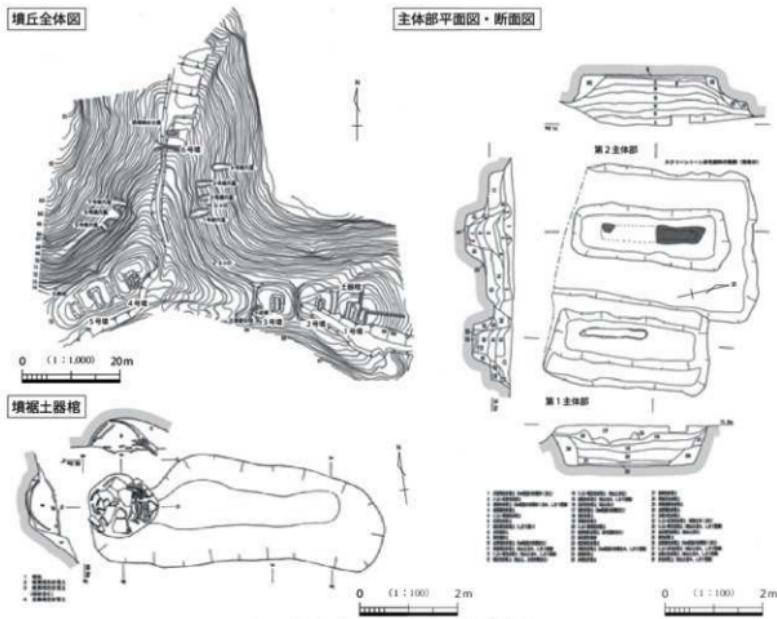
（1）古墳時代前期初頭～前葉の埋葬施設

土井・砂1号墳（第77図）

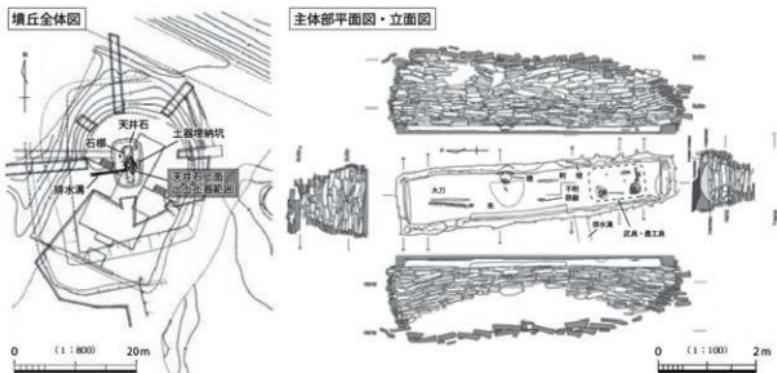
古墳時代前期初頭の埋葬施設の様相は、斐伊川支流の赤川南岸の丘陵上に立地する土井・砂古墳群（雲南省加茂町）で確認できる。土井・砂古墳群は6基の方墳で構成され、このうち1号墳と5号墳で複数の埋葬施設が設けられている（田原・仁木ほか編2001）。ここで1号墳に注目すると、墳頂部中央には埴丘主軸に直交するように第1・2主体部が並列して配置されている。第1主体部は組合式木棺、第2主体部は剖抜式木棺で内部から破鏡が出土しており、また第2主体部の棺内底面には赤色顔料が塗布されていた。第2主体部は第1主体部を一部削して構築され、墓坑の規模は第2主体部の方が大きいものの、想定される棺の規模にはそれほど差がなく、両主体部が墳頂部中央に配置されている。そのため、副葬品から判断して第2主体部が社会的に優位な位置を占めていたと想定できる。なお、同様の傾向は5号墳の主体部でも確認することができ、埴丘主軸に直交して配置された第1・2主体部には位置関係の社会的な優劣は認められない。

神原神社古墳（第78図）

古墳時代前期前葉に単数の主体部を埴丘上に構築する事例として斐伊川支流の赤川南岸沿いの丘陵上に築かれた神原神社古墳（雲南省加茂町）が注目される。神原神社古墳の主体部は埴丘主軸に沿って墳頂部に配置される。埋葬施設は粘土櫛を伴う竪穴式石棺が認められ、その上に剖竹形木棺を設置



第77図 土井・砂1号墳の埴丘と主体部



第78図 神原神社古墳の埴丘と主体部

する構造となる（蓮岡ほか編 2002）。また豊富な副葬品を持ち、鐵鎌や素環頭刀などの武具、鐵斧や鉄鎗、鐵針などの農工具が確認されているほか、「景初三年」銘三角縁神獸鏡が出土しており、近畿地方と繋がりを持つ有力な首長墓であると考えられる。また石櫛の西壁面には礫を充填した排水溝が墳丘斜面側に向かって設けられている。

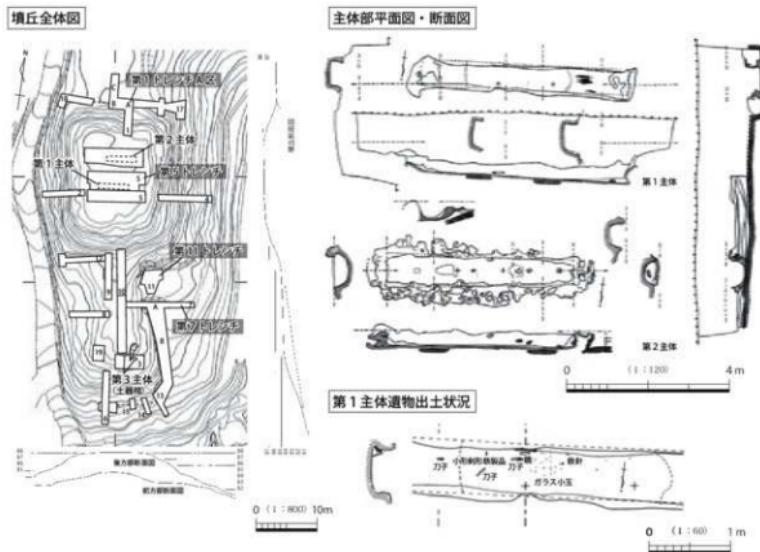
(2) 古墳時代前期中葉の埋葬施設

松本1号墳（第79図）

古墳時代前期中葉頃の埋葬施設の様相は、斐伊川水系の三刀屋川左岸の丘陵尾根上に立地する前方後方墳の松本1号墳（雲南省三刀屋町）から把握でき、主体部は後円部上に2つ、前方部には1つ確認されている（山本編 1965、出雲考古学研究会編 1991）。後円部上の第1・2主体は、墳丘の主軸に直交して後円部上に並列する形で配置され、第1・2主体は粘土櫛を持ち、第1主体は組合式木棺、第2主体は割竹形木棺が採用される。副葬品は、第1主体から獸帶鏡が出土したほか、小形剣形鉄製品や刀子・鉄針のほか、ガラス小玉が豊富に出土しており、鉄劍や鉄製品および管玉が1点ずつしか確認されていない第2主体の副葬品を凌駕する。また主体部の規模に大きな差ではなく、副葬品から第1主体に社会的な優位性を認めることができる。なお、前方部の第3主体は土器棺であり、内部に副葬品などは認められず、後円部上に築かれた第1・2主体に対して社会的な優位性は低いと考えられる。

浅柄II古墳（第73図）

古墳時代前期中葉頃の埋葬施設を持つ浅柄II古墳は、第1主体部が粘土櫛と礫床、第2主体部が礫櫛と礫床で構成されており、また両主体部の排水溝を連結させて主体部外側に続く排水溝へと繋げ、それらの内部には礫を充填するなど、神原神社古墳の排水溝と構造が類似しており、かなり緻密に造り込まれた印象を受ける。なお、第1主体部と第2主体部の規模は、第1主体部が若干大形であるものの差はそこまで拡大せず、墳丘の中心に第1・2主体部が墳丘主軸に直交して並列に配置される。



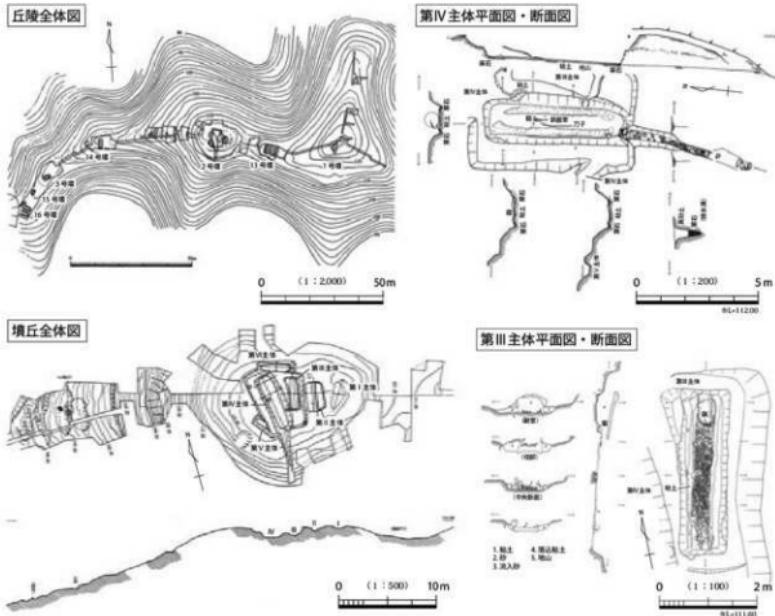
第79図 松本1号墳の墳丘と主体部

また、主体部配置では明確な差異は認められないが、副葬品は第1主体部から鉄剣が1点出土しており、埋葬施設は粘土櫛と礎床を伴う割竹形木棺が第1主体部に採用されたことも踏まえると、第2主体部よりも第1主体部の方が社会的な優位性は高かったと推測される。

(3) 古墳時代前期後葉～末葉頃の埋葬施設

斐伊中山 2 号墳（第 80 図）

古墳時代前期後葉の埋葬施設の様相は、斐伊中山2号墳（雲南省本次町）から看取できる。斐伊中山2号墳は、斐伊川流域付近の丘陵尾根上に形成された斐伊中山古墳群の一部をなす方墳であり（第80図）。6つの主体部を持ち、そのうち第Ⅲ～VI主体は重複しつつも、一体的な墓坑内部に構築されている（杉原・藤原編 1993）。排水溝の内部は礫が充填され、浅柄II古墳の主体部に伴う排水溝と構造が類似する。なお、第IV主体の埋葬施設は粘土櫛を持つ割竹形木棺で、最も規模が大きい。第III主体の埋葬施設は粘土櫛と棺内に礫敷を伴う奥才型木棺であり、第IV主体に次ぐ規模を持つ。その他の主体部は組合式木棺の埋葬施設であったと考えられる。また主体部の配置は、墳丘の中心に第Ⅲ・IV主体が設けられるが、他の主体部は墳丘主軸とは連動せずに第Ⅲ・IV主体の周辺を囲うように構築される。また第IV主体の副葬品は鳥文鏡や刀子、鉄鎧や鉄製品が認められるが、第III主体は鉄鎧のみが出土した。これらを総合すると、副葬品のほかに主体部の規模や配置にも社会的な優劣が生じており、



第80図 斐伊中山2号墳の墳丘と主体部

第IV主体が最も社会的地位が高く、礫敷を持つ奥才型木棺の第III主体部はそれに次ぐ位置づけにあつたと考えられる。なお、出雲平野周辺では、斐伊中山2号墳の第III主体の奥才型木棺が現在のところ棺内礫敷が出現する初期段階の埋葬施設である。

山地古墳（第74図）

古墳時代前期末頃に比定できる山地古墳は3つの主体部が墳頂部に設けられ、第1埋葬主体および第2埋葬主体は組合式木棺であり、第2埋葬主体は棺内に礫敷を備える。第3埋葬主体は棺内に礫敷を伴う箱式石棺が構築されている。第1・2埋葬主体では排水溝を持たないが、地山を掘り窪めて礫を充填した排水施設を持つ。また墳丘の中心には第1埋葬主体が設けられ、その両脇に第2・3主体部が構築されている。主体部の規模は第1埋葬主体が最も大きく、第2埋葬主体がそれに続き、第3埋葬主体は最も規模が小さい。また副葬品は第1・2埋葬主体で認められ、特に第1埋葬主体でその種類が豊富であったことを前項で確認した。こうした点から、副葬品の種類や数量、主体部の規模や配置による階層構造が展開していたと考えられ、第1埋葬主体は礫敷を持つ第2・3埋葬主体よりも社会的な優位性が高かった可能性がある（幡中2023）。

（4）古墳時代前期末～中期初頭頃の埋葬施設

間谷東古墳（第75図）

間谷東古墳は墳丘上に単独で主体部が設けられており、主体部の内法長が3m以上で棺内に礫敷を伴い、2区画以上の空間を持つ奥才型木棺が設けられている。副葬品は刀子のみで、主体部上の盛土から土師器を確認した。また墓坑中央には礫敷の石材と異なる亜角礫を充填した小土坑が認められるが排水機能は期待できず、何らかの祭祀関連の施設であることが想定されている。間谷東古墳が立地する丘陵周辺には、浜井場2号墳や丁之内古墳などの木棺を伴う単独の主体部を設けた古墳が存在するが、そのなかでも棺内礫敷を持つ埋葬施設や奥才型木棺は確認できず、間谷東古墳の被葬者は、古墳が立地する丘陵周辺で上位クラスの有力な存在であったことを示唆する。

常楽寺柿木田1号墳（第71図）

常楽寺柿木田1号墳は墳丘上に主体部が3つ確認され、後円部の墳頂部に並列して配置される。第1～3主体部は組合式木棺で、各主体部に伴う副葬品は確認できなかったが、第2主体部にのみ棺内に礫敷が認められた。また第1主体部では排水溝と異なる導水機能を持つ溝SD001が墓坑に連結し、その上部に盛土と礫敷SS001が展開する構造となるため、葬送儀礼に関連する施設であった可能性が考えられた。墳頂部中央に最も規模の大きい第1主体部が配置され、第1主体部の西側には次に規模が大きい第2主体部、東側に最も小形の第3主体部が構築されている。よって、主体部の規模や配置から勘案すると、第1主体部が社会的な優位性が高く、次いで第2主体部、そして第3主体部という位置づけが想定される。

（5）古墳時代中期の埋葬施設

古墳時代中期は埋葬施設の様相が具体的に明らかになった古墳はそれほど多くはないが、1つの主体部による単独埋葬が目立つようになり（池澤2007）、北光寺古墳（出雲市東神西町）の主体部と考えられる舟形石棺をはじめ、多様な石棺が認められる。棺内礫敷を持つ主体部は、間谷東古墳や常楽寺

柿木田1号墳と比較的近い時期に造られた可能性のある神待山1号墳や、常楽寺柿木田1号墳の近くに築かれた柿木田古墳で認められる。

そのなかで、穴道湖南岸地域において古墳時代中期前半頃に出現する組合式家形石棺を持つ軍原古墳（斐川町莊原）が注目される。詳細は不明であるが石棺の底板が存在せず、代わりに碟を敷き詰めた厚さ約27cm程度の碟敷を持つことが知られている（西尾・大國1991、大谷1994・1996a・1996b・2012）。また同地域の中後葉頃には碟敷と想定される埋葬施設を2基確認した小丸子山古墳（出雲市斐川町）が確認されている（穴道編1992）。古墳時代中期には出雲平野における古墳の分布の中心は穴道湖南岸地域に移動するが、この地域において棺内の碟敷が連綿と継承されている様子を読み取ることができる。

4 出雲平野周辺の棺内碟敷を持つ古墳の位置づけ

（1）主体部の階層構造と棺内碟敷

これまで出雲平野周辺の埋葬施設の変遷に合わせて主体部の階層構造の様相を確認し、そのなかでの棺内碟敷の位置づけについても検討を重ねてきた。その内容を踏まえ、出雲平野周辺の様相を整理しつつ（第11表）、常楽寺柿木田1号墳を含めた棺内碟敷を持つ埋葬施設の位置づけを考察したい。

古墳時代前期中葉頃までは、主体部に伴う副葬品の優劣によって社会的な優位性を看取できる傾向が強く、それらの主体部には割竹形木棺に代表される例抜式木棺が採用される場合が多い。その一方で、主体部の大きさや墳頂部での配置における社会的な差異は見出しがたい。

そうした状況は前期後葉から末葉に変容すると考えられ、副葬品の格差に加えて主体部の規模や配置が社会的な優位性を示す要素として付加された可能性が高い。出雲平野周辺ではこの時期に棺内碟敷を持つ埋葬施設の出現が明らかになったが、棺内碟敷は各主体部のなかでも上位クラスの埋葬施設に設けられるものの、最上位の主体部には副葬品のほかに主体部の規模や配置に社会的な優位性が表象され、棺内碟敷は必須条件ではないことが斐伊中山2号墳や山地古墳の様相から読み取ることができる。そうした状況下において、常楽寺柿木田1号墳は前期末から中期初頭頃に構築され、第1～3主体部のなかで棺内碟敷は第2主体部に採用されるが、主体部の配置や規模は第1主体部に優位性が認められる。

一方、常楽寺柿木田1号墳と概ね同時期頃に構築された間谷東古墳は、棺内碟敷を備えた奥才型木棺の埋葬施設である。主体部が単独で設営されているものの、丘陵周辺で単独の主体部を持つ他の古墳と比較すると上位に位置づけられる。この時期以降は単独の主体部を持つ古墳が多くなるが、そのなかで碟敷が採用される様相は、中期の古墳分布の中心となる穴道湖南岸地域でも認められる。

（2）排水溝の展開と変容

また、棺内への碟敷とともに注目されるのは、碟を用いた排水溝の様相である。主体部の墓坑から主体部外への排水を目的とする排水溝は、内部に碟が充填されて構築されている。古墳時代前期前葉の神原神社古墳で設けられた排水溝は、後続する浅柄II遺跡や斐伊中山2号墳において類似した構造で構築され、前期後葉まで連綿と造られてきたと考えられる。ところが、前期末頃の山地古墳では、

第11表 出雲平野周辺における古墳時代前半期の主要な古墳の埋葬施設一覧

地名	上 号 年 西 古 西	名 称	所 在 地	立 地	標高 (m)	頂面面積 (m ²)	全 高 (m)	内表 施設	主 体 部				文 章	
									墳丘上部調 (石室・土室の有無)	石 室	規 模 (m ²)	埋葬施設	開削方法	
布留式	(草原 6.0m 大式、 小谷 1.5m)	上井 1号墳	雲南市加茂町	石鍋上	71	方墳	10×10	—	單室 (石室・土室の有無)	第1主室体	3.4×1.81±1.0	側面式石棺	—	國研・仁木は少編(2001)
		上井 2号墳	雲南市加茂町	石鍋上	71	方墳	9×8	—	單室 (土室の有無)	第2主室体	4.2×3.22±1.0	側面式石棺	底面底部 (ベンセラ付直)	國研・仁木は少編(2001)
		上井 3号墳	雲南市加茂町	石鍋上	71	方墳	9×8	—	單室 (内側調)	第3主室体	1.5×1.3	側面式石棺	—	國研・仁木は少編(2001)
		上井 4号墳	雲南市加茂町	石鍋上	77	方墳	9×9	—	單室	—	3.8×2.8	側面式石棺	—	國研・仁木は少編(2001)
		上井 5号墳	雲南市加茂町	石鍋上	76	方墳	13×8	—	單室 (内側調)	第1主室体	3.2×2.4	側面式石棺	底面底部 (ベンセラ付直)	國研・仁木は少編(2001)
	草原 4.0m 大式、 小谷 1.5m	上井 6号墳	雲南市加茂町	石鍋上	70	方墳	11×10	—	單室	—	2.9×1.62±1.0	側面式石棺	—	國研・仁木は少編(2001)
		草原 7号墳	雲南市加茂町	石鍋上	55	方墳	7×7	—	單室 (石室・土室の有無)	第1主室体	1.2×1.2	側面式石棺	—	國研・仁木は少編(2001)
		草原 8号墳	雲南市加茂町	石鍋上	57	方墳	17×12	—	單室 (石室・土室の有無)	第2主室体	0.5×0.5	側面式石棺	—	國研・仁木は少編(2001)
		草原 9号墳	雲南市加茂町	石鍋上	65	方墳	19×17	—	單室	—	4.6×2.4	側面式石棺	—	國研(2003)
		草原 10号墳	雲南市加茂町	石鍋上	35	方墳	20×26	—	單室	—	7.5×4.6	側面式石棺	—	國研・仁木は少編(2002)
布留上古式	小谷 2式	草原神社古墳	雲南市加茂町	石鍋上	88	方墳後方墳	50	—	單室 (内側調)	第1主室体	5.0×6.0	側面式石棺	石室・底面底部 (ベンセラ付直)	國研・仁木は少編(2002)
		草原 1号墳	雲南市三万町	石鍋上	99	方墳後方墳	52	—	單室	—	7.5×4.6	側面式石棺	石室・底面底部 (ベンセラ付直)	國研(1991)
		草原 2号墳	雲南市三万町	石鍋上	62	方墳?	20×16	—	單室 (石室・土室の有無)	第2主室体	7?	側面式石棺	—	國研(1991)
		茂柄若古墳	出雲市加井町	石鍋上	49	方墳?	—	—	單室 (石室・土室の有無)	第3主室体	?	側面式石棺	—	國研(1991)
		茂柄若古墳	出雲市加井町	石鍋上	49	方墳?	—	—	單室 (石室・土室の有無)	第4主室体	?	側面式石棺	—	國研(1991)
	小谷 3式	茂柄若古墳	出雲市加井町	石鍋上	33	円墳	12	—	單室	—	1.0×1.0	側面式石棺	—	國研(2009)
		茂柄若古墳	出雲市加井町	石鍋上	49	方墳	23×18	—	單室 (石室・土室の有無)	第1主室体	6.0×3.0?	側面式石棺	—	國研(2000)
		茂柄若古墳	出雲市加井町	石鍋上	39	方墳後方墳	52	—	單室 (石室・土室の有無)	第2主室体	4.3×1.9	側面式石棺	—	國研(2006)
		茂柄若古墳	出雲市加井町	石鍋上	110	方墳	15×12	—	單室 (石室・土室の有無)	第3主室体	3.8×1.5	側面式石棺	—	國研(2005)
		茂柄若古墳	出雲市加井町	石鍋上	38	方墳	10×8	—	單室	—	6.0×6.0	側面式石棺	—	國研(2005)
布留乙式古	小谷 2式	内谷 1号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	單室	—	4.3×1.8	側面式石棺	—	國研(2006)
		内谷 2号墳	出雲市大津町	石鍋上	29	方墳	9×9	—	單室?	—	4.2×1.52±1.0	側面式石棺	底面底部 (ベンセラ付直)	國研(2006)
		内谷 3号墳	出雲市大津町	石鍋上	42	円墳	15	—	中心	—	7.0×4.1	側面式石棺	—	國研(2006)
		内谷 4号墳	出雲市大津町	石鍋上	37	方墳後方墳	35	—	中心	—	3.2×0.64±1.0	側面式石棺	—	國研(2006)
		内谷 5号墳	出雲市大津町	石鍋上	38	方墳	10×8	—	中心	—	2.6×0.7±1.0	側面式石棺	—	國研(2006)
	小谷 3式	内谷 6号墳	出雲市大津町	石鍋上	29	方墳	9×9	—	中心	—	4.0×1.8	側面式石棺	—	國研(2006)
		内谷 7号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	中心	—	4.0×1.8	側面式石棺	—	國研(2006)
		内谷 8号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	中心	—	4.0×1.8	側面式石棺	—	國研(2006)
		内谷 9号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	中心	—	4.0×1.8	側面式石棺	—	國研(2006)
		内谷 10号墳	出雲市大津町	石鍋上	30	円墳	10	—	中心	—	3.2×0.64±1.0	側面式石棺	—	國研(2006)
中型斜坡式	大式	内谷 1号墳	出雲市大津町	石鍋上	45	円墳	16	—	单室?	—	7?	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 2号墳	出雲市大津町	石鍋上	46	円墳	11	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 3号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	7?	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 4号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	7?	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 5号墳	出雲市大津町	石鍋上	37	方墳	10×8	—	单室?	—	2.8×2.1	侧壁式石棺	—	國研(2006)
	TK2232	内谷 6号墳	出雲市大津町	石鍋上	37	方墳	9×9	—	单室?	—	4.0×1.8	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 7号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	15	—	单室?	—	4.0×0.8	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 8号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	15	—	单室?	—	4.0×0.8	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 9号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	15	—	单室?	—	4.0×0.8	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 10号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	15	—	单室?	—	4.0×0.8	侧壁式石棺	—	國研(2006)
中型斜坡式	TK216	内谷 1号墳	出雲市大津町	石鍋上	45	円墳	16	—	单室?	—	7?	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 2号墳	出雲市大津町	石鍋上	46	円墳	11	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 3号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	7?	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 4号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
中型斜坡式	ON46	内谷 5号墳	出雲市大津町	石鍋上	45	円墳	16	—	单室?	—	7?	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 6号墳	出雲市大津町	石鍋上	46	円墳	11	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 7号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 8号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
中型斜坡式	TK208	内谷 9号墳	出雲市大津町	石鍋上	43	円墳	32	—	单室?	—	7?	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 10号墳	出雲市大津町	石鍋上	39	方墳	30×30	—	单室?	—	7?	侧壁式石棺	—	國研(2006)
中型斜坡式	TK217	内谷 11号墳	出雲市大津町	石鍋上	45	円墳	16	—	单室?	—	7?	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 12号墳	出雲市大津町	石鍋上	46	円墳	11	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
中型斜坡式	TK2232	内谷 13号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	7?	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 14号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
中型斜坡式	TK2232	内谷 15号墳	出雲市大津町	石鍋上	37	方墳	10×8	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 16号墳	出雲市大津町	石鍋上	37	方墳	9×9	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
中型斜坡式	TK2232	内谷 17号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 18号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
中型斜坡式	TK2232	内谷 19号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 20号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
中型斜坡式	TK2232	内谷 21号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 22号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
中型斜坡式	TK2232	内谷 23号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 24号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
中型斜坡式	TK2232	内谷 25号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 26号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
中型斜坡式	TK2232	内谷 27号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 28号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
中型斜坡式	TK2232	内谷 29号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 30号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
中型斜坡式	TK2232	内谷 31号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 32号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
中型斜坡式	TK2232	内谷 33号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 34号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
中型斜坡式	TK2232	内谷 35号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 36号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
中型斜坡式	TK2232	内谷 37号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
		内谷 38号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	國研(2006)
中型斜坡式	TK2232	内谷 39号墳	出雲市大津町	石鍋上	40	円墳	26	—	单室?	—	2.8×2.3	侧壁式石棺	—	

排水溝ではなく地山を掘り窪めて礫を充填した排水施設を構築しており、構造に違いが生じていることが分かる。

そして、その様相がさらに顕著になるのが、山地古墳に後続する前期末から中期初頭の常楽寺柿木田1号墳の第1主体部である。第1主体部に構築された溝SD001は主体部の墓坑と連結しているものの、墓坑側が低くなるほか、溝SD001上に敷設された盛土の上面に縄敷SS001が設けられており、礫と溝で構成される施設であるが排水機能を持たない。また、同時期頃の間谷東古墳では墓坑中央付近に地山を掘り窪めて礫を充填した小土坑を設けており、山地古墳の排水施設と構造が似ている一方で、排水機能は期待できない。これらは葬送儀礼や祭祀関連の施設と考えられ、前期前葉からの排水溝の系譜を継承しながらも時期を経て構造に変化が生じるなかで、施設が果たす機能自体も次第に変容していくことを具体的に示していると考えられる。

5 棺内縄敷の展開と出雲平野周辺の地域性

(1) 西日本における棺内縄敷の分布の特徴

ここで、西日本における棺内縄敷の空間分布状況を確認しておきたい(第81図)。棺内に縄敷を持つ埋葬施設は、奥才型木棺を中心に日本海沿岸地域で広く分布する。そのなかでも、主に島根・島根東部や近畿地方北部、九州地方北部でまとまって確認されており、日本海沿岸の水上交通による地域間の交流や交易などを具体的に示していると考えられる(赤澤2002、岩本2003・2010)。

なお、分布のなかで箱式石棺に伴う縄敷を持つ埋葬施設は比較的広域に展開しているが、奥才型木棺および組合式木棺における縄敷を持つ埋葬施設は、ある程度限定された地域でまとまる傾向を示している。こうした状況について、時期差や地域差を反映する可能性を含めて地域ごとにさらに詳しく検討を進める必要がある。



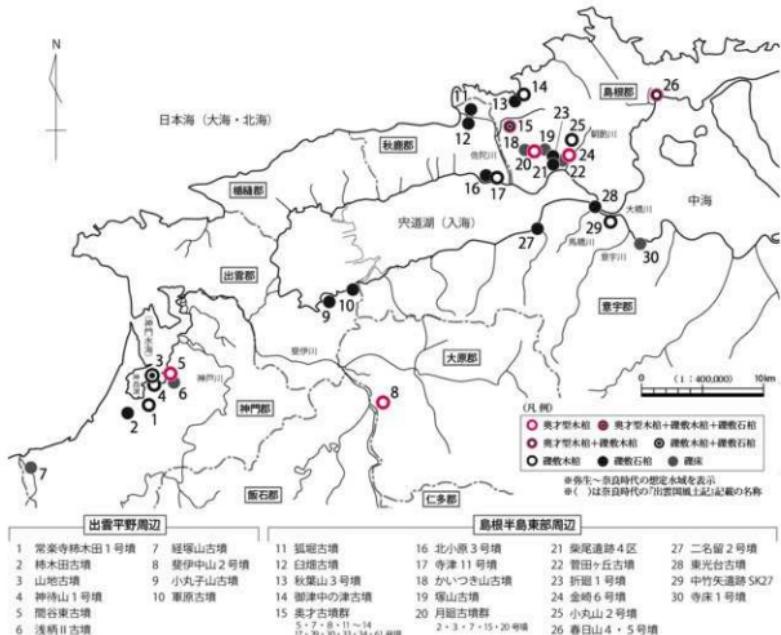
第81図 西日本における棺内縄敷の分布状況

(2) 出雲地方の東西差からみた地域性

出雲地方のなかでは、島根半島東部と神西湖南岸地域で棺内碟敷が展開する(第82図)。特に棺内碟敷の埋葬施設が卓越する島根半島東部では、奥才古墳群の様相が詳細に検討されており、主体部規模や墳頂部での位置関係のほか、棺内碟敷を設けた主体部は碟敷を持たない主体部よりも社会的な優位性が高い傾向にあることが示されている(岩本2022)。

その一方で、今回検討した出雲平野周辺における棺内碟敷の様相を見ると、棺内への碟敷は墳丘上に複数の主体部が構築される場合には、ある程度上位クラスの埋葬施設に設けられるものの、最上位の主体部の埋葬構造には副葬品に加えて主体部の規模や配置が優先され、棺内碟敷は必須条件ではない状況が看取られる。つまり、埋葬施設の構成要素である棺内碟敷は各地で位置づけや役割が異なっていたと考えられ、埋葬施設の地域性の一侧面を示している可能性が指摘できる⁽⁶⁾。

島根半島東部は古い時期から奥才型木棺が確認され、特に奥才古墳群では棺内に碟敷を備えた箱式石棺から奥才型木棺を含む組合式木棺への変遷がスムーズに理解でき、奥才型木棺は島根半島の主体性を示すことが指摘されている(岩本2022)。水上交通による交流や交易によって古墳時代前期後葉から末葉頃に出雲平野周辺に受容された棺内碟敷は、この地域で展開していた前期中葉までの埋葬施設の構造に組み込まれて波及するなかで、地域独自の階層構造が主体的に構築されたと考えられる。



第82図 出雲地方における棺内碟敷の展開

6 まとめと今後の課題

常楽寺柿木田1号墳の第2主体部で確認した棺内縄敷を中心に、埋葬施設の変遷とともに主体部の階層構造に伴う位置づけを検討してきた。そのなかで、出雲平野周辺の棺内縄敷は、古墳時代前期後葉頃に出現し、複数の主体部が構築される場合には上位クラスの埋葬施設に設置されるが、最上位の主体部には棺内縄敷は必ずしも伴わず、副葬品や主体部の規模および配置によって社会的な優位性が表象される状況が認められた。これらは埋葬施設の地域性の一端を示すとともに、当時の神西湖を舞台とした水上交通による日本海沿岸の他地域との交流や交易で受容された棺内縄敷がこの地域の埋葬施設に組み込まれ、古墳時代前期後葉から中期初頭における地域独自の階層構造のなかに包摂された可能性が考えられる。

常楽寺柿木田1号墳が造られた古墳時代前半期から中期初頭頃は、弥生時代後期後葉から継続する墳丘上の葬送儀礼の様式が時期的に変容することから、既存の思想や概念が変容して新たな秩序のもとに社会が再編される状況を読み取った（幡中2021）。こうした動向は、排水溝の変容と展開にも見て取れる。当初の排水溝から徐々に構造が変化し、最終的には導水を伴う葬送儀礼や祭祀関連へと機能が変容する様子は、社会の再編が徐々に進行するなかで、新たな価値づけや意味合いの変化が生じたことを具体的に反映する可能性があり、古墳時代中期の集落で水辺の祭祀が盛行する状況（池澤2008）を含めて当時の葬送儀礼や祭祀の様相を総合的に検討していく必要がある。このような社会の転換期が、地の利を活かした水上交通による遠隔地との交流・交易のなかで棺内縄敷を主体的に受容し、地域独自の階層構造として展開することを促したと考えられる。

これらを総合的に捉えると、常楽寺柿木田1号墳の埋葬施設や葬送儀礼は、弥生時代の伝統的な系譜を残す古墳時代前期から新たな秩序をもとに社会が再編される古墳時代中期への過渡的な様相を具体的に反映すると考えられる。そのため、今後は棺内縄敷の構造や地域性を様々な視点から検討し、常楽寺柿木田1号墳が築かれた古墳時代前半期の様相をさらに明らかにすることが求められる。

（幡中光輔）

註

- (1) 山陰自動車道建設に伴い浅柄II遺跡の発掘調査が行われたなかで古墳が確認されており、その調査で見つかった古墳を浅柄II古墳としている（川原編2005）。
- (2) 木棺に伴う「棺内縄敷」と埋葬施設全体の下部構造である「縄床」の差異については、岩本崇氏からご教示をいただいた。
- (3) 土坑の主軸方向は縄敷と揃っており、これが主体部の墓坑であるとすれば、墳頂部に複数の主体部が設けられていた可能性が高い。
- (4) 浅柄北古墳の近くには古墳時代後期の横穴墓が8基設けられ、それに伴う後背墳丘も2基認められる。また浅柄北古墳は墳丘上に須恵器などの横穴墓に伴うとみられる土器群が確認されており、後背墳丘として古墳時代後期にも利用されたと考えられる（今岡編2009）。
- (5) 浅柄北古墳から比較的近い位置に立地する浅柄古墳は、板石の組み合わせで箱式石棺が造られており、浅柄

北古墳も同様に板石で構成された箱式石棺が構築されていた可能性が考えられる。

- (6) なお近畿地方北部では、棺内蝶敷を持つ組合式木棺は比較的幅広い階層で受容されながらも相対的には高いランクに位置づけられ（岩本 2010），奥才型木棺は首長墳に積極的に採用されたと考えられている（岩本 2022）。

参考文献

- 赤澤秀則 2002「小結」『奥才古墳群第8支群 県道御津東生馬線改良工事に伴う調査』鹿島町教育委員会 53～60頁
- 池田満雄 1972「古墳とその時代」『斐川町史』斐川町教育委員会 92～117頁
- 池淵俊一 2007「山陰における方形区画墓の埋葬論理と集団関係」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター 117～143頁
- 池淵俊一 2008「古墳時代中期前半の遺構・遺物に関する諸問題」『九景川遺跡』一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 島根県教育委員会 294～313頁
- 池淵俊一 2015「出雲の古墳編年について」『前方後円墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター研究論集第14集 島根県古代文化センター 19～32頁
- 出雲考古学研究会編 1991『松本古墳群—斐伊川流域の前期古墳をめぐって—』古代の出雲を考える 7
- 出雲市教育委員会編 1993『出雲市遺跡地図』
- 今岡一三編 2009『御崎谷遺跡・間谷東遺跡・浅柄北古墳・間谷西Ⅱ遺跡・間谷西古墳群』一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 島根県教育委員会
- 岩本 崇 2003「棺内蝶敷をもつ組合式箱形木棺」『大手前大学史学研究所紀要』第3号 大手前大学史学研究所 1～20頁
- 岩本 崇 2010「棺内蝶敷をもつ組合式箱形木棺補論」『史跡 茶すり山古墳 総括編』一般国道483号北近畿 豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書VII・兵庫県文化財調査報告第383冊 兵庫県教育委員会 507～518頁
- 岩本 崇 2018「古墳出土土器をめぐって 副葬品と埴輪による前期古墳広域編年」「前期古墳編年を再考する」六一書房 137～148頁
- 岩本 崇 2022「いわゆる「奥才型木棺」と古墳時代の集団関係」『社会文化論集 島根大学法文学部紀要』第18号 島根大学法文学部社会文化学科 71～90頁
- 内田律雄・曳野律夫・松本岩雄 2018「出雲市斐川町神庭岩船山古墳墳丘測量報告」『島根考古学会誌』第35集 島根考古学会 21～38頁
- 大谷晃二 1994「斐川町軍原古墳について（上）」「八雲立つ風土記の丘」No.127 島根県立八雲立つ風土記の丘 7～8頁
- 大谷晃二 1996a「斐川町軍原古墳について（中）」「八雲立つ風土記の丘」No.136 島根県立八雲立つ風土記の丘 4～7頁
- 大谷晃二 1996b「斐川町軍原古墳について（下）」「八雲立つ風土記の丘」No.137 島根県立八雲立つ風土記の丘 2～5頁
- 大谷晃二 2012「出雲市斐川町軍原古墳について（続）」「八雲立つ風土記の丘」No.209 島根県立八雲立つ風土

記の丘 2～5頁

大谷従二・池田満雄 1972『出雲・浅柄古墳』『島根県埋蔵文化財調査報告書』第IV集 島根県教育委員会 61～63頁

景山真二・曾田辰雄編 2008『玉泉寺裏遺跡・浜井場4号墳・間谷東古墳』一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II 島根県教育委員会

川上 稔編 1981『出雲車両基地建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』出雲市教育委員会

川上 稔編 1986『山地古墳発掘調査報告書』出雲市教育委員会

川上 稔・松山智弘・湯村 功・米田美江子編 1993『簸川南地区広域営農団地農道整備事業に伴う西谷15・16号墓発掘調査報告書』出雲市教育委員会

川原和人 1992『出雲市・神侍山2号墳出土の備前埴』『松江考古』第8号 松江考古学談話会 121～123頁

川原和人編 2005『畠ノ前遺跡・菅原I遺跡・クボ山遺跡・菅原II遺跡・菅原III遺跡・廻田V遺跡・保知石遺跡・浅柄II遺跡・柳ノ内I遺跡』山陰自動車道鳥取益田線(穴道～出雲間)建設に伴う埋蔵文化財調査報告書2 島根県教育委員会

岸 道三編 2005『浜井場古墳群発掘調査報告書』出雲市教育委員会

坂本豊治編 2006『西谷墳墓群－平成14年～16年度発掘調査報告書－』出雲市教育委員会

穴道年弘 1990『島根県東部における古墳時代前半期の群集小墳について』『島根考古学会誌』第7集 島根考古学会 95～100頁

穴道年弘編 1992『島根県斐川町 遺跡分布調査報告書』斐川町文化財調査報告10 斐川町教育委員会

杉原清一・藤原友子編 1993『斐伊中山古墳群－西支群－』本次町教育委員会

第13回播磨考古学研究集会実行委員会編 2012『前期古墳からみた播磨徹底討論 前期古墳編年と社会動向－第13回播磨考古学研究集会資料集』

田中 大 2016『出雲市神庭岩船山古墳出土の円筒埴輪』『古代文化研究』第24号 島根県古代文化センター 19～24頁

田原淳史・仁木 晴・和田康宏編 2001『湯の奥遺跡 登安寺遺跡 湯後遺跡 土井・砂遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12 島根県教育委員会

中国四国前方後円墳研究会編 2014『前期古墳編年を再考する－広域編年再構築の試み－ 発表要旨集・資料集』中国四国前方後円墳研究会第17回研究集会

中国四国前方後円墳研究会編 2019『中期古墳研究の現状と課題Ⅲ～埋葬施設の形式・構築方法・儀礼の地域的展開と被葬者像～ 発表要旨集・資料集成』中国四国前方後円墳研究会第22回研究集会

仁木 晴編 2005『大寺1号墳発掘調査報告書』島根県古代文化センター調査研究報告書29 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

仁木 晴編 2007『北光寺古墳発掘調査報告書』島根県古代文化センター調査研究報告書36 島根県教育庁文化財課古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

仁木 晴 2014『出雲西部の豪族たち』『後の五王と出雲の豪族 ヤマト王権を支えた出雲』島根県立古代出雲歴史博物館企画展図録 島根県立古代出雲歴史博物館 160～162頁

- 西尾克己・大國晴雄 1991『出雲平野の古墳』出雲市民文庫9 出雲市教育委員会
- 西尾克己・野坂俊之 2000『古墳時代の遺跡』『湖陵町誌』湖陵町 219～230頁
- 野坂俊之編 2000『湖陵町遺跡図録』湖陵町教育委員会
- 萩 雅人編 2003『長瀬遺跡(Vol.2)・権現山古墳』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XVII
島根県教育委員会
- 蓮岡法暉 1984「加茂町の古代(古代1)」『加茂町誌』加茂町 39～62頁
- 蓮岡法暉・勝部 昭・松本岩雄・宮沢明久・西尾克己・山崎 修編 2002『神原神社古墳』加茂町教育委員会
- 幡中光輔 2021「出雲平野周辺の墳丘上における葬送儀礼の場とその変遷」『常楽寺柿木田古墳群－常楽寺柿木田1号墳の調査－』一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・出雲市の文化財報告 46 出雲市教育委員会 89～106頁
- 幡中光輔編 2021『常楽寺柿木田古墳群－常楽寺柿木田1号墳の調査－』一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・出雲市の文化財報告 46 出雲市教育委員会
- 幡中光輔 2023「山地古墳の再検討」「出雲弥生の森博物館研究紀要」第11集 出雲弥生の森博物館 1～14頁
- 花谷 浩 2011「西谷15・16号墳について」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第1集 出雲弥生の森博物館 29～43頁
- 藤永照隆編 2000『西谷墳墓群－平成10年度発掘調査報告書－』出雲市教育委員会
- 本庄考古学研究室 1986「出雲の主要古墳一覧」「山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題」山本清先生 喜寿記念論集刊行会 639～657頁
- 松江市史編集委員会編 2012『松江市史 史料編2 考古資料』松江市
- 松山智弘 2002「出雲における墳墓の変遷」『神原神社古墳』加茂町教育委員会 243～249頁
- 松山智弘 2018「地域の画期と社会変動 山陰」「前期古墳編年を再考する」六一書房 311～322頁
- 宮本正保編 2019『常楽寺柿木田古墳群－弥生時代集落の調査－』一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5 島根県教育委員会
- 山本 清編 1965『松本古墳調査報告』島根県教育委員会
- 米田美江子編 2001『池田古墳－一畑バス営業所用地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』出雲市教育委員会
- 挿図出典**
- 第72図・第11表：池澤2015、岩本2018、松山2018をもとに編年を作成 第73図：川原編2005から引用して加筆 第74図：川上編1986、幡中2023から引用して加筆 第75図：景山・曾田編2008から引用して加筆 第76図：川原1992を再トレースして作成 第77図：田原・仁木ほか編2001から引用して加筆 第78図：蓮岡ほか編2002から引用して加筆 第79図：山本編1965、出雲考古学研究会編1991から引用して加筆 第80図：杉原・藤原編1993から引用して加筆 第81・82図：赤澤2002、第13回播磨考古学研究集会実行委員会編2012、松江市史編集委員会編2012、中国四国前方後円墳研究会編2014・2019、岩本2022をもとに作成

第6章 結語

常楽寺柿木田1号墳の主体部の内容確認調査は、古墳の主体部保護および今後の整備・活用を見据えて周辺地域における古墳の歴史的位置づけを明確にする目的で実施した。具体的には、後円部の墳頂部に築かれた第1～3主体部を対象に複数のトレンチを設定して発掘調査を行い、内部構造や構築状況を把握した。ここでは、これまでの発掘調査の成果や分析成果などを整理して結語としたい。

1 主体部の構築状況（第3章第2節）

第1主体部は墳頂部中央に設けられ、二段の墓坑の掘り込み底面から上段の掘り込み面まで敷土が施される。埋葬施設は組合式木棺で、墓坑中央には石枕を確認した。棺外に礫敷SS001と盛土下の溝SD001が確認され、葬送儀礼などに関連した導水施設の可能性がある。

第2主体部は、第1主体部の西側に位置する。埋葬施設は組合式木棺であり、墓坑の底面には敷土が存在し、その上面に扁平な円礫を整然と敷き詰めた棺内の礫敷が認められた。礫敷は木棺底板の代替として捉えられる。また礫敷北側の上面には石枕が確認でき、その北側にある仕切り板痕跡を挟んで小形の礫による礫敷が展開する。この空間には副葬品などが配置された可能性が考えられた。

第3主体部は、第1主体部の東側に構築されている。第1主体部と同様に二段の墓坑の掘り込み底面から上段の掘り込み面まで敷土が施され、上面には埋葬施設の組合式木棺が配置されたと考えられる。墓坑の北東端部から南東端部を囲うようにST003排水溝が設けられ、排水機能とともに墳丘上で主体部の区画を明示する役割を持つと想定される。

第1～3主体部からは副葬品などは確認できなかったが、木棺の小口板付近や側板部分の上部付近には木棺を密閉する目的で施された硬質粘質土が共通して認められた。硬質粘質土の施工は粘土層を志向した可能性が考えられる。

2 出土遺物の特徴（第3章第3節）

今回の主体部の内容確認調査に伴う出土遺物は少ない。2019年度調査の埋戻土からは土師器の甕（第3章第3節第41図1）が出土しており、2010年度試掘確認調査（宮本編2019）で確認された土師器の甕と同時期頃の所産と考えられる。その他には、第1主体部北側の溝SD001中央部の土坑SK018内から出土した岩脈の脈石（第3章第3節第41図2）や、礫敷SS001の一部に転用されていた縄文時代後期以降の石製品（第3章第3節第41図3）を確認した。

3 主体部の構築過程（第3章第4節）

第1～3主体部は、墳頂部で第1主体部を中心に並列して設けられるが、重複関係は確認できず、計画的に配置された可能性が高い。土層堆積状況から、第1・2主体部の墓坑内には同時期頃に埋土が充填され、その後に墳丘の盛土が施されたと考えられるため、第1・2主体部の構築は概ね同時期

頃であったと推定される。

一方、第1主体部の溝 SD001 は隣接する第3主体部北側にまで及んでいないため、第1主体部に伴う溝 SD001 の位置を避けて第3主体部が構築されたと考えられ、第1主体部の構築後に第3主体部が設けられた可能性がある。

4 古墳の構築過程（第3章第4節）

今回の調査で確認した主体部の構築状況は、2019年度調査で確認された墳丘の構築状況や葬送儀礼の各段階（幡中2021）のなかに位置づけて総合的に整理することができる。まず地山を削り出して墳丘を成形し、その後に主体部を構築している。第1～3主体部はそれほど時間を置かずに設けられた可能性が高い。またこの段階で、第1主体部南側の空間や北側の溝 SD001 および土坑 SK018 などは葬送儀礼に関する施設として機能した可能性がある。

主体部の墓坑内に埋土が充填された後に墳丘盛土を施しており、具体的には墓坑全体を覆う墓坑盛土と後円部上面の外表を整えるための外表盛土が確認できる。墳丘盛土の完了後には第1主体部北側の盛土上に礫敷 SS01 が構築される。

また、前方部やくびれ部周辺でミニチュアの手捏ね土器や土師器甕が出土しており、墳丘の構築が完了した段階やその前後の時期にこれらの場所で葬送儀礼が行われたと推測される。

5 棺構造と階層構造（第3章第4節）

第1～3主体部の埋葬施設は組合式木棺で、第1・3主体部と第2主体部で構造が異なっている。組合式木棺の分類案（岩本2022）を参照すると、第1・3主体部は墓坑内に棺材を設置するための溝を持たないが、断面U字形の掘り込みを持つため、組合式1b類に近い2類に相当する。第2主体部は墓坑内に棺材設置の溝があり、底面の断面形は箱形状に成形されるため、組合式1a類と想定でき、型式学的には組合式1a類の第2主体部、組合式1b類に近い2類の第1・3主体部という配列が想定できる。なお、棺内礫敷の有無などの相違点はあるが、裏込土の敷設や棺の密閉を志向した硬質粘質土の施工などの共通点も多く、同一の技術体系のなかで主体部が構築されたと考えられる。

また墳頂部の中央に位置して、規模の最も大きい第1主体部が社会的な優位性が最も高く、次いで主体部の規模が大きく棺内に礫敷を持つ第2主体部、その後に主体部の規模が最も小さい第3主体部が位置づけられるという階層構造が存在した可能性が認められる。

6 第1・2主体部のPCN分析の成果（第4章第1節）

主体部に埋葬された遺体痕跡を検出するため、第1主体部の南北土層と石枕、第2主体部の礫敷および礫敷上面の土層、第2主体部の石枕上面の土層と石枕下の礫敷を対象として現地で分析試料の採取を行い、その後にPCN分析（全リン分析およびCN分析）を実施した。分析の結果、第1主体部の石枕、第2主体部の礫敷上面および石枕上面の土層、そして比較試料として同時に分析した山地古墳の石枕から高濃度のリンが検出され、遺体の痕跡を反映していると考えられる。

7 第2主体部に伴う棺内碟敷の石材の採取地（第4章第2節）

第2主体部の棺内碟敷は扁平な円碟が使用されていた。その採取地を推定するため、古墳が立地する丘陵裾を流れる常楽寺川流域周辺を踏査して河床や露頭などで石材を検討した。その結果、棺内碟敷の碟は、常楽寺川流域の礫岩層に由来する可能性が高く、崖錐堆積物から採取したか、常楽寺川河床から選択的に採取した可能性が考えられた。

8 主体部土層の定量分析とその成果（第5章第1節）

第1～3主体部で認められる主体部土層は、調査のなかで属性の異なる5つの種類（敷土、砂質土、裏込土、硬質粘質土、埋土）に分類できた。各主体部における組合式木棺の設置推定範囲やその周辺を中心に土層を探取し、主体部に伴う副葬品の有無の確認に加えて、主体部の墓坑内に堆積する土層の特徴を明らかにするため、水洗篩別を実施して内容物の定量分析を行った。

分析の結果、棺底付近の砂質土や棺側板を据えた溝内の砂質土は、他よりも土砂の占有率が相対的に高く、これは腐朽した棺材などが多く含まれていたと想定され、周辺の埋土などに由来する地山礫の混入が極端に少なかった状況を反映すると考えられた。そのため、埋葬施設の木棺が具体的な痕跡として不明瞭な場合でも、土層の内容物の定量分析からその存在を推定することが可能になる。

9 古墳時代前半期の棺内碟敷からみた常楽寺柿木田1号墳（第5章第2節）

出雲平野の西南部にあたる神西湖南岸地域は、古墳時代前半期に多数の古墳が築かれた。これまでの調査によって、常楽寺柿木田1号墳は墳頂部の中央に複数の主体部が構築されており、第2主体部では棺内に碟敷を備えた状況が認められた。そのため、常楽寺柿木田1号墳の埋葬施設は、神西湖南岸地域を含めた出雲平野周辺における古墳時代前半期の様相を紐解く重要な位置づけにあることが明らかになった。

古墳時代前半期の神西湖南岸地域の埋葬施設を見ると、前期末頃から中期前半頃にかけて棺内碟敷が連続と採用されていることが確認できた。これまで島根半島東部や近畿地方北部、九州地方北部で集中的に確認されていた棺内碟敷を取り入れた神西湖南岸地域が、当時入江であった神西湖の水上交通を活用して日本海沿岸の他地域との交流や交易が盛んであったことは想像に難くない。

また出雲平野周辺の埋葬施設の様相を俯瞰すると、棺内碟敷は古墳時代前期後葉頃に出現し、複数の主体部が構築される場合に上位クラスの埋葬施設に採用されるが、最上位の主体部には必ずしも伴わず、副葬品や主体部の規模および配置が最も社会的な優位性を表象する可能性がある。これらは埋葬施設の地域性を示すとともに、地の利を活かした水上交通による遠隔地との交流・交易のなかで受容された棺内碟敷がこの地域に展開する埋葬施設に組み込まれ、地域独自の階層構造として構築されたと推測される。こうした動向は、墳丘上の葬送儀礼の変容と同様に、弥生時代の伝統的な系譜を残す古墳時代前期から新たな秩序をもとに社会が再編される古墳時代中期への過渡的な様相を具体的に反映すると考えられる。

10 今後の課題と展望

常楽寺柿木田1号墳は、出雲平野周辺の古墳時代前半期における埋葬施設の特質を理解するうえで重要な役割を果たすことが埋葬施設の変遷や棺内碟敷の展開から明らかになった。

さらに、常楽寺柿木田1号墳の第2主体部で確認できた棺内碟敷は、当時の神西湖の水上交通を活用した日本海沿岸の他地域との交流や交易を具体的に物語っている。特に棺内碟敷を備える長大な埋葬施設の奥才型木棺（赤澤2002）の展開は、畿内中枢の王權とは別の直接的かつ個別的なつながりを背景にして展開した実態を示しており（岩本2010）。今後は各地域における棺内碟敷の様相を詳しく検討することで、当時の地域社会の実態を解明する手掛かりが得られると考えられる。

このように日本海沿岸でつながる遠隔地との交流は、古墳時代以前にも確認することができる。例えば弥生時代後期における四隅突出型埴丘墓の日本海沿岸地域での分布状況や、さらには縄文時代後晩期の北陸地方や東日本に由来する搬入土器や上偶の存在など、かなり古くから日本海沿岸ルートの地域間交流が展開していた蓋然性が高い。こうした日本海沿岸ルートの地域間交流の実態を紐解くために、様々な時代の考古資料が示す日本海沿岸の汎地域的な共通性に焦点を当て、多角的な視点から追究していく必要があると考えられる。

（幡中光輔）

参考文献

- 赤澤秀則 2002「小結」『奥才古墳群第8支群 県道御津東生馬線改良工事に伴う調査』鹿島町教育委員会 53～60頁
- 岩本 崇 2010「棺内碟敷をもつ組合式箱形木棺補論」『史跡 茶すり山古墳 総括編』一般国道483号北近畿 豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ・兵庫県文化財調査報告第383冊 兵庫県教育委員会 507～518頁
- 岩本 崇 2022「いわゆる「奥才型木棺」と古墳時代の集団関係」『社会文化論集 島根大学法文学部紀要』第18号 島根大学法文学部社会文化学科 71～90頁
- 幡中光輔 2021「小結」『常楽寺柿木田古墳群－常楽寺柿木田1号墳の調査－』一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財調査発掘調査報告書・出雲市の文化財報告 46 出雲市教育委員会 64～74頁
- 宮本正保編 2019『常楽寺柿木田古墳群－弥生時代集落の調査－』一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5 島根県教育委員会

図 版



1 古墳遠景（1）（2019年度調査前、南から神西湖と北山山系を望む）



2 古墳遠景（2）（2019年度調査前、北東から中国山地を望む）

図版 2 古墳遠景（2）



1 古墳遠景（3）（2019 年度調査後、南から神西湖と北山山系を望む）



2 古墳遠景（4）（2019 年度調査後、北東から中国山地を望む）



1 古墳遠景（5）（2021年度調査後、南から神西湖と北山山系を望む）



2 古墳遠景（6）（2021年度調査後、北東から中国山地を望む）

図版 4 古墳遠景（4）



1 古墳遠景（7）（2021年度調査後、南西から出雲平野を望む）



2 古墳遠景（8）（2021年度調査後、東から古墳立地丘陵全体を望む）



1 古墳主体部全景（1）（2021年度調査後、東から）



2 古墳主体部全景（2）（2021年度調査後、西から）

図版 6 主体部全体図



主体部全体図（オルソ画像、真上から、上が北）



1 第1主体部全景（1）（南から）



2 第1主体部全景（2）（北西から）

図版8 第1主体部(2)



1 第1主体部北側と溝 SD001・礎敷 SS001（南東から）



2 溝 SD001・礎敷 SS001（1）（南西から）



3 溝 SD001・礎敷 SS001（2）（南から）



4 溝 SD001・礎敷 SS001（3）（東から）



1 北側1・3トレンチ土層堆積状況（北東から）



2 北側1・3トレンチ・西側3トレンチ土層堆積状況（北から）



3 西側3トレンチ土層堆積状況（南西から）



4 西側2トレンチ土層堆積状況（北西から）



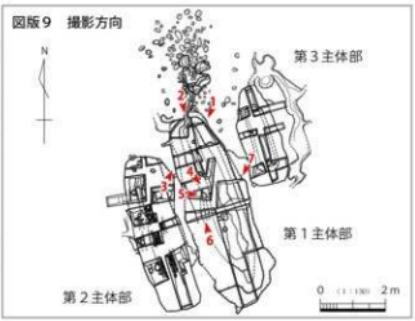
5 石枕（西側2トレンチ、西から）



6 西側1トレンチ土層堆積状況（南から）



7 東側1・2トレンチ土層堆積状況（北東から）



図版 10 第1主体部 (4)



1 南側トレンチ土層堆積状況（1）（南東から）



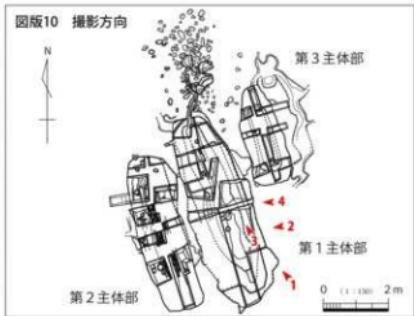
2 南側トレンチ土層堆積状況（2）（東から）



3 東側3・4トレンチ土層堆積状況（南から）



4 第1主体部調査状況（東から）





1 第2主体部全景（1）（南から）



2 第2主体部全景（2）（西から）

図版 12 第2主体部（2）



1 棺内磚敷（1）（南西から）



2 棺内磚敷（2）（北東から）



1 石枕・棺内礫敷（1）（西側1・3トレンチ、西から）



2 石枕・棺内礫敷（2）（西側1・3トレンチ北西から）



3 棺内礫敷東側（東側1トレンチ、東から）



4 棺内礫敷南側（1）（東側3トレンチ、東から）



5 棺内礫敷南側（2）（西側2トレンチ、西から）

図版 14 第 2 主体部 (4)



1 北側 2 トレンチ土層堆積状況（北西から）



2 東側 1 トレンチ土層堆積状況（北から）



3 東側 2 トレンチ土層堆積状況（北から）



4 西側 1・3 トレンチ土層堆積状況（南西から）



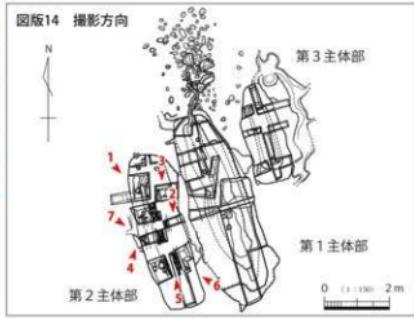
5 西側 2 トレンチ・東側 3 トレンチ土層堆積状況（南から）



6 南側 トレンチ土層堆積状況（南東から）



7 第 2 主体部調査状況（北西から）





1 第3主体部全景（1）（南から）



2 第3主体部全景（2）（東から）

図版 16 第3主体部（2）



1 第3主体部全景（3）（北東から）



2 第3主体部全景（4）（北西から）



1 北側トレンチ土層堆積状況（東から）



2 東側3トレンチ・西側3トレンチ土層堆積状況（北から）



3 東側1トレンチ・西側1トレンチ土層堆積状況（北東から）



4 南側1トレンチ土層堆積状況（東から）



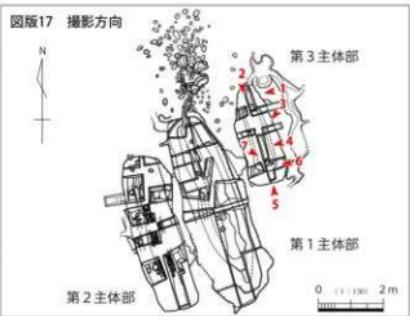
5 東側2トレンチ・西側2トレンチ土層堆積状況（南から）



6 南側2トレンチ土層堆積状況（東から）



7 第3主体部調査状況（北西から）



図版 18 調査前・埋め戻し状況・丘陵地山断面・出土遺物



1 調査前（南東から）



2 埋め戻し状況（1）（調査完了後、北東から）



3 埋め戻し状況（2）（調査完了後、西から）



4 丘陵地山断面（南から）



5 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	じょうらくじかきのきだいちごうふん					
書名	常楽寺柿木田1号墳					
副書名	主体部の内容確認調査					
シリーズ名	出雲市の文化財報告					
シリーズ番号	54					
編著者名	幡中光輔(編) 中村唯史 渡辺正巳 濑戸浩二					
編集機関	出雲市市民文化部文化財課					
所在地	〒 693-0011 島根県出雲市大津町 2760 番地 TEL (0853) 21-6618					
発行年月日	2023(令和5)年3月31日					
ふりがな	コード	北緯	東経	期間	対象面積	
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			
常楽寺柿木田 1号墳	島根県出雲市 湖陵町常楽寺 940-5 ほか	32203 (前報記述地図)	b 74	35° 18' 27" 132° 41' 33"	20210602 ～ 20211020	約 100m ² 要因 保存目的の 内容確認
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
常楽寺柿木田 1号墳	古 墳	古墳時代前期末 ～ 中期初頭頃	主体部の埋葬施設に伴う 棺内砾敷・石枕・溝	土師器 石製品	古墳時代前期末 ～中期初頭頃の 前方後円墳。第 2主体部で棺内 砾敷を確認。	
要約	<p>常楽寺柿木田古墳群は、出雲平野西南部の神西湖南岸地域に位置し、神西湖に注ぐ常楽寺川と奥ノ谷川が合流する地点の東岸の丘陵上に立地する。常楽寺柿木田1号墳は、これまでの調査によって最大で全長約35mの前方後円墳であり、古墳時代前期末から中期初頭頃に築造された可能性が確認されている。</p> <p>今回の常楽寺柿木田1号墳における主体部の内容確認調査では、後円部上に築かれた第1～3主体部の内部構造や構築状況を把握した。第1～3主体部の埋葬施設は、いずれも組合式木棺であったと想定される。第1主体部の北側には盛土上に砾敷が設けられ、それらの下部に主体部の墓坑と連結する溝が確認された。第2主体部では、墓坑中央付近の床面上に扁平な円砾が整然と敷かれており、木棺内に砾敷が展開する様相が具体的に明らかになった。また第1・2主体部は、円砾による石枕が設けられていたことを確認した。</p> <p>埋葬施設である木棺内への砾敷は、これまで日本海沿岸の島根半島東部や近畿地方北部、九州地方北部などで集中的に確認されている。常楽寺柿木田1号墳が所在する神西湖南岸地域は、当時日本海とつながる入江であった神西湖を舞台とした水上交通によって日本海沿岸の他地域との交流が盛んであった様子が読み取れる。</p>					

出雲市の文化財報告 54

常楽寺柿木田1号墳

主体部の内容確認調査

2023（令和5）年3月31日

編 集 出雲市市民文化部文化財課
〒 693-0011 烏根県出雲市大津町 2760 番地
TEL (0853) 21-6618

発 行 出雲市教育委員会
〒 693-8530 烏根県出雲市今市町 70 番地
TEL (0853) 21-6874

印刷・製本 株式会社 報光社